

---

# 先生

鈴虫

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

先生

### 【Nコード】

N8331W

### 【作者名】

鈴虫

### 【あらすじ】

高校卒業間際に私は首相を斬った。何故斬ったか。それは義の為。国の為。この国は腐敗し、社会の不平等は増すばかり。右からも左からも、誰も立たない。だから私が斬った。そして腹を切って死んだ。

しかし気がつけば黄泉の国。だがあはれこの身は地獄も入れず、異世界へと誘われる。そこで目にしたのはレーニンびつくりの超格差社会。魔法使いが魔法の使えないもの、奴隷を搾取する。そんな事がまかり通るような社会。

そこで私は赤毛の少女に出会う。彼女は私を先生々々と呼ぶ。師弟愛を超え私は師弟恋をも抱く。

もはや革命や階級の打倒や共産主義の為ではなく、赤軍の為ではなく、彼女の為に刀を振るう。その刀の白刃には彼女の赤毛が映る。刀身に映る彼女は朱き刀を抜く。

己の心持と彼女の心持ちは桜色と朱色のよう。

刀は血に飢えている。えっ私が男から女の体につ?! ちょっとお兄さん、私は女の子の体だけど男なんだよ! 病弱美少女を救え! ドタバタ美少女ラブコメディー、始まります♪

『Arcadia』なる所でも同じタイトルでやってます。

## 第一話 せんせい

打ち鳴らされる音楽。

太鼓とラッパの音。

この音楽は先生が「赤軍擲弾兵」せきぐんてきだんへいと題して作曲したもの。

一見陽気な音楽だが、そのなかに気品がある。

だが戦場で奏でられると陽気さ気品さは感じられない。

あるのは一歩も引かず、銃剣を掲げ突き進む同志達の情熱のみ。

懐かしき故郷ふるさと、「ナジウム」近郊での会戦。

なだらかな平原。

膝丈ほどの緑色の草花を踏みしめ白い服に赤色の装飾が入った服を着た男達が音楽に合わせて行進する。

そういえば先生は緑色の事を青色と呼んでいた。

何故、緑なのに青色と呼ぶのかと聞いたら、なんでかな私にも分かんよ、といっていた。

自分でも分からないのに何故青というのだろう。

いまだに分からない。先生自身がわからないのだから私には最期の時が来ても分からないだろう。

どうも最近先生のような言い回しが多くなってきたな。

私は白服の男達のほぼ中央で、日本刀やまとがたなと先生が呼んだサーベルを携えて行進している。

本来ならば後方から指揮をしなくてはならない立場だが、無理を言  
つてここに立たせてもらっている。

なぜなら私がこの手で、斬らなくてはならないから。

別に誰が命令したわけではない。戦略、戦術的に考えても、私が斬  
らなくてはならない道理は無い。

だが、私が斬るのは義理の為。  
そして理由を問いたい。

ついぞその理由を聞かず此処まで来てしまった。

もはや斬り結ぶ剣戟けんげきの中で聞くしか無い。

私の直ぐ横に、空気を引き裂く音と共に相手の20ポンド砲が着弾  
し、大地がえぐれ、肉片となった同志が飛んできた。

青々とした草花が赤く、革命の象徴の色へと変貌を遂げる。

我が軍も砲兵隊が撃ち返す。

よも四方に撃ち出す砲声は雷鳴の如く、互いの戦列に地を降らす。

副官は私に大丈夫かとしきりに問うてくる。是非も無い。大丈夫に  
決まっている。

私は理由を聞き、自らの手で斬るか斬られるかされるまで斃たおれるれるつ  
もりは無い。

兵士達は動揺する。だが戦列は崩れない。戦列を崩せば銃殺だ。逃  
げ出す者は反逆者、反革命分子とみなされる。

それよりも先に戦列が崩れれば相手の騎兵が突貫してくるだろうが。  
兵たちはそれを分かっているのか、動揺しつつも足は止めず。

前方には黒服を着た者達が並ぶ。銃剣を掲げこちらに前進してくる。

その歩みはこちらよりも早足。しかし列が崩れるそぶりは無い。

黒服達の顔が見える。目が見える。

彼らの目は忠義に満ちた目。

彼らを率いる者への信頼の目。

今では彼らは反革命軍。

しかし此方よりも戦意は高く、統率が取れている。

空が青い。夕焼けであつたらならば悲壮感があつたかもしれない。  
しかし太陽は真上。

空の青さの中にこちらに向かって大きくなる丸いものが幾何十。  
空の青さの中にあちらに向かつて小さくなる丸いものが幾何十。

進めば進むほどそれは益々互いに白と黒を崩れさせる。

黒服達の表情が見えた。

彼らは口を一文字に閉め、まっすぐに此方を見据えている。

私は全隊に止まれを命じた。

構えと叫ぶ。

サーベルを天へ向ける。

狙え。

黒服はまだ歩む。

サーベルを大地へ振り下ろす。  
発砲。

砲兵のそれとは小さな音が連続して鳴り響き、辺りを白煙で包む。

黒服が斃れる。しかし、斃れたものの後ろから又黒服がその欠けた穴を埋めるように出てきて、行進が止まることは無い。

私は一列目をしゃがませる。

二列目に構えの号令。

狙え、

再びサーベルを天へ。

発砲。

サーベルが同志達の屍かばねの方へ向く。

再び白煙に包まれる。

黒服の姿が見つらい。

すると黒服は歩みを止めた。

一寸間があつた後、向うから白煙が上がる。

刹那、同志達の白服が赤く染まる。

白服が紅白の服になる。

私は待てない。待てなかった。

「バイヨネットチャージ！」

マスキットを掲げる兵たちは銃剣突撃を。

隊長格の兵たちはサーベルを掲げ、黒服に迫る。

走る。躍進距離二十。

黒服もそれに呼応して銃剣で突貫してきた。

数の上では此方は相手の三倍。先生の教えてくれたランチェスターの法則に当てはめても、勝てる。

黒服の中央を見据える。

黒服の中でも突出して迫ってくる一隊があつた。

私達は抜刀隊と呼んでいた。

長銃を持たず、サーベルで武装した突撃専門の部隊。

それはどの隊よりも雄雄しく、鬼神にも恥じない勇。  
その跳躍する隊の中に「先生」を見た。

上段に構えたその刀は太陽の光を映す。

風になびく黒髪、——先生から言つと緑髪か——がひどく美しく思えた。

何時までも変わらない先生。あのときから変わらず、私が尊敬する先生のまま。

強いて言つなら隻眼となつたくらい。

しかし残った片目は真っ直ぐに私の瞳を見つめている。

私は先生に向かって躍進する。

ふと、出会った頃を思い出した。

私は何時<sup>いつ</sup>から先生と呼び始めたんだっただろうか。

私は跳躍する。

白服の中に、ほぼ中央に、先生先生と呼んで慕って呉れていた子が居た。

上段に構え、跳躍する。

風が涼しい。

私は此<sup>ここ</sup>処で死ぬ。

死なねばならぬ。

屹<sup>きつと</sup>度先生と慕って呉れていた子に斬られねばならぬ。

この際、勝敗はもはや知ったことではない。

あの子と斬り結ぶ事だけが今は望み。

あの子は理由を聞きたがるだろう。

だから懷に手紙を入れた。

あの子が私を斬ったら、見てくれるだろう。

距離は後十歩ほど。

あの子は脇で構えた。

当然だろう。あの子は私よりも背が高い。  
出会った頃は同じくらいだったのだが。

背の低い私が上段で構えたならば、同時に斬りあえば先に刀が届くのは私。

ならば脇に構え、下から斬り上げれば私の突貫を牽制できる。

だが、甘い。

此処に来たばかりの私なら、躊躇<sup>ためら</sup>って一步引いたところを斬られるか、そのまま袈裟懸けに斬りかかって、下から斬り上げられて死んだだろう。

しかし、私も学んだ。

右目を犠牲にして何も学ばなかったわけではない。

私は大上段に構える。

勝機はフェイント。

今まさに斬らんと見せかけ、あの子の刀が目の前を掠めたところで  
小手を打つ。

等と考えていたのは両目が在った頃。

私はそのまま大きく跳躍する。  
体の体重全てを乗せて、跳躍する。

その体重移動で得られる力を利用して軍刀を振り下ろす。

あの子の瞳を見つめる。

三つ編みの赤髪が視界の端に見える。

出会った時から変わらない髪。身体は成長し変わったが、髪だけは変わらない。

ふと、出会った頃、いや此処に来る前からの、事を思い出した。

## 第一話　せんせい（後書き）

所謂プロローグです。

最近異世界召喚ものをよく読んでいるんですが、読んでいる内に「自分も一筆書きたいな」と思い投稿した次第です。

案外書くこと（といってもキーボードを叩いているが）はやってみると疲れるもので、さらにお話が頭の中では綺麗にまとまっているのに、いざ文章化するとなるとどうにも筆が進まないと言う事態が沢山起こりました。

こうして実際に書いてみると、どれほど皆さんが苦勞なすっているかが分かります。

文がつまるときに己の手腕が無さに落胆していますが、右翼なのに共産主義的思想（矛盾だらけ）で剣客な主人公共々、暫くの間この場をお借りして好き勝手させていただきます。

## 第二話 りんね

生粋の読書家で暇さえあれば本を読んでいた。

物事を中々決められず、所謂「優柔不断<sup>いわゆる</sup>」とよばれる類であるが思い込みが激しく、こうだ、と決めたら突っ走る。

又何か作ったりするのが好きだった。よく工作をした。

高校は工業系にすすんだので楽しませてもらった。

純文学から機械力学、葉隠まで、何でも読んでいたので雑学だけは豊富だったが、いかんせんテスト等ではまるで役に立たず、点数も下から勘定したほうが速い教科ばかりだった。おかげで中学生の時には、奇人変人のレッテルを貼られていた。

本を読み漁るうちに自らの凡その思想が形作られていった。

我が国は何故自虐史観に捉われているのか。教科書を開けば、他の国の出来事は「遠征」やら「平定」「併合」等と聞こえの良い言葉が用いられている。

しかしどういふことか豊臣の朝鮮出兵をはじめ数々の我が国の戦争行為についてはことあるごとに「侵略」と言う言葉が使われている。

「」のように日本がインドネシアを侵略し、占領すると外国からの非難の声が強まった云々」

という文があるが、当時の世界情勢をどうみても非難の声を強くしているのは連合国であり、その連合国はその当時我が国と戦争中であったので、非難するのは当然である。敵対国に対して「よくやつ

た！よくぞ我が国の植民地を占領した！かの国こそが世界の模範だ！」と言つても思っているのか。そもそもスカルノの件などには一切触れていない。

そのような売国教育が行われているのは何故か。

それはW G I Pによる云々だからこそ日本人の誇りを取り戻し、真の独立国家として振舞うべきなのだ！

と言つた具合である。

様は右派的思想になっていた。と言つことである。

其れに加え、そのような性格なので、我が母校に国旗が掲揚されていないことに気づくと単身、校長室までのりこんだものだ。

そんななので日本男児ならばと言つ理由で剣道も嗜んだ。

しかし、高坊にもなるとそのような思想に対して疑問を抱くようになる。

日本を窮地から救うにはどうすればよいか……もはや末端にいたるまで洗脳され退廃した我が国をすくうには生半可な方法では不可能だ。

この時期読んでいたのが「我が闘争」であつたので、もはやファシズムによつて国民を啓蒙し、先導をするしかない。と考えていた。

しかし、その当時のヒットラーのような政権奪取劇は展開できそうにない。

私は半ばあきらめて、教師にでもなつて平凡な日々を送るのも悪くない。と考え始めていた。

そんなとき出会ったのが「資本論」やら「共産党宣言」なので、無論影響され、この国を蝕む売国奴も、所詮は階級闘争によるものだと悟た。

売国行為が生まれるのは工作員の所為ではない。経済的格差による階級闘争によつて引き起こされている。

我が国は資本主義経済に傾きすぎている。富む者は益々（ますます）富んで行き、貧しいものは益々貧しくなつてゆく。もう少しバランスをとる必要がある。

共産主義の実験は失敗したが社会主義色がとても濃い資本主義経済ならどうか？というのが当時高校2年時の思想であつた。

しかしどちらにしても政権奪取をしなくてはそんなことも夢の中で終わってしまうのでどうしたものかと考え、いつそのこと自分が議員になり変革の旗手になるか。などと考えていたが、我が国の選挙体制を鑑みるにこれまた不可能に近く、武装革命しかないか……などと話の合う仲間内で話したりしたものだ。

其れに関連して、ヒットラーに心酔し始めていた。ネットに落ちていた「意思の勝利」を鑑賞した所為だろう。案外自分は影響されやすい方だったのか。

のめりこんだら突つ走る性格であるので、どうしても演説がしたくなつた。

丁度その時期生徒会役員選挙があつたのでそれに立候補しヒットラ

―式の演説をさせてもらった。

演説後の拍手の量はすさまじく、いつもは寝ている諸氏も聞き入ってくれたようで、案外うまくいくもんだと驚いた。

生徒会はその後一年間前期後期共に勤めさせていただき、集会のたびに演説をぶちかます機会が得られてその年は楽しませて頂いた。しかし付いたあだ名が「演説の人」というのは如何なものか。

両親は私が小学生の時に離婚し、父が男手ひとつで面倒を見てくれた。

母は別の男とくっついたようだが、それでも特段母が嫌いなどとは思わなかった。

私には想い人が一人いた。

とても可愛らしい娘で肩で切りそろえた緑髪に小柄な身長、性格も今時には珍しく撫子の様な娘だった。

進学先も決まり、さてこの学び舎とも後僅かで別れんという時期に、私は悶々としていた。

どうしても首相を斬りたくてしょうがなかった。

野党第一党が今までの与党の議席を上回り、新たな政権になったのだが、次々施行される法が許せなかった。

かような政府を許してよいものか。

今の政府―いや政治家には何の信念も志もない。

誰も国家の為に働かず、

利権の鬼となり、

自らの保身に勤める。

そしてそれに惑わされる臣民達。

誰も声を上げず、

仁義は廃れ、

腐敗がまかり通る。

私は満身の怒りに満ちていた。

私の怒りは純粹な怒り、

邪悪なものに対する怒り、

義の為の怒り。

誰かがこれを正さねばならぬ。

正さねば国が滅びる。

国が滅びると言うことは日本人が死ぬと言うこと。

そんなことは許してはならぬ。

かつて大和を、

故郷を、

家族を、

想い人を、

仁義を、

信じるもの護るために散っていた者の魂、

言うならば、国家の魂が許さなかったのだ。

誰も彼を斬ろうしないし、宮城みやぎに向かって切腹する者も居なかった。

民衆も自ら敵性国家の絞首台に立ったことに気づいていなかった。だから私がやるしかないと思った。

義理を立てれば道理は引つ込む。

護国の鬼となつて死ぬことによつて得られる生もあるはずだ。

一首相を斬つたところで直ぐ何か変わるわけではない。しかし変わることにきつかけになるはずだと確信していた。

私は自称共産主義者になつていたが、愛国の志を捨てたわけではなかった。

そんなわけで大分前に倉庫で発見した軍刀（おそらく陸軍の九十四式であるう）を持ち出した。

先祖が帰国後筆筭の中に突っ込んでいたものを、先祖の死後、物置のなかにおいておいたまま忘れ去られていたらしい。

不思議にも60年近く放置されていた割にはよい状態であつた。

自分の中で

「救国の志に答えて刀が再び力を取り戻したのか」

などで痛いことを考えつつ、妄想も大概にしておかないといけないが本当にそうなのではないかと思えなかった。

何やら刀身が桜色に発光しているような気がする。

発光してるのはおそらく高揚して幻覚を見ているにしても、状態が良いのは事実だ。

なにはともあれ手入れ用の打ち粉やらをネットで取り寄せた。

このご時勢、ネットで何でもそろつものだ。

しかし、得物があっても技術がない。

剣道をやっていたとはいえ、当日になって反射的に軍刀で面打ちなどした日には目も当てられん。

そもそも剣道の構えと真剣の構えは柄を握る位置が違つのだ。

暫く考えあぐねていたが、戸山流などの動きを映像などから学ぶことにした。

様は、服の上から致命傷を負わせることができればよい。

残つた学業もそこそこに練習に励んでいたら良い具合になってきた。人間、なんとかなるもんだ。

斬るのはよいが身内に迷惑はかけられんと思い、父にその旨を伝えたと最初は驚嘆していたが直ぐに

「よしわかった」

と返事をしてくれた。

そういうわけで斬つた後はお巡さんが出張ってくるはずなので、縁を切り、私物を処分したが、これまた再び悶々としていた。

その例の娘の事が頭からはなれなかった。

これから死なんとする時にかような想いを抱くとは、人間不思議なものだ。

「ああ、一緒に月を眺めれたら如何程よいものか……」  
などで呟く事数十回。

いつそのこと自分は死に行くことを打ち明け、死地に行く前に抱かせてくれたらこれほど嬉しいことはない、と思うようになり、はたして伝えるべきか否か揺蕩<sup>たゆと</sup>う。

しかし、私は何も伝えないことに決めた。

手紙くらいはとも思ったが、これから居なくなる男にかようなものを貰って何になるのか。

うだうだとしていた心にけりをつけ、首都に向かう。

もう12月で雪も降りそうだ。

五月十五日だとか二月二十六日に決行すれば、洒落が効くかなどて思っていたが莫迦らしいのでやめた。

父から——戸籍上はもう違うが——餞別にと南部式と片道分の交通費を頂いた。

なぜ南部式があるのか不思議に思ったが、どうやらこれも同じ倉庫にあったようで、私よりも前に見つけて保管していたそうだ。

おそらく使わない（使えない）だろうがありがたく受け取っておく。

トレンチコートを羽織り、以前キャンプ用に購入した折りたたみナイフをポケットに入れる。

軍刀は竹刀袋にいれて持っていった。

雪の降る夜の中、首都に降り立った私は、即刻首相官邸に向かう。

離れてみていたが、どうやらここで斬ることはできなさそうだ。

警備の数が多すぎる。

素人の私が突貫しても刃は敵に届かないだろう。

暫く思案して、首相の自宅付近へ移動する。

雪が肩を白く染めるころ、首相が帰ってきた。

その時、首相が車を降りたその一寸、首相に間があった。

警護の者が3人居た。だがしかし、素人の私が斬れるのは今この瞬

間を置いて他にない。

勝機は在る。あの頭がお花畑の首相だ。だれも斬りに来るなどとは露にも思っていないだろう。

そしてその警護のものも、まさかこの国で辻斬り、これほど価値のない者を殺そうとする者などいまいと思っっているに違いない。

そう脳が考えていたときには、私は敵に向かって躍進していた。

鐔を左手の親指で優しく押し出し、右手で柄をつかんで抜刀し、上段にかまえて疾走する。

あと六歩ほどで間合いに入る。

狙うは型どおりの袈裟斬り<sup>けさき</sup>。

必殺を狙うなら喉への刺殺、突きが良いのだが全力で走って近づき突く、となると確実に当てる自信がない。

そんな自信のない未熟な技は使わない。

今は「確実に斬る」ことが求められているのだ。

警護の者が気がついたのか此方の進路を妨げようと駆け出し始めたのが視界に入る。

別の者は此方を拘束する為か駆け出そうと右足を踏み出したのが見える。

もう一人は首相へ手を伸ばすため車のドアから手を離す。

だが私は相手にはしない。

すれ違いざまに斬って応戦——等しては本来の目的に逃げられるかもしれない。

そもそも私には彼ら専門職の腕には敵わぬ。

ならば我が目指すのは首相唯一人。他の者など知らぬ。

「天誅！」  
と叫び跳躍する。

その声に気づいた首相は此方に振りむこうと首を動かす。

此方の進路を妨害しようとした者の間合いに自分が入る。  
此方へ向かって駆け出した者は最後の跳躍をし私に迫る。  
手を伸ばしたものは首相の右肩へ手を触れんとしていた。

おそらく、二太刀目はないだろう。

一太刀で以って斬るしかない。

左足で地を跳躍し、右足を前へ前へと押し出す。

全身の体重が高速で前へ移動する。

同時に上段に構えた軍刀をその体重移動を利用して袈裟斬りの軌道で振り下ろす。

首を動かした首相は首と連動して体を此方に向けた。

彼は我が目を疑った。

この現代社会で刀を持って自らに切りかかろうとする者がいる。  
その刃は自らの目の前に迫っている。

——— ということだ？！

何故己が斬られる？

軌られなければならぬ？

――殺されるのか？

党を結成して爾来党を支えつづけ、長年の野党生活を脱し与党につき、ついには首相にまで上り詰めたと言うのに！

確かに不祥事はあった。しかし隣国との関係改善等の功績は大きいはずだ。

国民が望んだことも全てやったじゃないか！

なのに、何故目の前に刀を持った男がいて、己を殺そうとしているのか。

――何故だ？

首相のネクタイが赤く染まる。

「え?!」

それが首相の最期の言葉だった。

首相を斬った。

私が腐敗の象徴と見立てた男を斬った。

目的は果たした。

だが、私はここで死なねばならぬ。

この腐敗の象徴と屍を重ねねばならぬ。

ここで警護の者にわが身をあずけられようか。

ここから全速で以って逃げ出せようか。

それは為らぬ。

それは無責任。

自らの行いに責任を取らねばならぬ。

責任をとらねばこの男を軌っても何も意味は無い。

――斬った本人もその場で果てる。

それは義。

義を貫かねば意味は無い。

社会に何も変化は無い。

唯のテロリストで終わる。

それは避けねばならぬ。

だから、私はこの場で死して、義を貫かねばならぬ。

右足を膝を折って前に、左足は大きく後ろに、体は前傾姿勢で残心をせずに反動で左足を少し前に出し右足を後ろに。

斬った反動で動かし足と腰にあわせて胴、腕が動き軍刀を上げる。中段構えの高さまで戻したら、その速度を以って左手で柄を握ったまま手首をかえし、右手はそのまま刀身を逆手で握り、軍刀を自分の腹に突き刺す。

腐敗の象徴の血と、おのれの血が混じる。

此方に駆け出した者が私を拘束せんと私の体をつかむ。

彼には焦りがあった。

自らの任務を果たせなかった。

何のためにいままで訓練してきたのか。

なんというザマだ

この国ではテロなど無いと高を括っていた。

その油断がこれだ。

ふと刺客の目をのぞいた。

信念に満ちた目。

この刺客に迷いはないのか。

よく見るとまだ十代ほどではないのか  
なぜ其れほどまでに信念を抱けるのか。

この国で。

自分でもわかつている。あの首相はクソったれだったと。  
自分はなぜあんなのを護っていたんだ。

自分が護るべきは、もつと違うものだったのかもしれない。

いかん。迷っていたら気がつかなかった。

この剣客は自らの腹に刀を突き立てている。

割腹するつもりか。

すると剣客は右手を離し、ナイフを取り出した。

この軌道は此方へ突く軌道か！

近接格闘では此方に分がある。

このナイフは叩き落す。

己は己の仕事をこなす。

私は警護の動きなど気にせず、右手を刀身から離し、峰を渾身の力で以って叩く。

綺麗に一文字に斬れた。

腸はまだ出てきていない。

そのまま右手で折りたたみナイフを取り出す。

彼は私の手の軌道をそらそうと手首をつかんできた。

そのまま彼を突いた場合の動きに合わせて彼は私のナイフを無力化しようとする。

しかし私はそのような気はなかったのです、そのまま自らの首にナイフを突き刺した。

同時に強引に宮城の方へ体を向けたところで体の力がスッと抜けた。

「斬り結ぶ雪にやどれる月影の刹那の下こそ我のまほろば」

視界が赤く染まり、ぼやけてくる中で私が見たのは雪に隠れる綺麗な月だった。

気がつけば彼岸花の花畑の中に斃れていた。  
確かアスファルトの上で割腹したはずだが。

ここが黄泉の国か、靖国か。

等と思っていたら意識が遠のく。

腹部を見れば、臓物さえ出ていないが一字に切れている。だが首は無傷だ。

どういうことか。

あれこれ考えていたら思考能力が低下してきた。視界がかすむ。

視界がぼやけてくる中で見たのは此方に駆けてくる人影だった。

気がつけば彼岸花の花畑の中に斃れていた。

これはデジャヴか。

腹を見たら特段傷はない。確か割腹したはずだが。

軍刀と南部は手に持っていたが、羽織っているものが死人の着る白  
い着物、白装束である。

ここが黄泉の国か、靖国か。

等と考えていたら、向こうに人の列が見える。

全員私と同じ死人の服だ。

日本人の習性か何となく最後尾にいらんで前にいた、道端で井戸端  
会議をしてそうな奥さんに、

「ここは何処か」と問うたら

「あの世ですよ」と返って来た。

「今きたばかりなの？」と奥さん

「そうだと思います。気がついたらあすこに斃れていたので」と私  
「まだ若いのに、かわいそうに」

「いえ、気をつかわんでください。ところでこの行列はどこに続いているんです？」

「向うにあの三途の川があつてね、その川を渡るための船を待つて  
るんだけどこれがまた本数が少ないらしくて……にも関わらず搭乗審  
査が厳しいらしくて、すごいチェックされるのよ。なんだか前世で  
よい行いをした人はお金がもらえて、そのお金で船に乗れるそうだ  
けど、お金がない人は泳いでわたれとか言うらしいのよ。で、泳い  
で渡った人は大抵おぼれちゃって、天国にも地獄にもいけないとか  
わたし旦那をいつもこき使ってたからもらえる量が少ないかも……  
もおう、あの世にきてまで私に迷惑かけるなんて、なんて人なのか  
しらっ！」

などと会話していたら、ようやく審査の検問所が見えてきた。

いくつか前にいたチャラ男が金がないらしく、近くのご老人から金  
をせびるうとしていた。

ケシカラン奴だと思い、軍刀でぶった叩こうとしたら（もちろん鞘  
に納刀したまま）彼は検問官に河に突き飛ばされていた。

浮かんでこないようで、溺れてひどい目にあうのは本当のようだ。

さて、私の番が回ってきて検問官が言った。

「どうやら君は別の便のようだ」

「どう言うことです？」

「この紙を持ってあすこへ行きたまえ」指で場所を示しながら言う。

と言うので、何やら一筆書いた紙を渡されその場所までいった。

明治時代の建物の様な場所で直ぐわかった。

中へ入るとモーニングを着た若い兄さんが

「何か御用か」と問うので

紙を渡しつつ「ここへ行けと言われた」と答えた。

「……お持ちください。」

と言うことで暫く外を眺めて待っていたら、見事なカイゼル鬚をはやしたおじさんがしかめっ面でやってきた。

「もう一度生き還ったとして、生き返ったそばから死ぬ以外に欲しいものはあるか。」

「どういふことです?」

「質問に対しての返答をしなければ成仏できんぞ。」

どういふ事かわからないが、話の流れからするとおそらく生き返らせてくれるのか。

前世の記憶は引き継ぐと言うことをお願いした。

折角なので来世は別の視点で楽しませてもらおう。

「女の娘の姿にしてください。」

容姿についての細かい注文をしていると、私が生前、月と一緒に見たいと思っていたあの娘と瓜二つの姿になっていた。まあ、そういうものだろう。

もちろん一定の容姿になったら不老に成ることは必須だ。しかし不死は遠慮しておこう。

後、もちろん軍刀と南部式は持つて行く。

軍刀が刃こぼれ、折れたりしないようにして欲しいと言うのと南部も現役時代同様に使えるようにして欲しいとお願いした。

「それだけでよいか？」

後、全ての言語を読み書き会話ができるようになってくれと頼んだ。生前の英語のテストの点数などは下から勘定したほうが早いくらいだったので、これが叶うなら有難いことだ。

これ以上は望まん。人外や超能力者になるつもりはない。不老の時点で超人ではあると思うが。

「さて、では切腹したまえ、介錯はしてやろう」

きつとこのカイゼル髭はキチガヒなのだろう。

いままでの会話からどうして切腹する必要があるのか。

しかしあの世で死んだらどうなるのか。あの世のあの世なんてあるのだろうか。

カイゼル髭がポン刀を持つて来て素振りを始めた。

まあこの際何でも良いだろう。

あの世で死んだらどうなるかと言うのも興味がある。

落ち着いたらこの体験を基にした小説でも書いてみようか。

軍刀を抜き、モーニングの兄ちゃんから渡された白い布を切っ先から20センチくらいのところで刃に巻きつける。腹に刺した後、持

って動かすためだ。

切れないように巻きつけるのが中々難しい。

上着をはだけさせ、呼吸を整える。

息を吸ったところで止める。

そして切っ先を腹に刺しこむ。

十分に入ったら

息を吐く。

痛みで動けなくなる前にそのまま一文字に掻っ捌く。

首を介錯しやすいように伸ばす。

すると肩に激痛が！

なんてことだ、カイゼル髭が介錯に失敗した！

「心静かに！」

カイゼル髭を励ます。なんということだ。この道のベテランかと思  
ったがちがうのか。いや、介錯は失敗すること多い。彼を責めて  
も仕方がないだろう。

痛みが伝わってきた。これ以上待てばその辺を臓物を引きずりなが  
らのた打ち回ってしまうかもしれない。

等と思っていたら風を切る音と共に、私の視界は真っ黒になり意識を失った。

最期に見たのは窓の向うに生えていた彼岸花だった。

逝きつきて美しきかな黄泉の国あはれこの身は輪廻を彷徨ふ

## 第二話 りんね（後書き）

主人公が異世界にいくまで。

トンデモ主人公ですが、案外私の理想であったりします。（間違っても人を切ることはないですよ。）

剣戟描写はハ。チラ。の影響を多大に受けています。

あの文体を見たときから、あゝこれは真似したいな、と思っていました。

自分、剣戟ものが好きなんですよ。

かの作物を書いた方とは経験が違いますし、到底及びませんが、剣戟ものの良さが少しでも伝われば幸いです。

### 第三話　であひ

幼少時から咳が出ると長期にわたって止まらなくなるので、何度か死に掛けた。

咳が出ると呼吸ができなくなって窒息しそうになる。

咳が止まらなくなるたびに背中を押してもらいつつ手を引っ張ってもらって胸を張ると幾分か楽になるので、咳が出るたびにそれを繰り返していた。

しかし、月日がたつごとに酷くなる一方で、周りには成人まで生きられそうにないと思われる。

何とか治療をと、くそつたれの魔術師共に両親が何度も懇願したが叶わなかった。

おかげで虚弱体質扱いで女として生まれたが体で働くこともできないので労働は免除されたがその分を家族に負担をさせてしまった。

その所為か両親は3年前に死んだ。

兄は魔法以外の治療方法を、少ない書物から学び、居住区でも片手で数えるくらいしか居ない、「異端の医者」と認められ重労働の義務は免除されたが居住区内の健康管理を一手に引き受けることになった。

元々、魔術師たちは奴隷など使えなくなったら補充すればよいという考えでいたが、ある時期異常な数の奴隷が死んだのでお上の命令で一定の治療をするということになった。

しかし奴隷の治療などしようと思う者など居ないので——中には物好きもいたが——奴隷達が自ら古代の「魔法を使わない治療」を行うようになっていた。

兄は私の病を治そうと様々な手を尽くしてくれたが、未だ直っていない。

毎日寝たきりで、外から聞こえてくる鉄を打つ音や坑道が爆発して崩落する音、見栄えのいい女の子が奉公だといって魔術師に連れて行かれるときの声を聞くのが唯一の楽しみだ。

我ながら随分と曲がった性格になったものだ。

ある日、何時もよりも調子がよく、農業区にあるアランカザンダツカの花畑に遊びに行った。

調子がいいとよくここに来る。アランカザンダツカは大抵奴隷が住む場所に多く生えているので奴らからは奴隷の花と呼ばれているが、私は好きだ。

花と花の間を通りながら花畑の中心まで散歩する。お決まりの散歩コースだ。

しかしいつもとは違う風景が視界に入った。

人が倒れているを見た。

思わず自らの体のことを忘れて駆けて行く。どうやら大怪我をした女の子のようだ。

大方、強姦された後に殺されたのだろう。よくあることだ、ほかつて置こうと思つたのだが、私を探しにきた兄が——大抵抜け出したときはここに居ると知られている——この子を見つけてしまった。ほかつておけばよいものを、世話好きな兄は部屋へ運ぶと言ひ出した。

私が、

「でも死んでいるんでしょう？」

と言つたが、氣を失っているだけでまだ生きている、担架と人を呼ぶからここで待てと言つて駆けていった。

しかし同じ奴隷同士でも強姦して殺すなんて良くあることなのにそんなことに一々構つていては手が回らないだろう。

そもそもまだ近くに犯人が居るかもしれないのに私を置いて行くとは、私が襲われるとは思えないのだろうか。

兄は優しいが、焦ると思考が浅くなるのは玉に瑕だ。

ふと斃れている女の子を見る。すごくきれい。綺麗な黒髪をしている。私よりも年上だろうか。しかし身長が低い。センチであらわすと150センチもないのではないだろうか。そう見るとそれほど年は離れていないのかもしれない。

なんだか周りに咲くアランカザンダツカと相まってすごく絵になるふと、このまま倒れていてくれた方が美しいと思つた。

視界に色が燈って最初に見えたのは木造の天井だった左側から外の光が入ってきている。

触覚が戻ってきて感じたのは、柔らかい、布団の中にいる感覚だった。

嗅覚が戻ってきて最初に嗅いだのはドクダミに似た草の匂いだった。

聴覚が戻ってきて、活気のある大勢の人の声が遠くのほうから聞こえる。

ここは一体どこだろうと体を起こしてみると、部屋は大分狭い、簡素な木製のベットのの上に寝ているようだ。きしむ音が聞こえる。ふと横を見ると三つ編みの赤髪の少女が座っており、目が合った。

「や……やあ」

と声をかけたら向うへ駆けていってしまった。

何かまずかっただろうか。どうやらここは日本では無いようであるし、言葉が違ったか。

しかし赤髪とは面妖な色だ。染めているのか。  
唯、革命的な色ではある。

「うぐっ」

腹部に痛みが走る。

そういえば割腹したんだっただか。

しかし転生という形で黄泉の国から戻ってきたと言うわけではない  
ようだ。

それにしても腹部くらい治してからこの世に送ってほしかった。

治療の後がある。包帯が巻いてあったが赤く滲んでいる。体を起こ  
したのはまずかったか。

ふと自分の体に違和感を感じた。腹部が痛いのは別に、股間に何  
ぞ足らない。

まさかと思い、傍らにおいてあった水の入った桶の様なものの水面  
に自らの面を映してみた。

おお、要望どおりだ。

綺麗な緑髪を肩で切りそろえたあの娘と同じだ。

ふと自らの胸を弄る。柔らかく、気持ちが良い。

そんなことをしていたら益々腹部が痛くなってきた。包帯がさらに  
滲んでいる。

これはまづい。

そのまま体の力が抜け、倒れてしまった。

視界が霞む。

妹は昔から体が弱い。

体力が無いと言うわけでは無く、呼吸に難があるようだ。

咳が出始めたら直ぐに胸をはらせて少しでも息を吸うのを楽しんでやらないといけない。

埃っぽい周りの環境の所為もあって、よくつらそうな顔をしている。

妹を何とか治してやりたくて、何度も魔術師に懇願したが跳ね除けられてしまった。

居住区の医者にも相談したが彼を以ってしても治療法はわからないと言う。

そもそも彼らの治療と言うのは外傷に対してが主であるので、妹の様なのは打つ手がないと言われた。

しかし、彼によるとそもそも外傷に対する治療法にしても、古代の書物から得られる情報が主らしい。

古代の書物は我々奴隷が労働させられる鉱山で採掘作業中に出土したりする。

基本的には魔術師らに持っていていかれるが、彼らからしてみれば魔法についてなど書かれていないらしく一度目を通したら必要ないらしい。

彼らがそれを欲するのはいわば知的好奇心を満たすためと言つのと骨董的価値から欲する。

結構世に出回っているので、話のわかる監視員に調達してもらった幾つかの古い書物に様々な治療法が書かれていた。

自分は読み書きを覚え、その本を読み解きつつ、医者に教えを請い、勉強に励んだ。

おかげで今は労働者達の治療健康係の一人として魔術師に認められたので、妹共々肉体労働は免除されている。

しかし、とてつもなく忙しい。

医者は自分を含め5人しか居なく、正確な統計は出てないが、この都市ナジウムには約七万四千六百人の奴隷が収容されている。

坑道ではよく爆発事故が起こったりするがそれをたった5人でさばかなくては成らない。

おかげで妹を治療するという本懐を遂げられていない。そもそも治療は未だわからないのだが……

妹は体調のいい日はよく部屋を抜け出して農業区にアランカザンダツカが多く群生する場所があり、そこに散歩に出かける。

心配でしょうがない。

もし出かけた先で咳が出始めたらどうするのか。又、いやな話だが襲われると言う可能性もある。唯でさえ妹の散歩ルートは人気が少ないのだ。

閉じ込めてばかりも良くないと思うが、唯一の家族なのだ。心配をしてしまうのは仕方が無いだろう。

ある日患者をさばくのもひと段落を見て、妹の様子を見にいったら、どうやら例の散歩に出かけたようだった。

場所はわかっているので迎えに行くことにした。

アランカザンダツカの花畑の中央付近に妹の姿を見た。

近寄ると、どうやら倒れている人を見つけたらしい。

一目見たら雷に打たれた。

なんてかわいい、いや可憐なのだろうか。

奴隷身分にしては綺麗な白い肌と、何より綺麗な黒髪だ。

自分達奴隷は基本的に赤髪か白髪。貴族、魔術師は金髪が多い。稀に青髪やらが生まれてくるようだが、黒髪は稀の稀である。

黒髪は奴隷身分にしか生まれえない。そして希少価値が高いので基本的に直ぐ魔術師らに取り上げられ、恐ろしいことをされるのが常なのだ、このような場所で出会うとは。

今まで黒髪がここに居るなんて聴いたことが無かった。

やはり奴隷同士で生んで隠して育ててこられたのだろうか。

しかし、これはこんな世でも神は居ると言うことか、運命の出会いとやらが許されているのなら今この瞬間がそうだろうと思った。

普段ならこの様に重症と見える素性もわからぬ者は手が足りないので放って置くが、この子は別だ。

この子を助ければ自分は命の恩人なわけで、自然と彼女とお近づきになれよう。

手当てをすれば暫くは安静にしている必要があるわけで、うちに泊めておく口実もできよう。

また何か事情があり行く先もないのなら自分の助手としておけば労働も免除されるので恩も売れよう。

打算が働くのは仕方が無いが、兎に角この子を助けねばと思った。

担架と人を呼ぶため、妹に様子をみて待っててもらおうと言って駆ける。

よく考えたら妹一人を残すのは危険かもしれないが、幸い農業区の労働者が近くに居る。

持ち場を離れているのを巡回している監視員に見られれば罰が与えられるが、医者と一緒にならそれも免除される。

奴隷の治療をしたくない魔術師にとって自分の様な医者は便利であるから、治療行為の為と言えば何人が連れて行っても認められる。

自分の部屋まで運び、治療を施した。

腹部が綺麗に斬られている。危うく臓器が出てくる一歩手前だった。唯、とても綺麗に切れていたので、消毒と縫合をして安静にしていればくつつくだろう。

ひとつ気になるのが彼女が着ていた服と持っていた剣である。見たことのない素材、形の服だったし、剣の形状も見ることが無い。そもそも剣など武器を持っているなんてどういうことだろう。とり合えず一緒に持ってきておいたが……まあ意識を戻したら聞いてみるかと思案していたら、また坑道で爆発があったようだ。そちらに行く必要があるそうだ。

妹も部屋で寝ているし、心配は要らないだろう。

再び気がついたら辺りは暗く、もう夜になっているのだろうか。周りは静寂に包まれ鳥の鳴き声と、時折部屋の外かどこから声がするだけだ。深夜になっても車の走る音が絶えなかった都会とは大違

いだ。

静かに、心地よい静けさ。ランプのオレンジ色の光がうつすらと部屋を照らすばかり。このランプはアルコールランプか何かだろうか。電球ではないようだ。

起き上がり、辺りを見渡す。

視線の低さに驚いた。

前世の身長は大体170cm位はあったが、この身体は150cm、いやそれ以下かもしれない。

首の辺りが髪せいの所為か暖かい。しかし不快では無く、むしろ心地よい。

試しにその場で右足を軸に一回転。今度は反対周り。

前世とは違う高さの視線。

奇妙な感覚に捉われつつも、髪を手ぐしで整へる。

腹に巻いてある包帯以外何も着ておらず自分が裸であることに気がついた。

流石に裸で歩き回るのは良くないだろう。傍らにあった白装束を着て部屋を出た。

部屋を出ると狭い廊下の様な空間があった。

廊下の先には少し広い空間があるようで、そこには随分とゆがんだ

木製のテーブルの上に食事がおいてあるのが見える。

ふむ、そういえばよい匂いがする。

すると件の赤髪少女が向かいの部屋から出てきた。

そういえば前回目を覚ましたときには彼女が傍らにいたな。

私は屹度この子が世話をして呉っていたのだらうと思い、礼を述べようとした。

赤髪の少女は私が口を開くよりも先に

「あの、もう動けるんですか？」

と言った。

私の身体のことを言っているのか。

私の腹の治療を施してくれたのも彼女だらうか。

「ええ、おかげさまで。私の治療してくれたのは君か。」

「いえ……私ではありません。」

改めて見ると若いな。

年は10歳辺りだらう。

治療をしてくれたのは別の者か。とは言え、面倒見てくれたのは彼女だらう。

何はともあれ有難う、と礼を述べた。

すると此方に向かってくる人影が在る。

またしても赤髪である。

実に革命的な色だが少し目に痛い。

松の木肌のような色の服、ロープの様なものを着た青年がやってきた。

しかし目立たないが、その茶色い姿の所々に赤黒い血の痕がある。

「あ、兄さん」

兄さん、すると彼女の兄か。

「あれ、貴女は……まだ動かないほうがいいと思いますよ。綺麗に切れていたので直りは良いとは言え、お腹をばっさり大きく切られてましたからね。肩を貸すので部屋に戻りましょう。安静にしてください。」

兄妹共に身体の心配をして呉れる。

「いや、もう大丈夫です。其れよりも君が治療してくれたのか。」

「ええ、そうですよ。妹が倒れている貴女を見つけてね。急いで治療所に運んだんです。」

「すると君は医者か。迷惑をかけた。」

「いえいえ、しかし本当に安静にしていたほうがよいですよ。」

だが実際に活動に支障は無い所まで回復している。この場所が如何いかにいう場所なのかも不明である故、ゆえ布団の上で暇を貪るのは私の性分からして心持の良いことではない。

「本当にもう大丈夫だ。それにしても少しお腹が空いてね。何か食べないと落ち着かないので食べ物を探しにいこうかと。」

「さいですか。では立ち話もなんですし、私の部屋へ行きましょう。粥なら食べれるでしょう。」

と言って彼の部屋で食べるということになった。

彼と赤髪兄妹が食事を取りにいくと言うことで、私は部屋で先に待っているようにと言われた。

部屋を見ると、薬草と思しき者や、鋸、縫合用の針、糸などがおいてあった。

なるほど、医者の部屋らしい。

机の上には幾つかの本が置いてあった。先ほどまで読んでいたと思しき本をふと手にとって読んでみる。

アラビア語に似ているが見たことのない文字だ。ふむ、しかし自然と読める。これはカイゼル髭のおかげか。

題は「外傷における焼灼止血法の有効性」と言うものだ。

中を開くと四肢切断などの重傷の場合に有効な止血法として云々。特別な技術・器具・薬品を用いずに行えるので危急の際でも云々。

という近代以前の内容が書かれていた。

大丈夫か此処は。

いつの治療法の本を読んでいるのだろうか。

彼の趣味だろうか。

しかし私には焼ゴテで止血はして貰いたくは無いな。

ふと机を見るとメモがおいてあった。

妹の治療案

・カンゾウ、タイソウ、バクモンドを調合した薬を試す。  
物は農業区にて確認済み、明日採取

などと走り書きがあった。

ふむ、甘草<sup>カンゾウ</sup>、大棗<sup>タイソウ</sup>、麦門冬（バクモンド＝バクモンドウ）のことだろうか。漢方薬でも作るつもりか。

麦門冬湯と言う漢方薬があったはずだ。

咳に効くと言う代物のはずだが、妹さんは風邪か何か？

と考察していたら彼らが戻ってきた。

「そのテーブルどうぞ。」

見ると廊下の先にみえた大層歪んだテーブルよりも幾分マシなテーブルがあった。

椅子にかけると――軋む音が聞こえてくるが――粥を差し出された。

しかしこの粥の中身、米ではないようだ。ぐぬ、米が食いたかったがそう贅沢も言えまい。

彼らも粥のようだ。

「では、頂きましょうか。」

と青年が言つて食べ始める。

木で作つたスプーンで食す。

うむ、不味くない。しかし美味くも無い。なんともいえぬ味。だが腹は膨れるので今は文句はない。

「それにしても妹がアランカザンダツカの花畑の中で倒れている貴女を見つけて、ここに運んでから四日間も意識が無かつたんですよ。一体何があつたんです？」

医者 of 青年が質問した。

どうしたものか。私はこの場所のことを良く知らない。そもそも兄妹そろつて赤髪がいるような場所だ。それでいて片方は医者だと言う。下手に回答はできない。

此処は日本か等とも問えない。ここの常識がわからない以上、下手に喋るのはまづい。

旅の者で行き倒れた。

や

旅をしていたら何者かに襲われたのだ。

等とも言えない。

旅が非常識な行動であつたらどうするのか。

そもそもここは現代なのか。

どうもこの建物に現代科学の匂いを感じない。

石造りの壁に木の天井。棚等を見ても規格があつたりするわけでもなさそうだ。

彼らの着る服は北欧辺りの民族衣装の香りがする。

では辺境の村かどこかに飛ばされたのか。

だが、何かが違う。

如何答えたものか。

答えようによつては不信感を与えかねない。

頭をうんうんひねっていたら、

「……何か訳が……あるのでしょうか」  
と赤髪少女が言う。

ふむ、それもありかもしれない。

「よろしければ、聞かないでもらえないか。」

「そうですか……何か理由がおりなのでしょう。何、こんな世です。逃れなくてはならん時もありましょう。」

案外うまく事は運んでゆくものだ。

屹度彼らもそういうことが在るのかも知れない。

「恐らく寝泊りする所も無いのではないのでしょうか？よければ患者用の部屋を一つ貸すので、使ってもらってもかまいませんよ。」

「なんとかたじけない。有難う。」

ここまでされると、せめて名前くらいは名乗らねばなるまい。

ナナシで通るわけにはいくまい。

どうしたものか……ここは現代日本ではないようだ。ここで日本の名前を言うのも違和感があるだろう。

ここは先に彼らの名前を聞いてみるか。彼らの名前にあわせて此方も適当な名前を言おう。

「ところで二人の名前は……」

「あゝ、そういえばまだ名乗っていませんでしたね。自分はアルヘルワです。」

「私は……アンジュルペナです。」

青年はともかく、少女は可憐な名前だ。

ふむ、やはりここで日本式は違和感があるだろう。どうする。なんて名乗ろうか。

目の前の彼らは日本人ではなさそうだ。しかし、骨格やら肉のつき方やらが確実に違うともいえない。

日本人のようで日本人ではないような。

おそらく同じアジア系の人が見たら彼らを日本人だと思うだろう。

しかし私にはそうは見えない。

半島が大陸か。いやどうも其れらしい血の香りはしない。

彼らの名前はどこの国とも言えない。

強いて言うならアラビア語に近い。

私が日本人だからといって日本式の名前を名乗れば違和感があるわけだ。

一つ案が浮かんだ。

適当な歴史上の人物の名前から借りてこよう。

もしも此処が現代なら、何かしらの反応が見れるはずだ。

特に何も無ければ、此処は少なくとも現代ではない、と言うことがわかる。

では誰から貰おうか。それほど詳しいものではなくとも皆が知っている人物……。

ドイツ第三帝國總統から頂こう。

彼ならば知らぬ人は少ないだろう。

しかしそのまま其の名前を言っては問題があるな。

もしも此処こゝが現代で彼らがユダヤだったりしたら？ドイツの辺境だったら？もしくは過去でソ連の僻地であつたら？

また、明らかにそのまま使っては問題が起こりそうだ。

少しもじって「ヒットレル」と名乗った。

性根の腐ったファシストの豚め！という極端な共産趣味思考はないので、これは問題ない。

響きでわかるだろうから何か反応があるだろう。

そしてもしもそれで問題があつても、発音やらつづりが違う、などといえはごまかせるだろう。

しかし、特にこれといった反応は無い。

視線や筋肉などを見ても、変化は無い。

ヒットレルさんですか、華麗な名前ですね。などと青年に言われる始末。

うむ、此処が現代ではないと仮定しても良いかもわからない。

しかし、それだけで判断するのは脳がない。

「そつえば、今は西暦何年か？」

「西暦？紋章歴の間違いでは。いまは紋章歴1901年ですよ。」

紋章歴？聞いたことの無い名前だ。

まさかとは思うが此処は前世にいた世界ではないのか。

もしも彼らの頭がイカれているか、おちよくっているのかでなければ、

所謂、異世界にいるということか。

異世界に飛ばされる類の小説はいくつか読んだことがある。

有名どころならガリバー旅行記だろう、

しかしまさか来世は異世界で過ごすことになるとは。

ならば早急にこの世界の常識を知らねば。

では先ほど読んだ「外傷における焼灼止血法の有効性」という本は現行の彼らの医療技術か。

もしも此処が中世の暗黒時代のようなところなら、知識を得ねばやすやすと屍をさらすことになる

ここは芝居を打つか

「あいすいません、私は長い間、両親に隠されて育てられたのです。私が倒れていたのもそれに関係があります。」

「そうでしたか、いや黒髪など珍しいので、屹度親御さんはあなたが連れて行かれるのを恐れていたのでしょう。」

「なので私には常識が少し足りません。よろしければ暫くここにお世話になりたいのです。もちろん、タダ飯を食べるわけではありません。貴方は医者とみえます。少しくらいなら私にも医療に関して嗜みがあります。助手としてお手伝いをさせてください。」

これでよいだろう。もしも此処が中世ヨーロッパなみの医療技術なら私の本で得た付け焼刃知識でも十分役立つはずだ。

それにこの天井は低いが大きな建物。その建物を兄と妹で二部屋、

私の寝ていた部屋で三部屋、そして私にそこを使っても良いと言うのならもう一つくらいは部屋はあるはず。

最低でも四部屋。この世界で医者であると言うのは中々有利に働くことなのだろう。

その医者の手助となれば何かしらのトラブルがあっても少しくらいの後盾となるだろう。

「なんと、貴女は魔法を使わない治療ができるのですか。まあ奴隷区に居るのだから魔法は使えないでしょうが、それでも最低でも読み書きはできると見える。わかった。実は自分も手が足りなかったところです。貴女の事情は聞かないから、此処にいてください。」  
「自分達のこととは家族だと思って接してください。そうですね、自分事は『アル』とでよんでください。」

なんと快諾してくれた。断られたらどうしようかと思っていた。

しかし、此処でまた一つ新たな情報が得られた。

「魔法」と「奴隷区」という単語が出てきた。

話からするとここは奴隷区であるということか。奴隷区というからには恐らく我々は奴隷の身分に居るということか。

しかし我々がよく想像する様な奴隷ではないようだ。

かなりの自由が認められていると見える。でなければ何故こんな個室が与えられるのか。

おそらくローマ帝国のような奴隷、もしくはこの二人は奴隷区の診療を担当している奴隷ではない人、と言うことだろう。

そして「魔法」についてだ。

魔法という単語が平然と出てきたからには恐らく魔法なるものがまかり通る世界なのか？

奴隷区に居るのだから魔法は使えないでしょうが、と言うことは奴

隷ではない者は魔法が使えるのか？

そもそもどのような魔法なのか。

この際魔法の存在を疑うのは止めておき、魔法が平然と使われる世界と考えたほうが良いだろうが、魔法にも色々あるだろう。

唯単に雷やら炎やらを起こせるのか、それとも人の心を操ったり、死者を読み還えらせることができる魔法なのか。

不安要素は多いが取り敢えずこの世界で生きる糧を得られたことには感謝だ。

青年、もといアルは家族だと思って接してください。とも言った。打算なくして言った言葉ではないだろうが、今はそれに乗っかるう。

ふと、赤髪少女のアンジュルペナと目が合う。微笑んでやったら恥ずかしそうにしていた。

### 第三話　であひ（後書き）

見事な説明回ですね。

自分にもっと手腕があれば自然な流れで書けるのですが、まだ精進しなくてはいいけませんね。

どうにも戦闘以外は筆の進みキーボードが遅くていいけません。

そして主人公のアカ魂はいまだ隠れたまま。共産趣味全開になるのはまだ先になりそうです。

#### 第四話　せゝらぎ

貴様の好きにすると良い。

この地で静かに暮らしても良い。

悪行の限りを尽くし、この世を灼熱地獄へと落としても良い。

ここは国産みで忘れ去られた奇形児。

誰も目を向けたがらなかった、水へ流された忌み嫌われた子。

貴様は国を育てた。だから此処へ連れて来た。

水に流しても生き永らえ、苦しみながら生きてきたこの子も、貴様なら楽にできるかもしれない。

あるいは真つ当な所へ戻せるかも知れぬ。

これは本来、私が何とかしなくてはならない。

だから、絶対にして呉とは言わぬ。

わが子を育てゝ呉れた、礼だと思い、好きに来世を生きよ。

これはカイゼル髭の声か

私は目を覚ます。

夢だったのか。いや、ある意味カイゼル髭から手紙か。面と向かつ

て言うのが恥ずかしいのは日本人であるということだ。

彼もまた大和民族だったのか。

しかし、そんなやんごとなきお方だったとは思わなかったな。

彼は私に大層なお願いをしたかったようだ。

絶対にして呉とはいわぬとは、して呉れと言うことか。

まあ、良い。好きに生きよとのたまひ給うたのだ。折角の来世だ。おもいきり楽しませてもらおう。

桶に入った水で顔を洗い、髪を整える。

水面に移る自らの顔を眺める。

うむ、今日も可愛い。

白装束を上に着ているのもどうかと思い、昨夜の食事の後着る物はないかと問うたら、松の木肌色のローブを呉れたので白装束の上に其れを着込んだ。

下着はアンのを借りた。（アンジュールペナと言う名前は長いので、食事中『アン』と呼んだら恥ずかしそうにしつつも特に不快に思っていないさそうだったので、これからはそう呼ぶことにする。）

軍刀はさげようと思ったが、冷静になって止める。

昨夜の食事の後、この剣とよく分らないもの（南部）は貴女のだろつと返して呉れた。

奴隷が帯剣するのは禁止されていると言う話だったが、持っている理由を聞かないで呉れたのは有難かった。

黒色、緑髪は珍しいとの事で面倒ごとを避けるためフードを被り、

朝食代にと貰った金を持ち部屋を出て配食所へ向かった。

奴隷は皆軽装で、ローブなど着ないが、医者などは簡易治療具を懷に入れておくのと、外傷を防ぐ理由等から着る事もあるらしい。もつとも、一番の理由は医者であると言う事を一目で分からせる事で監視員からあらぬ誤解を受けないようにすること、医者であることは奴隷達の仲でも希少な存在らしいので、先に医者であると言うことを誇示して他の者とのトラブルを避けることが目的だそうだが、色が茶色なのは治療の際に付着した血を一々洗っているのは手間なので目立たないような色ということだそうだ。

食事は金を使う。金は労働の対価として支払われる。その金を食に当てようが娯楽に当てようが自由。

但し、金の量はすくないらしい。実際にその労働の現場を見ないと其れが妥当かどうかは判別できないが。

奴隷達は皆寝泊りはこの場所と同じような、石材と木でできた建物ですと言ったことだ。収容棟はアルが担当している区域だけでも124棟ある。

一般には一部屋6人ほどで寝るそうだが、一部の者、丁度アルのような医者は治療等の為に個室が与えられる。診断室兼手術室兼私室世言うことだが、彼は患者が多いということでも他にも六つほど治療用として部屋の使用を申請しているそうだ。

今回の私に対する厚遇も、必要以上に申請しているからだそうで。

しかし、これだけの数、少なくともアルが担当する区域の人口は一万人を超えるはずだが、奴隷の主もこれだけの数の奴隷を管理するのは非常に困難なはずだ。

6人部屋とはいえ、自由な寝床がある所を見ると、古代ローマの奴隷制度の様な感じか。

食事を貰おうと並んでいたらやけに視線が飛んできて痛い程だったので早足で部屋に戻った。フード越しから見ても可愛いさがわかるのだろうか。困ったさんばかりである。

部屋の前にアンがいたので、アルを交えて三人で食おうと言う事になった。

窓からさしこむ太陽の光が？器でできたコップの中に入った水を照らす。

黒パンを食いながら、おかずの代わりにとアルにこの街について簡単に説明して貰った。

「この街は魔術師達の住む市街と我々労働者<sup>どれい</sup>が住んで働く奴隷区に分けられます。

市街についてはまた今度お話ししよう。

奴隷区は様々な区に分かれています。

我々の住む居住区が五区、

鉄や銅や魔法石を採掘、製鉄し刀剣類や道具に加工するのが鍛冶区、彫金もここで行われます、

農作物や薬草、木材などの生産から酪農、牧畜などを行う農業区、土器、？器、陶器などの生産をする工芸区、布などの生産もここで行われます、

その他区を設けるまでも無い中小規模の物を生産をする総合区に分かれていて、それら奴隷区は長大な城壁で囲まれています。

出入り口は北門と南門と西門のみで、それらは生産したものを運び出したり、監視員が巡回にでたり、新たな奴隷が入ってくるとき以外は開かれません。

ちなみに北門は市街と直通で一番警備が厳しいです。

ただ、鍛冶区の一部と農業区はとても広大なので、城壁でカバーし

きれていませんが、街の外には追いはぎやらがウロウロしてるので、運よく脱出してもすぐに殺されます。

なので最近では脱出を企てる人は少ないです。」

ふとアンの方を見ると、何やらブスーとしていたので、女子は笑顔おなこが一番だよ、笑顔のほうが素敵だと言ってやった。

なんだか妹が出来たみたいだ。どうせなら私の理想の女の子になつてもらいたい。至極勝手なことだが。

ついでに言葉は言ノ葉と言っては自らの心を写すんだ、的なことを話してやったら、これまた感心した様子で、どこでそんな知識を得るのかと聞いてきたので、本を読むことだと言ってやった。

的なことをおかずにしつつ、朝食も食い終わった所でアルが、今日は酷い発熱をしている者が居るので其れの診察等に行くので着いて来て欲しいとの事なので、快諾した。

アルの指示で鋸やら針、薬草やらアルコールやらを匏へ詰め込んでゆく。

どのような医学を持っているのか、高を括って医学の嗜みがあるとは言ったものの、近代並みの技術であったならどうするか等と思索していたが、杞憂だったようだ。

道具やらから、ルネサンス期のヨーロッパ及びイスラム圏が少し入った並みの医療技術であることが伺える。

これならば私でも何とかかなりそうだと安堵する。

そうしてアルと共に行くことになったのだが、アンは留守番らしく、不満そうにしていた。

アル曰く、呼吸に関する病で寝かせておくだそうだ。そういえばそこまで酷くは無いが咳をしていた気がする。後で診てやるか。

外に出てみると、太陽がまぶしい。

ずっと部屋で寝ていた訳であるから、目が明るさに慣れるまで少し掛かった。

目が慣れてくると、建物が視界に入った。

壁を石材で造り、傾斜がついた天井は木でできている。一定の間隔で乾燥させた糞と藁を混ぜ合わせたのを塗られている所がある。

30メートルほどで長い一階建。

建物の脇には横約30センチ幅に石材を敷き詰めた水道と思しき物が掘られており、遠くのほうまで水が流れている。それらは汚水のようなものだ。

なるほど、公衆衛生には気を使っているようだ。

カサブランカが水道に沿って植えられている。

私が花を見ていたら、

「綺麗で良い匂いの花でしょう？タタラアルバイダという花だね。

汚水道ができてから匂いがくさいって言うんで、私らが良い匂いの花を植えたのよ。」

と見知らぬ女が話しかけてきた。

一体誰だろうと思ひ、アルに聞くに、農業区ちやうどの労働者のゼア二というそうだ。見た目は二十歳そこそこのグラマーな姉ちゃんである。

「あなた、アルのところに運ばれた黒髪さんでしょう？随分酷い目にあったんだね、男が信じれなくなるかもしれないけど、見たところアルは大丈夫そうね。」

と余分な同情を受け苦笑しつつも何故私の事を知っているのか聞いた。

「そりゃ、担架でアルのところに血を流しながら運ばれてく女の子がいて、さらには黒髪の別嬪さんっていうんで少なくともこの区は

みんな知ってるよ。」

これはフードを被る意味はなさそうである。黒髪は珍しいそうなのだからもう少し隠匿して運んでもらいたかったものだ。

それでグラマー姉ちゃんとアルを交えて、これからどうするのかと言う話を少しした後、時間だということで我々の歩む先と反対方向へ歩いていった。

道は舗装はされておらず、歩くたびに土ぼこりが立つ。

フードは要らないと思い、被らずに歩いていたら先々で、おお黒髪だの、可愛いだの、ちっちゃい子だなのと言われて、視線もいやなので収容棟（労働者たちは宿舎とよぶそうだ）を4つ行った所で被ってやった。可愛いのも困りものである。ふとアルが残念そうにした。

一寸間を空けたところでアルが、君は本当に可憐だからそのうち言い寄ってくる者があるかもと言うので、私は君しか見ていないよと冗談を言ってやったら、それからもごして何も言わなくなった。春いやつめ。

そんな笑談じょうだんを言っていたら、目的地に着いたそうで、148号棟の前でとまる。

中に入ると静かなものだ。皆出払っているようだ。

床の軋む音とブーツのヒールが鳴らす足音とを聞きながら歩くと、件の病人の部屋に着いた。

アルがノックをすると誰何すいかが帰ってきた。若い娘の声であった。あれこれで来た何某なにがしだと答えるとドアが空いて中に入った。すると白髪の強面の髭おやじがいた。儂げな少女を期待していたら、こつという目に嬉しくないものが飛び込んできたので落胆する。

お嬢ちゃんが例の黒髪さんかなどと自己紹介もそこに髭の話を聞く。

話に聞けば髭の娘さんが三夜ほど熱が下がらないそうだ。

その強面に似合わず小さくなって泣きそうにしている所を見ると、よほど娘が心配らしい。今日は労働もすっぱかし、代わりに息子に自分の分までやらせるそうだ。

今更ベッドのほうを見ると長い白髪が汗で肌にくっついていて少女がいた。中々に整った顔立ちをしている。

アンもそうだが、この世界の病弱系少女は皆可憐であるな。

白髪少女は此方に首をむけ、

「あゝ、アルヘルワさん…… よろしく願います。」  
と挨拶した。

一寸のうち、私に気がついたのか新しいお医者様かと聞いてくるのでアルの助手であると答えた。

アルは、では失礼しますと首に手を当て脈をみた。

その後、白髪少女の心臓の鼓動を聞けたためか、服をはだけさせ、胸に耳を当てようとした。

にしてもこの子は私の前世と同年代ほどに見える。

同年代の女の子の裸を見るのは初めてであるので自然と緊張して背筋が伸びる。

自分の体も女の子であるが言うならばそれはネカマのような感覚であり、本物の女の子とはいえない。

ついぞ女子を抱くことなく黄泉の国へ行った身としては何やらコロンブスの気持ち。

このままでは刺激が強いと、アルに一寸待てと言って木の筒をその辺で調達して此れで聴いたほうが正確だといって渡した。

当初、不思議そうな顔をしたアルと髭と白髪少女であるが、直ぐにアルが此れはすごいといって、一同驚嘆する。髭も自ら試してみて驚く。

君は何故こんなことを思いついたのかと言っていたので、なに、科学（化学）のおかげだと言っておいた。

アルは熱を冷ますために氷水の入った袋を額に乗せておいたらよいとしたが、念の為私からも少し診させてもらおう。

「ところで、えっと名前は何だったかな？」と問うたら

「サウサンって言います。」との事だった。

「良い、綺麗な名前だね。では、サウサンさん……？」

サン、さんと来て呼びづらいなと思っていたら、

「どうか……サウサンと呼びください」

「えと、では、サウサン。熱のほかに何か変わったことは無いか。

そう、例へば頭痛や間接の痛み、黄色い液を吐いたり、腹痛がする、とかあるかな」

「えっと……お腹が痛いのとさっき……は、吐いちゃいましたです。」

なるほど、少しお腹を触診するかと思い、その旨をアルに話した。

アルは承諾したが、触って痛がった場合にあの髭が騒ぐといかんの髭に先にあれこれこういうことをしますと伝えた。

みぞおち辺りから下腹部を押してゆくと、右下の腹部を押した際に強く痛がった。

付け焼刃知識だがこれは盲腸ではないか？

その旨を話し合うため、いったんアルと廊下に出た。髭が心配そう

につぶらな瞳で此方を上目遣いで見ていたが、大丈夫ですよとだけ言って出てきた。

「少し自信が無いのだが、彼女は盲腸―虫垂炎かも知れん」

「それは何ですか？」

「む、えと説明するとだな……」

私は教科書どおりの事を説明した。しかしよくもまあそんなスララと出て来るもんだと自分でも感心した。

「むむ、腹を開くんですか……」

「うむ、洪る理由はわかる。切開時の痛みと、周囲の衛生が保てないから開腹時の菌の侵入が心配なのだろう。」

「何か手が……？」

「ない。痛みは少し心当たりがあるが、衛生については魔法でも使って周りを覆う、殺菌のできた空間が作ればよいのだが」

私は死んだ時分はまだ高校生である。BJ先生のような道具も無ければ、流石にそんな知識も経験も無い。あるのは読んだ本の中のことだけである。

「体内に入った金属片やらを取り除く事はしたことがあるか。」

「あります。此処じゃしょっちゅうですからね。」

「そのときは切開などはどうしてるか。」

「急を要するので痛みだとか細菌だとかはお構いなしですね。酒を飲ませながら切り口に強い酒をぶっ掛けてやりながらやるしかないですね。」

「流石にあの子に其れは酷かな？」

「ま、まあ、そう思います。」

「ところで私の腹を縫ったときはどうしたんだい？」

「ぐぬ、え、えっとだね……自分の、だ」

「聞かないでよくよ。まあ、殺菌はしょうがない。酒をぶっ掛けよう。」

「痛みはどうすんです？まさか何もせずに斬ったら悶絶しますよ。」

「其れなんだが……なんていうか知らないが、アヘンだとかタイマだとかって聞いたことあるか。」

「アヘン？来たこと無いですね。」

「どうやら言葉は通じてても、ちょっとした名称等は通じないようだ。カサブランカ〃タタラアルバイダの様に名前はうまく伝わらないようだ。」

ふと、私は絵を描いてみようと思った。

羊皮紙とペン、インクを鞆の中に入れてきていたのでスケッチを描いて見せた。

「うーん、見たことあるような無いような……農業区の連中に聞いてみればわかるかもしれません。ちよいと朝出会ったゼア二に聞いてみましょう。」

ということでは今日は一旦引き上げて、農業区やらを回るながらゼア二を訪ねるついでに歩きながら話そうということになった。

帰り間際に髭が土下座をしてきてアルが大層困っていた。

今更だが髭の名前はサシユワルという事を思い出した。

宿舎（収容棟）を出たとき、水のせせらぎの音が聞こえた。

目で見ると汚水そのものだが、目を瞑ると小川のような気がして、心が安らぐ。

意図したのは分からないが夜寝るときに落ち着くのは此れのおかげか。

目を瞑り、小川のせせらぎの音が体に浸透する。

祖国日本の原風景がまぶたに浮かぶ。

ふと懐かしく思う。

あのころには気がつかなかった音に今気づく。

まだほんの僅かな時しか経っていないのに、何故だか何年か経っているような気がした。

少し先に歩んでいたアルが私が水道をみてボーツとしているのがつき、歩みを止めて此方に振り向く。  
私の事と呼んでいた。

我にかえり、謝辞を述べて三步後ろからついて行つてやった。  
元、男である私が一番望んでいたシチエーションである。できれば前世である子にこうして貰いたかった。  
なので自分がそう振舞つて、少しでも満足感を得る。少し楽しい。

アルを覗くと、その微妙な距離感の所為かアルは頬を染めていた。

せせらぎや百合の匂ひに誘われて



#### 第四話　せゝらぎ（後書き）

最後は自分の理想の姿です。

医学に詳しくないのに突っ込んだところを書く、これまたおかしいことになるので深くは突っ込まず物語の構成であつたほうが良いと思うとこだけ書こうと努力しました。

医学について語りたいわけでは無く、剣戟がしたいので其れを盛り上げるために如何に色々な人物に背景を仕込むかと言つのがむづかしいですね。

## 第五話 れんさつ

何故わたしたちはこんなに困窮しなくてはならないのだろう。

同じ人間であるはずなのに、魔法が使えと言っただけで暖かい家で寝ているだけで腹いっぱいになれるのだろう。

魔法が使えないわたし達は過酷な労働をし、寒い日も凍えて暮らし、食えるものはパン一つ。

もちろん金はもらえる。だが、やっと食っていけるだけの金しかない。その日の食い物を買ったらそれでおしまい。

食い物を作っている人達も今が精一杯で、食い物と引き換えに貰った金も次の食料を確保するために無くなってしまうと言う。

わたし達が作った芋やムギはどこに行ったのだろう。  
バルボタス

わたしは魔術師が憎い。彼らもここで働いてみると良い。

巡回にくる監視の魔術師は働いてない者を見つけるとひどいことをする。

何のために金を払っているかと怒鳴る。

何故わたし達は働けど働けどその日暮なのか。

わたしは其れを解明したい。

そして魔術師たちを踏みつけたい、わたし達の分まで働かせたい。

そんなことを、やんわりとヒットレルさんに話してみた。

ヒットレルさんは不思議な人だ。

見た目は私と同じ女の子なのに何故だか兄の様な、いや何とも言えぬ物がある。

それでいて博識だ。

今朝の食事のときに「どうしてこの黒パンは3オウラもするんだろう」といったら、

「そもそも物には値段は無い。例えばこのパンも元々は値段は無い。なぜ値段がつくかというと、それは人の手、労働が加わったからで、そして市場へ出されたからだ。市場に出されればそれは何でも価値、値段がつく。そういえば、みんなが使っているであろう金には元来価値などない。金を食えば腹が膨れるのかということだ。

人間生活にとって一つの物が有用であるとき、その物は使用価値になる。使用価値というのは役に立つもの、つまりこのパンを食えば空腹をしのげると言う具合のこと。

使用価値は消費されてこそ実現されるという事。パンは食えば無くなるからね。その使用価値は富の社会的形態がどうであれ、交換価値とはイコールの関係なんだ。

交換価値というのは、少しばかり難しいかな。例えば君が服を作つて、このパンと交換したとしよう。服が欲しかった者はそれが満たされるし、君もパンが欲しかったのが満たされるだろう。

何故、違う物なのに、交換できるんだらうね。そして今は何故、パンと金オウラは交換できるんだらうね。

……私はこの世のことをあまり知らない。だが、君の話を聞くに、君達のような状況を搾取されていると言う。」

そう言った上でわたしの事を褒めてくれた。

こういうことに気づく人は凄い人なんだと言った。そういう者がいるからこそ、万人が幸せな国が作られると言った。

話の途中で兄が割って入ったのでこの話は又今度ということになった。

ちよっとふくれていたら、ヒットレルさんが笑顔のほうがいいと言った。

そして言葉について教えてくれた。

まだ難しく、理解はできないが、どうしてヒットレルさんはそんな事が理解できるのだろう。どこで知ったのだろう。

そんなに物知りなのに、常識的なことは全く知らないみたいだ。

金の単位も昨夜初めて知ったらしい。

魔法石を粉碎した粉を紙に振りかけて、それに魔法を掛けたものがこの国の通貨で、その通貨をオウラと言う。と教えてあげた。

大体鍛冶区の奴隷が貰える1日の給金が12オウラで、飯が一食5オウラ程度であると教えたなら、驚嘆すると共に、納得した様子だった。

ヒットレルさんと話していると面白い。

ヒットレルさんは今は兄と共に出かけている。

今夜は何を話そうか。

その交換価値について聞いてみたいな。

突然ノックがした。

誰何をした。

「僕だ。ハリックス・サラノフだよ。」

なんだ、ナジウム領主様か。

この国の王の息子でナジウム領主、つまりこの魔術師達の親玉である。わたしよりも3歳年上。

奴は事あるごとにわたしの部屋にお忍びで来る。兄がいないときにわたしは魔術師やらが嫌いなので相手にしない。

何時も、僕は奴隷と魔術師の関係を嘆いてるだの、わたしを城で働

かせてやるだの言ってくる。

何が「嘆いている」か。ならこの現状は何故続くのか。そう言ってもやると黙って帰る。

今日は何用か。

開けてくれとせがんできた。しかしわたしはいつも開けない。するといつもドアの前で語り始める。

奴隷に対する給金の改善を官吏たちに相談したという話を聞かされた。

しかしこのパターンの時はいつも、

「だが聞き入れてくれなかった。しかし、いつか僕が変えてやる。」

という話。今日もこの通り。

ここの領主ならなんとかしたらどうなんだ。魔術師様の泣き言なんか聞きたくない。

「……あなたも結局、わたし達を搾取して……お腹いっぱい食べて、暖かい部屋で寝ているのでしょうか？……理想じゃわたしたちは食べていけないの。あなたたちの所為でね。」

「さ、搾取？えと、どういう意味の言葉だい？」

わたしもまだ良く理解していなかった。ヒットレルさんの言葉をつい使ってしまった。失態だった。

暫く黙っていたら、足音がして、しだいに遠のいていった。

ドアを開けてみるとドアの前にアランカザンダツカの花が置いてあった。

その花を拾い上げて花瓶に入れてベットに潜り込んだ。

わたしは自らを戒めた。

こんなことでは駄目だ。

彼らは力でねじ伏せてくる。

力の差は圧倒的だ。

だが口は平等だ。

口と頭は彼らと変わらない。

だから口ですら負けていては何も成し得ない。

わたしはもつと学ばなくてはならない。

この世界の仕組みを学ばなくてはならない。

そしてこの現状を打倒する術を見つけなくてはならない。

窓の向うから聞こえてくる屈強な男達はなにもできない。

兄もなにもできない。

ならば、わたしがやるしかない。

もつと勉強しないといけないな。

ヒットレルさんと話をもつとしたい。

兄では駄目だ。話をしてもついてこない。

今夜はヒットレルさんと話しをして夜を明かそう。

アルの後ろについて居住区を歩いてゆく。  
太陽は真上を過ぎた頃。

暫く言ったところで何やら服を売る露店のようなのをみつけた。

ここで商売していいのかと聞いたら、労働者内での物のやり取りは居住区内でなら認められているとの事だった。

木綿の様な材質の服だが、質が悪いと言ったら、これは出荷できなかったできそこないで、我々はここからしか物を得られないとのことだった。

いくらなのかと問うたら6オウラだそうだ。オウラはこの国の通貨だそうだ。

ちなみに他の国ではどうなのかと問うたら、それぞれの国で違うらしい。

他国との貿易の際には、昔ながらの金貨、銀貨、銅貨を使うらしい。  
変動するらしいが、だいたい銅貨一枚は十万オウラに相当して、銅貨100枚で銀貨一枚、銀貨1000枚で金貨一枚だそうだ。

しばらく歩くと広場があった。此処は全ての区の中央に位置する場所らしい。

広場の真ん中には杖と剣を持ち甲冑を着込んだ偉そうな人の銅像が立っていた。かなり大きい。10メートルくらいあるのではないかと思い、一体どれくらいの高さなのかとアルに尋ねた。

「かなり大きいがどれ位の高さか」

「9メートルちよつとですね」

む、ここは私の居た世界とは違うのにメートル法なのか？不思議に思っ  
てメートルとは何かと尋ねた。

「メートルの前にセンチがあつて、1センチは私の小指の爪ほどです。そのセンチが100になったら1メートルと数えます。」

「そのメートルは全国共通なのか？」

「国によって様々です。統一しようとしたこともあつたらしいですが、各々の国が自国の単位を推すのでまとまっていません。」

「ちなみにこの像はこの国、『ブラゴーニエ帝国』皇帝『ニーカ・サラノフ』の像です」

なるほどメートルは前の世界とそれほど変わらん測り方で助かる。にしてもこの国はブラゴーニエというのか。王の名前がニーカ・サラノフとは、名前の同じメートルやら、この世界ができそこないの子とはよく言つたものだ。

その名前を聞いて、私がこの世界でやるべきことが分かつたような気がした。

だが、今はまだ早い。きつかけが必要だ等と思案しつつ、アルと喋つていたら農業区へついた。

結構広く、東を見るとなだらかな平原の様な土地で南を見ると森、山があつた。

この土地は比較的寒冷で青森県のような寒さであつた。森には毛皮向きの動物がうろつき、川には魚が群れを成している。所々で牛や羊などを放牧している様が見える。

栽培しているのは小麦、芋だろうか。田畑も一面に広がり、見えるだけで三里先まで広がっている。

人々がせわしなく働いており、コルボース集団農場を髣髴とさせる。

川沿いに歩いていくと見事な引水、治水工事の後が見える。

水田のそばには彼岸花アランカザンダッカが咲いていた。

暫く歩いていくと林道があり、あなたはあの辺で倒れていたんですよと指差された先には、ちょっとした空間があり、そのなかに彼岸花アランカザンダッカの花畑が見える。ここは元は田であつたが、立地が悪いので使わず放置していたらこの様になったという。

林道を歩いていくと綿の栽培をしている区画に出た。

そこに件のゼアニが居た。

あれこれこういう植物を探していると言つたら案内するから着いて来いと言うことで着いて行ったら、少し乾燥した地面に見事にアヘンが咲いていた。

彼らは「ダスモニ」と呼ぶそうだが、目立つ花だ程度の扱いだつた。私はこの植物の薬学的効果をアルにこうだ あゝだと説明した。それほど詳しくは無かつたが、鎮痛剤、麻酔薬として此れほど効果的なものはないと言つて収穫法を紹介した。

「こんな凄い花だったとは思わなかったよ」とゼア二

「少しだけなら鎮痛、催眠、消化促進、咳止め、腹部疾患の治療等に効果がある。但し多量に服用すると昏睡状態になる恐れがある。アルなら薬についての心得はあるから大丈夫だろうが」

と現代人の知る苦い歴史もあるので義務として一つ忠告して置く。

何はともあれ、これは新たに栽培すべきだと同一一致。

しかしこれは内密に栽培したいとお願いをした。

理由を知りたがったので、件の魔術師の話をだした。

しかし魔術師は魔法で治療もするし、水質管理もできるし、火も起こせるし。なんでもできるのでそんな草など見つけても何も気にしないから大丈夫だろうなどと言われたが、私はどうしても栽培していることは内密にしたい。

「ダスモニ」の発見は大きい。これはちよいと私が考えていることに今後絶対に必要であるのでどうしても栽培は隠匿したい。

話は、ゼア二が責任を持って隠匿して栽培をし、薬剤としてはアルが新たな調合法の結果こういう薬剤ができた。ということにすると言うことになった。

ゼア二の瞳を見つめて力説してやったら頬を染めて頷いてくれた。やはり女子でも可愛い娘の視線には敵わないということだ。

そんなこんなで部屋へ帰ってきた時にはもう夕暮れであつた。

もうこんな刻限か。体内時計によると、どうやら一日は二十四時間であろうとの事だったので少し安堵する。

同じ腹の子であるので、そういうもんなのだろう。

戻ると我々を待っていたのだろうか、何人かの人が部屋の前に居た。アンに、ただいまと言いつゝこの方々は何だと問うたら、どうやらうちにきた患者らしい。

なるほど腕がパッキリ切れて出血してる者やら、つらそうにしている者やらがいる。

アルと共に彼らの治療をしていたら、もう日は沈んでいた。

夜空を見上げたら、面妖なことにお月様が一つと、月の回りに土星の輪のようなものがある。

面白い月だなどと思っていたら、もう飯だそうだ。

そつえば私は金を持っていないぞと思い、その旨をアルに伝えたところ彼が私の分まで食わしてくれるそうだ。

かなり働いて呉れて、凄く助かっている、そもそも自分一人でやっていくのは無理であった等と言われたので、彼の耳元で有難うと言っておいた。

そもそも3人ほどは養える給金は貰っているので構はない等と言うことを言っていたが、ろれつが回っていないのか、カミ過ぎであった。

アルは食事を取ってくるといって部屋を出て行ったので、アンと話そうと、さて何の話題を振ろうかなどと考える前に向うから口を開いた。

「あの、わたしたちが搾取されている、と言うことについて教えてください」

と言った。

見た目は十歳ほどなのに随分と難しい事を聞くものだ。

私が其れを理解したのは高校生の時分であるというのに。

だが、其れを教えて呉れと言うのだ。

今朝も話をしたが、難しすぎて興味が無いのだろうと思っていた私は、そんなことを口走った事などさして記憶に無かったのだが、もしかしたら彼女はこの国を転覆させられる器なのかもしれないな。

なら誰が断れようか。

この国は封建社会であり、国王の権力がそこそこ強く、領主、貴族（いわゆる魔術師）達は商売熱心な、トンデモ社会である。

そんな社会に不満や疑問を浮かべる者もいるだろうが、今、目の前の赤髪三つ編み少女のアンジュルペナがそうだとは。

アンは妹のようだ。なら理想の女子おなこに育てたくなるのは当然。

私はアンに凡てを教えてあげようと思ったのは、言葉を交わしてから、ほんの一日しか掛からなかった。

「搾取されている。という話をする前に、労働について語らないといけないね。搾取についての話はまだまだずつと先だね。つまらないかも知れないが良いのかい。」

アンは強く肯いた。

「えと、労働の前に交換価値について続きを話さなければならない

か。今朝は何処まで話したか覚えているか。」

「違う物なのに、価値が違う物と交換できるか、という所までですね。」

「そうだったか。思い出したよ。」

「鉄、パン、小麦…そういう商品は凡て使用価値と言える。使用価値だからこそ、交換価値になる。」

例えば…と言いつけたところでアルが食事を持って戻ってきた。

アンは苛立ちの顔を見せたが、私はいい匂いにつられて特段気にしなかった。

今日は芋バルボタスを入れたスープであるようだ。

味は香辛料が入っていないので述べるまでも無いが、食っていると  
言う感覚が嬉しいと思った。

なぜなら、此処最近、まったく食欲が無く、そして腹が減ることが  
なかったのだ。

理由を考えたら当然で、私はカイゼル髭に「不老」にして呉れと言  
ったのだった。

屹度それに関連して、腹が空かなくなったのだろう。

飢える事は無くなったが、食の楽しみが無くなると言うのは悲しい  
ことだ。

だから、食事をする機会が得られるのは嬉しいことだと思った。

食事をしながら、この世界の情勢を教えてもらった。

今いる街、「ナジウム」は「ブラゴーニエ帝国」の首都「ウェルカ」  
から南西に下って、ブラゴーニエの東と西の丁度中央付近にある丘  
陵地帯からウェルカ方面へ東に流れてくるブラヴ川沿い900キロ  
の地点にあるらしい。

この国の、東から西への総距離は8000キロにも及ぶそうだ。  
ロシア辺りを想像すると理解できた。

流石に話では伝わらないと見たのか、絵を描いて呉れた。

[http://4017.mitemin.net/i31676/  
>i31676-4017<](http://4017.mitemin.net/i31676/i31676-4017)

彼の話をもとめると、

同盟中　モハゼ連王国、ダフタス帝国とハルフオセン公国

シエム連邦とパレンヴァン王国

永世中立宣言　セエズ共和国

サパイン国は共和派と王政派で内戦中

共和派支援国

モハゼ連王国、ダフタス帝国、パレンヴァン王国と神聖デロン帝国

王政派支援国

ブラゴニーエ帝国、ジソンジ王国とイエンプル国

テリーフ民国とイエグザン皇国は戦争中

である。

その他諸々、述べるまでもない事を話していたら、一同食い終わっ

た。

ところで風呂に入りたい。

老化しないので新陳代謝は無いと思われるが、一日の終わりは風呂に入らなければ落ち着かないとは日本人の性質か。

昨夜は体を拭いただけである。

それを話したら、大衆浴場、個人風呂は魔術師だけのもので、我々はいれないとの事だ。

小さいので良いから風呂に入りたいのだが、この様子では無理なのか。暫し落ち込む。

仕方が無いので自分の部屋で体を拭いて我慢することにする。

体を拭き、部屋を出たら、アンが話がしたいので彼女の部屋へ着てくれと言うそうだ。

だが、アルがその前に私と話したいことがあると言うので、どうしたものかと思っていたら、アンは後でいいとの事だったので、謝辞を述べつつ、アルの部屋へ行った。

アルの話は、例の白髪少女サウサンについてだった。

何日後に手術を行うかと言う話だったので、ダスモニを収獲し、薬剤へ加工しなくてはならないので、其れができしだいと言うことになった。

手術に関しては、私にやって欲しいとの事だったが、アルの方が経験が上で私は経験がとて少ない等と言って彼にやってもらうことにした。

そもそも手術などやったことが無いので、下手に私が切るより、経験者に任せたほうが得策だろう。自分の腹は二回斬ったが。

しかし、改めて、盲腸である自信が無いという事と、衛生が悪いので破傷風になる可能性が高いという旨を話したが、経験からこのまま置いておいても死ぬであろうし、髭も承知だろうと言っていた。何もせずに死なせるよりは、手を尽くしたいとの事だそうだ。医者鑑である。中世ヨーロッパももう少し言う医者が多ければあんな評価は受けなかったのかもしれないと思っていると、アンが部屋に来てくれとせがんだので、アルとはどうせ明日また一緒に仕事をするのだからと言うことで、おやすみとだけ言っておいてアルに手を引つ張られるまゝ、彼女の部屋へ行った。

部屋に入ったら、よい香りがした。  
所々に花が飾つてある。

女の子らしい可愛い部屋だなど見ていたら、ベットの横の棚には「軍事要覧」やら「神学」やら「魔法図鑑」やら「戦争と金」やら「奴隷を用いた生産のすゝめ」等という題の本が置いてあり、なるほど彼女の熱意の程が伺えた。

予想していた通り、晩飯前の話の続きをとせがまれた。

その前に、羊皮紙とペンを持ってきてもらい、受け取ると同時に、何故そんなに知りたいのかと聞いたら、  
私たちが出かけている時の話と共に、両親が死んだ事やらを泣きながら話すので、その辺からはなんと云っているのか聞き取れなかったが、

最後にアンは、魔術師と奴隷、富む者と貧しい者がいる世界をひっくり返したいと言った。

私は十分だと言って抱きしめてやって、今夜は月が綺麗だと言って暫く月と一緒に眺めた。

小川の流れる音と虫の鳴き声を聞いていた。

ふと私の胸の中で顔を上げて私の目を見つめてきたので、少し恥ずかしかったが見つめ返してやった。

何か言おうと口を開いたので、私が先に、私が君の先に立つと言って置いた。



## 第五話 れんさつ（後書き）

画像を使ってしまった余り良くないパート。

こればかりはどう文で表現しようかと頭をひねっていたら、画像を使ってしまうと言う考えになって、使った結果あまり美しくない、楽しくない文が出来上がってしまった。

この部分は自分の腕が上がってから書き直そうと思います。

## 第六話 おもわく

僕は城内をメリケフ財務官の部屋まで早足で、力強く歩いていた。

この国は、いや、西陸国家は心が無いのか。

我が国は奴隷を用いた産業で成り立っている。

それは低賃金で働かせても文句一つ言わず、それでいて高品質の商品を生産する、ある意味最高の生産者達。

しかしそれは貴族達がそう考えているだけで、その奴隷達はどのような心持でいるのか。

ここの奴隷達は、貴族が労働力として奴隷を購入し、奴隷区に放り込んでおくと、勝手に自分たちで役割を決め、こちらが望んだとおりの物を望んだ量を生産する。

しかし、彼らの労働の対価は何か。それはわずかなオウラのみ。

この機構はいずれ破綻するであろう。

何度か反乱はあった。しかし我々はその度に力を持って制してきた。

しかしいつまで持つのか。

この街の奴隷七万人に対して、我々は1000人にも満たない。魔法剣士隊を入れても1500人いるかどうか。

そんな少数が多数をいつまで束縛できるのか。

僕は現状をなんとかしたい。

貴族と奴隷などと言う壁を取り払い、何時の日か共に助け合って生きていける日が来るはずだ。

しかし僕には力が無い。まだまだ若い僕は、時期皇帝の為の実績づくりとしてこの街の領主を封ぜられた。

しかし業務は、お付の財務官や軍務官などがやっている。僕には口を出す権利は無い。

いや、正確には出せる。しかしそれが通ることは無い。

ある日僕はアンジュルペナさんと出会った。

初めてこの街の領主となった日。奴隷区を見て回っていたときに「奴隷の花」の花畑の中で彼女と出会った。

それからだろうか。

僕は以前は他の者とかわらない思想だった。

しかし彼女を見てから変わった。

僕は彼女が好きだ。

だからこの生活から抜け出させてやろうと、専属の給士として雇おうと言った。

しかし問題はそこでは無いと跳ね除けられた。

それから僕は変わった。

彼女の為にも、この制度を変えなくてはならない。

今はい小さき事すらできないが、皇帝となったら凡てを変えてやる。

そして彼女に認められたい。

他の者は反対するだろう。

しかし僕は其れを許さない。

そのときには皇帝なのだから。

今は財務官に、奴隷達の給金を上げてはどうかと言っことしかできない。

しかし何時の日か、彼らを解放してやる。

「金貨が何故、パンと交換できるのか。それは先に述べたように、  
A商品X量〃B商品Y量〃C商品Z量〃……

と連なってくると、どこかで「金」何ポンドかと言つのもイコール  
の関係になるだろう？

金を採掘し、金貨とするには当然ながら莫大な労働時間が掛かる。  
これは銀にも当てはまる。

であるので、金貨は僅かな量でも他の商品とイコールになるわけだ。例えば、肉は腐る。ということは一定の時間がたつと使用価値、交換価値を失うわけだ。

そもそも肉何百ポンドを交換して回ろうと思ったら、交換する前に腐ってしまう。他には布なども持ち歩いては汚れてしまう。なので代わりのものが必要だ。そこで皆が信頼した物が金や銀だったわけだ。

金、銀と交換しておけば、他の人も使っているので、都合がよかったのだらう。

それで今日まで金、銀が使われている。」

この話をしていたらもう日の出の刻だった。

アンの目にはクマが出来ていた。

今日はこゝらで止めとこうといって立ち上がる。  
思わず背伸びをする。

アンはメモを取っていた羊皮紙とペンを机に放り、青いインクの付いた手をそのままに、ベットに倒れるように入り込んで、有難う御座いましたと言った。

朝食を摂ったら寝るようについて私も自らの部屋に戻ろうとしたのだが、アンのベットに一寸顔を埋めたが最後、寝てしまった。

気がつけばアルが起こしに着て、朝食を摂ったが、あれからずっと話していたのかと聞かれたので、はぐらかそうとしたらばれていたらしく、ひどく叱責を受けてしまった。

アンの体のこともあるから程ほどにして欲しいとの事で、私は唯机に手を立て腕立て伏せをするしかなかった。

そのような話をしていたらアンが連続して咳をした。

胸をはらせてやったら幾分か楽になったようだ、ひゅうひゅうと音を立て、大きく息を吸っている。

もしやアンは喘息なのか。

ひとつ明治期辺りの吸入器でも作ってやろうと思い、その旨をアルに告げ、南部を懐に入れて鍛冶区へ向かった。

ちよいと道に迷ったが、無事に辿り着く。

トロツコによって運ばれてきた石を男達が溶鉱炉へ運んでいく。

タールの入った樽の山積みになっている所までいくと何やら樽を運んでいる集団に出くわす。

その中の一人が私の方をちらと見て話しかけてきた。

中々に良い体つきをしている。

「あなたがヒットレルさんか！妹の治療をしてくれるそうだな！」

言ったとたんに、周りのものまでもが、あなたがヒットレルさんか等といった。

それに気づいたのか、巡回をしていた魔術師に一同怒鳴られ、一人が何処からともなく現れた火の玉で焼かれた。

男達は火を消そうと着ていた服を脱ぎ、火達磨の彼を服で叩いていたが、死んでしまったようだ。

魔術師はお喋りさせるために金はやっていないと怒鳴った。

一同は彼を睨んだ。

私は

「その偉そうな態度は気に入らん」と言っただけだ。

一同驚嘆の表情を浮かべる。

「誰に対してのその物言いか！」

魔術師は、またもや怒鳴った。

「君は何なのか。」

「魔術師であり、ここの監視を勤めるものだ！」

「魔術師はなぜ彼らのように汗を流して働かない。」

「我々は魔法が使えるからだ。そして魔法の使えない哀れな彼らを雇ってやっている側であり、彼らに金を払っているのだ！その金の分は働いてもらわなくてはならない！よって手を休めることそれすなわち我々の金、皇帝の金を盗んでいることなのだ！」

「魔法が使える者は魔法を使えないものを殺しても良いのか。」

「そのとおりだ。我々の力は偉大であり、尊いものだ！だからこそこの世界は魔術師によつて統治されているのだ！」

「君らは統治者か」

「そうだ」

「どうやってなった？労働者を搾取したのか。時代遅れの帝国主義にしがみついているのだろう。」

「黙らんか！我々がこの世界を統治することは唯一神エザナレルによつて定められているのだ！その証拠にブルゴーニエ初代皇帝は空から降ってきた一本の剣を手にし、その加護によつて死して尚現在までその威光を世に知らしめているのだ！」

「莫迦か。そのようなものは時代遅れだ。そのような宗教は社会の不平等を生み、国を腐敗させるのだ。民の中から選挙によつて選ばれた議員によつて統治されるべきなのだ。空から降つて来た剣を偶々手にした誰か等ではなくてな。」

「黙らんか！意味の分からないことを！皇帝を侮辱するとはこの国の魔術師を侮辱したと同義！死してその償いをしてもらう！」

「弾圧するのか。見よ！此れが弾圧の現場だ！この場にいる八万を君一人で相手取るのか！少数が多数を弾圧することなどできない。」

魔術師は剣を引き抜いた。その剣には炎の衣がまとう。

私は南部を入れたローブの下の白装束の袖に手を入れた。

距離は十メートル。

「この街にいる八万の労働者よ団結せよ！彼ら貴族重商主義者、ブルジョアジーどもは瀕死である。その証拠に論理を以って我々をとめることは出来ないのだ。力に頼るしか術が無いのだ！この日を忘れるな！魔法を使えないものが魔術師に勝った日を！」

魔術師は駆け出した。

右手に炎をまとったショートソードを持っている。

口元で何かを呟く。

私は南部を右手の袖の中で掴む。

距離は9メートル。この距離は拳銃にとって有効射程になるかどうかの分かれ目。

距離が4メートルにもなれば拳銃は近距離においての有効な武器となりえなくなる。

しかし遠すぎれば命中しない。

魔術師の周りに火の玉が纏う。

南部を持った右手を袖から出す。銃口はまだ地面を向いている。

南部を持つ右手を持ち上げると同時にだらんと下げていた左手を持ち上げる。

魔術師は体を剣を持つ手が後方になるよう斜めにして駆ける、前に出た左手には炎がまとっている。

私は銃口を魔術師に向ける。  
照門に魔術師を捉える。

魔術師の体の回りにまとっていた火の玉が左手に集まってゆく。  
魔術師は左手を上げる。  
左手に大きな火の玉が現れる。

照星に魔術師が入った。  
左手を右手に重ねる。

魔術師の背後にはタールの樽がある。  
万が一はずしても勝機は、ある。

それにこの魔術師が纏うは火。危なくなれば、ローブにしまった応急治療用の酒の小瓶を叩きつけられよう。

距離は6メートル。

引き金に人差し指を押し当てる。後は指に力を入れるだけ。

魔術師は左手を振り下ろそうとした。

その瞬間。

「そこまでだ！」

と言う声が聞こえた。  
私も魔術師も動きを止める。

声の主を見ると金髪の少年である。

タイツをはいて半ズボンをはいている。上着は青い長い燕尾服の様なものを着ていて所々金色の装飾が荒れている。

魔術師が、何故止めるのかのような事を言っていた。最後に殿下と付いている。

「彼女は見たところ医者ではないか。貴重な労働力を君は消し去ろうとしていたのだ。それこそ金を盗んでいると言つことだ。」

魔術師は何やら言つて退散した。

殿下と呼ばれた少年は、いつか話がしたいと言つ類のことを言つて歸つていった。

その後、歓声が上がリ、最後はうやむやであつたが私は一つ目的を果たした。

もう少し後になるかと思つたが、好機を逃せなかつた。

早すぎたかもしれないが、この奴隷区で地下活動をする団体があるのならば、近いうちに出会う事になるだろう。

ならば早いほど良い。

今回の一件の噂は近いうちに彼らの耳に入るだろう。

そしてこの件で体制側はより、我々に対して厳しくするだろう。

この世界は農奴制よりかは甘い。

体制が我々を限界まで弾圧せねば私の理想はかなわぬ。

どうにも私は体制を敵にすると燃えあがってしまうな。

しかし実際のところ、魔法と言つのがそれほど理解できていない段

階であつたので、とても肝を冷やした。

と、ここで本来の目的を思い出し、ちよいとばかり鉄パイプか何か無いかなどと聞こうと思つたが、歓声にまみれて聞けなかった。

仕方が無いので、さっきの肉付きの良い兄ちゃんを引っ張つて歓声の中から脱した。

彼は何やら私を賞賛していたが、ならばこれこれこういうものはないかと尋ねたら、あるから後で届けるといった。

私の部屋は分かるかと問うたら、アルヘルワのとこだらう、わかるとの事だったので、それぢや頼むといつてその場を去つた。

帰る前に耐熱グローブとおぼしきものと小瓶とを持って帰つた。

部屋に戻ったら、アルに借りた薬草図鑑で前世で見た喘息に効くという代物に含まれていた物に似たものは無いかなどと探していたら、丁度アンの部屋のたくさんある花の一つに其れを見つけたのでひとつ貰つていった。

薬草をランプと小瓶を使って茹でて煎じていると、件の肉付きの良い兄ちゃんが真鍮製のパイプと銅製の板をいくつか持つて来た。

真鍮は彼が独自に試作したもので数がないが、妹を治してくれるならといていた。

私は氣になつて、妹とは誰かと問うたら、サウサンのことだったらしい。

なるほど、彼が件の兄か。

名前を聞けばサタハフというらしい。

君も大変だらうと言つたが妹の為ならと言つていた。

正直言つて、失敗するかもしれないぞと言つたが、それでも手を尽くしてくれるのは感謝してもしきれないとの事だった。

抜け出してきたので直ぐに戻らなくてはとのことだったので、お礼を言つて見送つた。

アルは今、件のサウサンの様子を診た後、いくつか患者を診て回っているそうだ。

パイプやら鉄の板やらを組み合わせで吸入器をつくつてやつた。

持つてきてもらつた時点で既に通りの長さや穴が開けられていたので助かった。

部屋で寝ていたアンを起こしにいった。

いいものをやろうと云つて吸入器（結構重い）を机の上においた。

「これはだな、吸入器と云つて、この噴霧管をはずして、釜の口にこの漏斗と呼ばれるものを使って水を入れる。

下においてあるアルコールランプに火をつけて暫し待とう」

使い方を、蒸気が収まつたらタオルなどで前を覆つて云々、霧口から十センチほど離れて云々、この小瓶に煎じた薬草を入れて、薬液ビンの薬がなくなるまでゆっくり吸い込むんだ。

などと説明して、此れを一ヶ月もやればよくなるだろう。

私からのプレゼントだと言つて置いた。

最初は戸惑っていたが、蒸気を吸い込むのに快感を覚えたのか気持ちよさそうにしていた。

暫くアンと話をしていたら、アルが帰ってきた。

帰ってくるなり、鍛冶区の件で噂になっ  
てい  
ると言ってきた。

何故あんなことをしたのかと問い詰められ、アンにも理由は何かと問われたので、

「たとえばー人間の労働があらゆる富の源泉であり、資本家ーつまり言うところの魔術師は、労働力を買い入れて労働者<sup>どれい</sup>を働かせ、新たな価値の付加された商品を販売することによって利益をあげ、資本を吸収する。

資本家の際限の無い、競争は生産を破綻させ、労働者は生活が困窮する。

他人との団結の仕方を学び、組織的な行動ができるようになると、やがて革命を起こして、貴族重商主義、奴隷経済主義を転覆させる。そういうことだ。」

と答えておいた。

アルは口をへの字にして納得いかないようだったが、アンは瞳を輝かせ、しきりに凄いです！すごいです！とかなんとか言っていた。

そんなこんなで食事の後アルに吸入器を見せて、アンの喘息もこれで幾分か和らぐだろうといってやったら、への字から満面の笑顔になった。面白い奴だ。

食事の後、またもやアンに部屋へ誘われたので、貨幣の資本への転化について話をし  
て  
や  
っ  
た。

昨夜のように気がついたら朝だった、ということを見ると、アルがうるさいので適当な時間で一つ区切りを置いて、今日はここまでとしました。

アンはもっと聞きたがっていたが、体が付いていかないので、ベツトにねっころぶなりすぐに寝息を立ててしまった。可愛いなおもいながら暫く髪を撫でて遊んでいた。

「殿下、この街で生産される物の売れ行きがよろしくありません。半年前は景気が良かったので新たに奴隷を投入しましたが……これでは生産量を抑える必要がありますな。」

ふむ、これならば労働者達も少しばかり楽になるかな。働く時間が減るのだ。少しばかりだが、我々の収入は減るが代わりに彼らが楽

になつてくれれば良い。

「しかし、唯そのまま生産量を減らしただけでは労働力があまつてしまいます。なので給金を下げるのです。彼らは文句をいいますまい。仕事の量が減つたのなら、給金を下げて当然でしょう。」

「メリケフ、ちょよ、ちょつとまつてくれ、しかしそれでは彼らの生活はどうなる？今でさえ苦しんでいると言つのに。」

「殿下！我々は遊びでやっているのではないですよ！

いいですか。金はいくらあつても足りないんです。軍の維持、建造物の維持、奴隷とはいえ維持費がかかるんです！

どうしても彼らの生活が心配なら、もっと仕事のある地域へ売るのも手です。

ここはほかと比べればとんでもないくらい彼らを厚遇してるんですよ！」

この世界は、奴隷と言っても農奴よりはやさしい。  
今のままでは、反乱を起こしてまでも社会を変えようなどとは思わないだろう。

だから私はきつかけをつくる。

彼らは今まで以上に苦しむことになるだろう。  
だが知ったことが。

この世界は魔術師と呼ばれる少数派でありながら多数派によって何千年も支配されている。

では真の多数派はどうしているのか。

搾取され、力に負け、少数派になっているのだ。

この世界は正されねばならん。

私は彼らを<sup>先導</sup>扇動する。

自らの理想の為に。

彼らが苦しもうが、魔術師達が絞首台へつれられようが、そのようなことは関知しない。

あるのは祖国の建設のみ。

前世の日本がどうなったかは知る由も無い。

しかし、今回は最期まで見届ける。

私の手で作るのだから。

かつて前世ではなしえなかった真の祖国<sup>口出する国</sup>を建設する。



## 第七話 ゆうひ

（改稿）

わたしは城の一角にいる。

何ということだ！鍛冶区での一件以来、わたしは他の魔法剣士達から軽蔑の目を向けられていた。

最初は、

奴隷の分際で楯突きおったので斬り捨てようとしたが殿下がお止めになった。殿下はなぜ彼女を罰しないのか。皇帝の威光に泥を塗ろうとしたのだぞ！奴隷の分際で！殿下は何を考えているか！

と反ハリックス派の連中に愚痴っていたのだが、当初わたしは彼らは同調してくれると思っていた。

しかし、現実には彼らはわたしの事を、

「己の学が足らん故に我らへの侮辱を正せ無かったことを正当化しようとしおって！」

とほざき始めたのだ！

この話は殿下の耳をはじめメリカフ財務官やラルチャーク軍務官の耳にまで入り、もはや出世の道は絶たれたも同義。

わたしは魔法剣士である。魔法剣士は魔術師の中でも下のほうの位に位置する。

唯単に魔法の出来が悪いことだけではなく、家もほかと比べると裕福ではない。

それもそうだ。わたし達は奴隷を労働力として買ってはいるが、同時にその又上の、魔法剣士隊に労働力として買われているのだから。その魔法剣士隊もその又上に買われているが、際限が無いのでここ

では言わない。

だから出世をしなければ！かつて私は金が無いばかりに病気を患った母の治療をしてやれなかった。

家の周りの水も、浄化魔法を掛ける費用がなかった。

自分で掛けてみたが、効果は薄く、専門家には全くかなわなかった。

金さえあれば。

と思い魔法剣士隊へ入った。

戦時ならば簡単に武功を立てれるが、平時ともなればそうは行かず、どうしたものかと思っていたら、配属されたナジムの鍛冶区で皇帝の威光を疑う奴隷が居た。

―此れをひつとらえれば一つ功を得られる。

警備へ配属されたものは、反抗的な奴隷等をひつ捕まえると、功がえられる。すなわち収入が増えるということだ。

知り合いの中にはでっち上げで、奴隷に言いがかりをつけてひつ捕らえる者もいる。

その点、わたしのなんと誠実なことか！

わたしはきちんと両の耳で聞いたのだ！彼奴が侮辱の言葉を吐いたのを！しかし斬り捨てようとするところで殿下は止めた。

わたしは正しいことをしたはずなのだ！それなのになぜこの様な仕打ちを受けねばならん！

今では既に出世はなく、解雇される寸前かもしれん。

どうしてこうなった！

そうだ。凡てあの奴隷が悪いのだ！

奴隷の癖に、よく分からない論理を振りかざしおって。

あやつを殺さねば気がすまぬ！

そう思い立って奴隷区へ出向いた。

相も変わらず貧相なところだ。

居住区を歩くと水の流れる音がするが、見てみると、なんだとつても汚いではないか。自らで掘って作った水路であると思うが、彼奴らはこの水を飲んだりしているというのか！

魔法の使えないことの何と哀れなことよ。

魔法が使えれば、水など一回大量に汲んでおけば魔法で何回も清められる。

流石に大量のは専門家にしか出来ないが、自分が飲む分くらいなら私にだって出来る。

奴隷達はこんな水路をつくってまで汚い水を飲んでいるのか。

だが同情はせぬ。

あの黒髪の女奴隷の収容されている場所は調べた。

たしかここのはずだ。

その棟の前で赤髪の少女が何やらよく分からんもじゃもじゃ髭と話

している。

通り過ぎた瞬間、会話が聞こえた。

その会話によるとどうやらこの赤髪は件の黒髪奴隷と親しいらしい。

こいつは使えるぞ！

流石に公衆の面前でいきなり斬り捨てるのもどうかと思っていたところだ！利用させてもらおう！

その赤髪少女はなにやら移動するようなので、地べたで露店をやっている奴隷から、陳列してあったローブを徴収し後をつけた。

後をつけると奴隷の花が大量に生えている場所についた。

奴隷の花は奴隷らがいる場所にしか咲かないのでそう呼ばれている。

暫く様子を伺っていると、独り言を話していた。

その話を聞くに、ここに居れば例の黒髪が迎えにくるそうだ。

なんと運の良いことか！

日々誠実に過ごしていた甲斐があった。

わたしは赤髪少女をひっ捕まえ、わざと足跡を残して森の中に入った。

森の中なら、他の巡回している魔法剣士にもみられまい。

殺して死体を残すと、殿下に殺したとばれるだろう。

何やら殿下はあの奴隷に興味がある様子。殺したとばれれば、益々わたしの立場が危うくなる。

しかし、脱走を企てたとしたら？

街の外には追いはぎがうろろしている。

この農業区は城壁でカバーできていない。ならばこの森で殺した後、死体を城壁の外の原っぱにほかっておけば、脱走を企てたが追いはぎに殺されたのだ、ということに出来る！

ちよつと開けていて、尚且つ目立たず、足跡が残りやすい場所まで行き、赤髪少女を気絶させ、彼奴が来るのを待った。

鍛冶区の件からはや1週間と何日かたった。

アンもだいぶよくなったようだ。今では私が外に出るときはよく付いてくるようになったしアルも其れを認めていた。

私とアンはよく農業区へいった。

彼岸花を見たり、川の底を泳ぐ鮮やかな魚などを面白いと思って眺めたりした。

私たちはよくそこで適当な岩を見つけて、腰を下ろして、私は本を広げ、アンは羊皮紙を広げた。

私が読んだ本は、薬草学だとかこの世界の神学だったり奴隷経済についてだったりした。

アンはいつも羊皮紙とペンとインクを持ち歩いていた。

私が本を読みながら、労働についてだとか、資本についてだとかを話すのを、しきりに書き留めているようだった。

ある日、ふと私が、絵は描くか、と問うたら、無い、とのことだったので、

ぢゃあスケッチをしよう。と言ってやった。

アンは絵ではなくて、経済に付いての方が知りたいと言っていた。

幾ら好きでも学問ばかりでは体に毒だ。たまには息抜きも必要だろうと言ってやったら、わかりましたと言った。

最初は渋々やっていると言うような様子だったが、しだいに楽しくなったのか、川を泳ぐ青魚や、その辺の野草などを描いたりした。

しかし本命はやはり学問に関してだったので、ついでのと思い火薬の精製法やら戦術についても雑学として話をしてやったりしながらすごしていた。

時間があれば色々なところを見て回っていたので、奴隷区の人たちとも大分顔なじみになった。

しかし労働者達の給金も下がり、人々は困窮している。

不満の声も上がっているが、何とかやっているようだ。

私は相も変わらず、アルの助手をしながら今朝はアンへ余剰価値について教えた。

その一週間の間にサウサンの手術をした。

私の予想通り盲腸であった。

その日はうまくいった。彼女の父、兄からはとても感謝された。

しかし三日後に死んだ。

アルは斬るときにメスを使った。（前世の様なものではないが便宜上そう呼ぶ）

そのメスの刃に鉛が含まれていた。

おそらく彼女は其れによって死んだのだろう。もしくは衛生環境によったか。

私たちはとにかくサシュワルとサタハフに頭を下げるしかなかった。サウサンの亡骸は例の私が倒れていた付近の彼岸花の下に埋められた。

彼らは、しかし感謝していると言った。サタハフは泣いて睦むいていたが、サシュワルはなにか別のものを見据えているようだった。それはサウサンの葬儀（といっても簡単なものだが）の帰りにわかった。

その日の帰りにサシュワルは話があると言って、私を呼んだ。なにかしらと思って林の中まで付いていくと、彼は私にこう打ち明

けた。

「俺達はもう虐げられる生活には我慢ならない。サウサンの件でわかった。俺達は奴隷と言う立場にいるからだめなんだと。娘だって奴隷じゃなかったら、こんな事にはなら無ったかもしれないだろ。俺はこの国をひっくり返す。俺達も魔術士も同じ人間だろう？魔術師は毎日腹いっぱい食ってるんだろう。だったらなぜ俺達は日々のパンに困っているんだ。」

この国、いや世界を変えなきゃならない。これは私利私欲からくる野望だとかではない。この世界に暮らす凡ての赤髪白髪の生活の為に戦おうと思っている。」

私はわかったと言った。

「あんたの噂は俺の耳にも入っている。魔術師どもに、お前達は口ではかてないから手を上げるんだ、とかいって言い負かしたそうじゃないか。娘とそう変わらない年の女の子なのに、随分と気が勇氣があるな。」

ああ、すまない。侮辱だとかそういうのぢやないんだ。俺達の同志になーいや協力してくれないか。」

彼は政府転覆をねらう地下組織の一員だった。

彼の目は燃えていた。

革命の炎に燃えていた。

同胞の為に

家族の為に

死んだ娘の為に

彼は絞首台に立っても構はない。と言つてのけた。

私はローブを脱ぎ、白装束になってから、彼の目に向かって、ひと

つ肯いた。

サシュワルは一週間後彼の部屋に来いと言った。  
そこで同志たちに紹介すると言うことだそうだ。

同志！なんといい響きだろう。

かつてのレエニンやヒットラアもこんな心持だったのだろうかと思  
った。

何はともあれ、約束の日は明日である。

取り敢えず、この話はアルには話さなかった。  
アンにはどうするか迷っている。

彼女も立派な革命家となれるだろう。

しかし、巻き込んでよいものか。

彼らのことなど関知せずと言ったが、どうにもアンにはあまり危険  
な目にはあわせたくない。

頭をひねっていたら、一人のもじやもじや髭が運び込まれてきた。

アルと共に、一体どうしたのかと問う。

見ればもじやもじや髭は所々ススの様なのが付いていて、所々焦げ  
ていたり、やけどをしているところから、なにやら爆発に巻き込ま  
れたと見える。

坑道の粉塵爆発か、と思った。  
たまに鍛冶区で粉塵爆発がおこる。

理由は坑道で粉塵爆発に対する対策を打ち出していないことにあつた。

わたしはそのままめ役のような男に、坑道の高さ、幅をもっと広くして、塵がたまらないようにすると良いと言ったら坑道が広くなり幾分か解消されたようで、最近は余り起こっていない。

ふと、火薬の香りがした。

なにやら硫黄のようなにおいまでしている。

治療を施した後、暫く眠っている様子だったので、ちよいと気になつて彼の上着をみると羊皮紙がポケットに入っていたので失礼かと思つたが見てみた。

どうやら設計図のようなもので、クロスボウの図面だった。だが、何か足りないなと見ていたら、あぶみ 鐙が無い。

鐙がなければクロスボウなどとも弦はひけぬ。所々に走り書きで弦の引く際の云々と書かれていたので、鐙の図面を書き足して、その走り書きの下に

「鐙にある矢踏みを踏んで」と書き足しておいた。

他にも図面があり、中世の攻城用兵器の「トレビシエツト」（いうところのカタパルト）に似ている図面もあったが、所々おしい所が欠けているので、怒られるかもしれないが、書き足して完全な形にしておいた。

そんなことをしていたら、もじやもじや髭のお爺さんが目を覚ました。

硫黄の匂いやすす、爆発に巻き込まれた痕跡等から、もしやと思い、君は黒色火薬を作っていたのか、と問うと、黒色火薬とはなんぞや

と帰ってきたので、磨り潰した木炭と硫黄が云々と言ったら、

「そうだ！其れを作ってたんだ！しかし黒色火薬とはいいい名前だな。貰った！こいつの名前は黒色火薬にしよう！」

と言った所でアルが、こいつは奇人を通ってる爺さんだと言ったのでどの辺が奇人かと聞いたたら、よく分からないものを作っては怪我しているからだそうで、よく運ばれて来るそうだ。

私は、これは面白いなと思って、「お爺ちゃん、お名前は？」と言つてやったら「わしは「レシン」だ」と言つた。

レシンとはまた聞き覚えのある響きであるなと思つていたら、

「それにしても黒色火薬の生成法を知っているとは、わしでさえ今日作つたばかりなのに、君は唯の医者ではないな！」

と言つたところで、私は自らの名前を述べると、あゝなるほど！君が奇人のヒットレルか！女の子だとは思わなかったよ！との事で、「君は随分と科学に嗜みがあるようだな！今度お茶をしないかね！」等といつていたので、機会があれば、と言つておいた。

それにしても奇人のヒットレルとは……己も奇人と呼ばれているのを知つての発言か。

彼は何処担当の労働者だろうか。こんな真昼間に火薬作つて爆発してるのが許されるのか。

ともかく面白いお爺さんを見つけたものだ。機会があれば、等ではなく、今度こちらから出向こう。

等と思つて、何処に住んでいるか、と聞こうとしたら、鎮痛剤と火

傷用の軟膏を貰うなりさつさと帰ってしまった。

あれだけ面白い人なら、その辺の人に聞けば分かるだろうと思ひ、よしとした。

昼過に軽い食事——小さい蒸芋一つだが——を食っていたら、アルに「一つ落ち着いたところだし、休憩していても良いよ」

と言われたので、アルはどうするのかと問うたら、サウサンの失敗に学んで、道具を鉛の含まれない物に換える為に鍛冶区へ道具の作成を願うに行くとの事だ。

ついでに他の区の医者にもこの件に関して連絡しに行くとの事だったので、有難うとだけ言っておいてアンを探しに行った。

何処にいるのかと思つて居住区を小川の音をBGMに歩いていたら例の鍛冶区のまとめ役のような男（ようなとは彼が自ら言った）に出くわして、あれから爆発は起こらなくなった有難うと言われた。「何かあれば何でも言ってくれ。「ハッダード」の名前を出せば協力するように言つてある」

との事だったので、では今度製鉄と溶接をお願いするかもしれないと言つた所で彼から、取り敢えず例の注文の品だけ渡しておくよ、と言われて布に巻かれた長い棒状のものを受け取つた。何に使うかは今度でいいから教えて呉よなどの事だつた。

棒を持つて農業区に行くと言ふ子を背負つたゼア二と出会つたので、ダスモ二の栽培の様子とアルの居場所を知っているかと問うた。

どうやら彼岸花の花畑にいるとの事だ。

布で巻き巻きた棒を背負つて花畑に行くと、アンの人影はなかった。

しかしその代わり鍛冶区の一事件で見た金髪少年がいた。相も変わらずタイツに半ズボンである。

地面を見ると少しばかりぬかるんでいるので、ここを通ったものの足跡が分かる。

アンの履いていたブーツの足跡は途中で消え、その代わりもつと大きなおそらく男の足跡が見える。その上に、比較的新しい足跡——おそらく向うに見える金髪少年のだろう——があった。

金髪少年の他には誰もいないようなので、大丈夫かとおもいつつも袖の中に手を入れ、南部のグリップを握っておく。

姿を見せたら驚いた様子であったが、私の姿を見るなり安心した様子である。

彼は魔術師で「殿下」のようだが、鍛冶区での一件から私が反体制派であることは知っているはずだが。

先に金髪少年が口を開いた。

「どうやら僕の失策だったようだ」

どういうことだ？と聞いたら、あれこれこういう理由で何某がアンをさらっていったと聞かされた。

これは一大事だ。

どうやら金髪少年はアンに会いに来たところ、そのさらって行く奴を見つけたらしい。

その人さらいは見た顔なので、大体の理由を考えてみたらしい。聞くに、その考え通りの理由だろう。

先週あれだけやったのだ。金髪少年の罠の可能性もある。

しかしどうやらこの少年、アンを好いている様子。アンは魔術師嫌いであるので――私の教えている階級やら余剰価値やらも相まって相当なものになっている――叶わぬ恋というところだろう。

しかし其れが演技でなければ、信用に足るだろう。

それにこの少年がアンを度々訪れていたことはアンから聞いている。嘘であるとも断言できないであろう。

なにはともあれアンが居ないのは事実であり、今の所の居場所の手がかりは少ないのだ。行くしかあるまい。

そういえば何故、アンを好いているなら自ら助けに行かないのか、アンの好感を得られるかも知れんぞ、と話してみたら、顔を赤くして何やら言っていた。

しかし、直ぐにまじめな顔に戻り、

「僕が行けば、奴は何をしでかすか分からない。狂乱して逆に僕を殺そうとするかもしれない。ああいう輩は追い詰められると想像に付かないことをやるからな」

と語った。

随分とませた、もとい冷静に分析をしている少年だ。と思っていたら、

「実は今は帯剣していないし、杖の代わりになる物も持ち合わせていない。そういうものを持っているとアンが会ってくれないと思っ  
てね」

と言った。

なるほど、魔術師は剣や杖、まあ他にもあるかも知れないが、そういう類の物が無いと魔法が使えないのか。

しかしそんな事を私に話してよいのか。

此れを聞いたなら私が殺そうとするかも知れないとは思わないのか。  
だがブラフの可能性もある。

どちらにしても実際にはまだ殺さないが。

今ここで殺せば革命が成立するわけではない。

革命を起こすには、まだ準備が足らぬ。

第一、彼をここで殺したら間違いなく、殺したとばれるだろうし、  
そもそもばれた方が革命に有利に働く等と思うのはまだ早い。

彼を殺したところで貴族重商主義、奴隷経済主義、ブルジョワが斃  
れるわけではない。

ながい闘争が待っているだろう。

しかし其れに勝利し、ブルジョアジーを打倒するにはまだまだ準備  
が足りなさ過ぎる。

きっかけ作りだけなら殺しても良いだろう。

実際私は前世で、きっかけの為に首相を斬ったのだから。

だが、今回はきっかけではなく、最後までやるつもりだ。

だから、まだ早い。

それを知ってか知らずか、わからないが、彼は私が己を殺さないと  
確信しているのか。

とにかくアンの身が心配であるので将来の敵に有難うと言ってその  
場を去ろうとした。

しかし、彼は一緒についていくと言い出した。

まあよいかと思い、構はないと言っておいた。

足跡を辿って幾らか進んだところで、一寸待てと言って彼を止める。足跡を触ってみると、結構新しいようだ。

これは近いなと思いふと周りを見ると、中々に木が茂っている。

しかし前方を見ると何やらほんの少し開けた場所があり、あの場所なら動き回ることに支障はないだろうなと思った。

辺りも夕暮れが近づいているのか、木々の葉が朱みがかってきている。

森の中の動物の声も騒がしかったのが、少し静まりだした。

目の前に木の葉が落ちてきた。

落ちる木の葉に滴る水が夕日の所為か、朱く私の顔を映していた。

斬り合ひをするにはもってこいのシチエーションだと思った。



## 第七話 ゆうひ

(改稿) (後書き)

ようやく剣戟の直前へ。

最初は、手術やら鉤山の粉塵爆発を解決する話を書こうと思っていたのですが、いらんだろ、と思い省略しました。

前回(6話)がちよいと急すぎるので、そのうち、5話やら6話を書くかもしれません。

アンとのお話を追加

## 第八話 あかいろ

わたしは目を覚ました。

視界がぼやけていたものから確かに輪郭を把握するものへと変わる。

わたしはアランカザンダツカの花畑にきていた。

そこでヒツトレルさんが「宿題」だと言って、考えておくようにと言ったことを羊皮紙とペンを手に考えていた。

どという宿題か、それは

「この世界は資本が利益を生む。

利益とはつまり剰余価値、労働力から生み出される付加価値であり、奴隷経済主義はこの剰余価値をより多く得ることも目的としている。

奴隷が魔術師―つまり資本家に売っているのは労働力だ。

例えば労働者は一日、此処の鍛冶区で言えば一日の給金は20オウラと教えてくれたね。

だから例として、労働者の一日の労賃を20Gとしよう。

そこで例として、一日20G貰って商品2個を作れば、その商品1個作るのに必要な労働力、つまり必要労働力の価値は10Gというわけだ。

そして商品を作る道具、例えば熔鉱炉やハンマーの維持費が必要だ。

この街では必要な道具や原料を一括して一つの街で補っているので、本当は160Gとするとところだが、少なく見積もって40Gとおこう。

なぜなら、他所から仕入れる必要が無いからね。

でその道具は使えば当然痛んでくるので、使用が出来る回数を4回だしよう。

4回使えると考えれば商品一個生産するのに40Gかかるのはわかるね

そして商品1個辺りの原材料費も必要だ。

先ほどと同じ理由で、一個当たり40Gかかるとしよう。

商品1個を例えば2時間で作る場合のコストを考えてみよう。

一日の労賃 20G

原料 40G

商品を作る道具の維持費40G

とすれば商品一個の交換価値は100Gと言うわけだ。

商品をつくるコストに100Gかったのなら、此れを売っても利益はでない。

ではどうすれば利益を出せるか考えてみてね。

私はアルと仕事があるから、落ち着いたら答えを言うよ。それまでちよいと考えておいてね。所謂、宿題だね。

ヒントは、  
労働者の「一日の給金は20G」  
であるということと、

貨幣がG  
商品がWだとして

$G - W = G$   
 $G = G + ?G$

?G = 剰余価値

とだけ教えておこう。

「

と、言うことだった。

わたしはうんうん頭を捻っていたら、何やら人が近づいてきた。

ヒットレルさんかと思って見て見たら、ローブを着てはいたが、どうやら魔術師のようだ。

何故ここにいるんだ！

私は気絶させられ、現在に至る。

周りを見れば森の中だった。

しかし、ちょっとした空間があり、私はその大木のそばに倒れて

いた。

空を見ればもう夕暮れである。

体を起こして前方を望むと、例の魔術師がいた。

「何故わたしを此処に連れ去ったんですか。」

「奴隷に教える義理は無い。大人しくしていれば良いのだ。」

「あなたがわたしの自由を束縛する権利の説明をしてください。」

「わからんやつだな。我々は魔術師であり魔法は唯一神によって与えられた偉大なる力！そしてお前らの様な奴隷の雇い主だ。我々は金をやっている以上、お前らを好きにする権利があるのだ。」

「何という退廃的な宗教的、貴族主義、商業主義的な思想か！あたたちの地位と生活は凡てわたしたちから搾取することによって成り立っています！

無産の労働者階級を虐げる貴族主義者はいずれ労働者の鎚と鎌によって打倒されるでしょう！」

「貴様！貴様も愚弄するか！そうかあの黒髪のせい！あの黒髪が全ての元凶か！奴隷はだまって我々の言うことをきいていればいいのだ！

我々を打ち倒す？どうやって倒すのだ？何の力も持たないお前に何が出来よう！」

「あなた達はみんなそうですね。論では勝てないと見込んですぐに力を使用することに走るとは……、ヒットレルさんの言うとおり、

あなたたちは自己の正当性も説明できないほどに墮落している。崩壊しているのです。

すなわち、あなたの言う体制はもはや瀕死、金と権力に媚びる哀れな魔術師は駆逐される運命です。」

「はは、説明できないだとか？それは違う。力が証明するのだ。

力なくして正義は語れず。力なくして何も得られず。力なくして何も護れず。

その力とは魔法。

魔法こそ神によって統治者たる我々に与えられた、我々を統治者たる者であるという証明だ。」

「貴族主義の豚が！」

「言いたいことはそれだけか、私はお前を好きに出来る。この状況を分かって発言していたのか？

お前に自分を護る力はあるのか。

わたしは今ここでお前を犯すことも殺すことも出来るのだぞ。」

「……犯したければ犯せばよいでしょう！殺したければ殺せばよいでしょう！

しかし、わたしは屈しません。この性根の腐った貴族主義者の豚野郎！」

「口先だけでは何も得られぬ。何も護れんことを身をもって知れ。そして自らの立場を再確認するんだな！」

魔術師の男はわたしの服を引き裂く。

わたしの両手を拘束し大木の根元へ押し倒す。

わたしは赤い花を散らした。

草木を握り締め、この屈辱に耐える。

やはり魔術師にわたし達が勝つことは出来ないのか。

男は乱れた服を整え、一点を見つめている。

わたしは虚ろな目で男の視線の先を見た。

何故、ヒットレルさんがいるのか。

ヒットレルさんがわたしを探しに着たのか。

しかし、だめだ、魔術師には勝てない。

やめて！逃げてください！そう叫ぶ。

金髪殿下には隠れてもらって、私はその開けた木々の間に出た。

私は魔術師の男を睨む。

なるほど、確かにあの時の魔法剣つかいか。

視線の端には服も乱れたアンの姿が見える。

男は何やらあの件のせいで自分がどんな目に云々と言っている。

決まって言うのは私の所為で云々ということ。

して、自らの立場を分からせるためにアンに卑劣なことをしたとか。

男は言う

「お前を待っていた。

お前の所為でわたしは出世の道を絶たれた。

わたしはお前を生かしておけぬ。

お前を殺す、殺さねば気がすまぬ！」

——何という外道。

——何という鬼畜。

私と死合いたいのなら堂々と来れば良いものを。

何故アンを巻き込んだのだ！

アンに対してよくも！

金と権力に酔いしれた底辺が！

私は汗で濡れた両の手をローブの裾で拭いた。

ローブの中からアルコールの入った小瓶を袖に入れた。

そしてローブを脱ぎ捨て、白装束の姿になった。

布で巻いた棒を握る。

その時、アンが逃げろと言った。

其れを合図に、男は抜刀し間合いを詰めてきた。

私と男の距離は5歩ほどまで縮まる。

私は棒を構える。

棒の丁度端の方を柄頭と見立て構える、もう一方の端は男の方を指す。

男の得物はショートソード

両刃、刃渡り60cmほど。

対して此方の得物は布で覆った棒。

剣道の竹刀袋を思わせる。

袋の中は硬く、鉄製。

全長100cmほど。

男は剣を右手に持ち、左手が前に来るように体を斜めにした。

対して私は中段構え、刀を右上にずらし正眼にとった。

右足を前に出し、左足を折り踵を少し浮かせる。かかと

足を小刻みに擦り動かし、間合いを計る。

相手は片手で下段に構え、尚且つ剣を後ろ、左手を前にとっている。

相手との距離——五歩

剣道ならば、此れは有効射程。踏み込めば届く。

しかし今の得物は竹刀と違い、重い。

2、3キ口はあるかもしれない。

そして、相手は魔法という未知の技を使う。

前回鍛冶区で相対したが、ほんの一部しか見れていない。

はたして彼の使う魔法とは如何な攻撃なのか。

だから、まだ打ち込めない。

今の得物の重さ、未知なる攻撃。

——まだ動けん。

しかし、負ける気は、しない。

男の剣は、欲の剣。

大儀も旗もなく。ただの私利私欲の為。憂さ晴らしの為の剣。

そのような剣が勝つことなど、無い。

対して私の剣は、義の為。

大切な者の為の、想いの為の剣。

復讐の為の剣。

アンへ辱めを受けさせた者への天誅を与えん為の剣。

——ならば、なぜこの剣が相手に劣ろうか。

彼奴目を殺してやる。

名誉や義理の為ではなく、自らの欲の為に殺す。

わかっている。だが、魔術師たる誇りなど、今は関係がない。

あの黒髪の女、

相手はわたしよりも随分と小柄だ。

単純に力勝負ならばわたしが勝つことは明々白々。

そしてあの女は魔法を使えない。

勝機は——充分だ。

見ると女がローブを脱いだ。

すると真っ白な、見たことの無い形の服を着ている。

一寸、黒い髪と相まって、美しく思ってしまった。

いかん。何を今から殺さんとする奴に向かって思っているのだ。

ふと、女は持っていた布を巻いた（布袋をかぶせた？）棒を構えた。

なるほど、あくまで戦おうというのか。

並みの奴隷なら、魔法剣士と相対して勝てるはずが無いと逃げ出す

か、諦めるか、無謀にも諦めの表情を浮かべながら突貫してくるか。

しかし、目の前の女は真っ直ぐと此方を見ている。

全く負けるとは思っていないのか。

見た事の無い構えをした。

何を考えている？

しかし、まだ彼女の剣は射程外だろう。

もちろん、此方の剣も射程外だ。

しかし、わたしに在って相手にないもの、それは魔法だ。

ふと相手の足が小刻みに動いているのが見えた。

なんだ、震えているじゃないか。

やはり、女の今の心は恐怖に襲われているのだろう。

それもそうだ。

魔法剣士に奴隷が勝てるわけが無いのだから。

そして、己が敗北したとき、待っているのは、わたしの後ろで小さくなっている小娘と同じ末路。

女にとっての辱めだ。

その小娘と違つのは、その後自らの骸が原っぱに捨てられるということだ。

これは確実に勝てるな。

わたしは自らの剣に炎をまとわせた。

そして火の玉を左手に作り出し、女へ向かつて突進した。

相手が動いた。此方に駆けてくる。

相手の剣は炎につつまれ、左手には火の玉が在る。

私は左手で右袖の中の小瓶をつかんだ。

相手との距離――4歩

男が自らの周りに火の玉を三つほど浮かべた。

そして、二つは左手の火の玉に吸収され、左手の火の玉は大きくなつた。

男は左手を振り上げた。

同時に、私は小瓶を相手に向かって投擲する。

男は左手を振り下ろしたと同時に、火の玉を「射出」した。

私は口を小さくあけ、腹の中の酸素を一瞬にして吐き出すように息をはいて、跳躍した。

なんだ？あの女は何やら小瓶を投げた。

ちょございな、こんな事で集中は切れんは！

射出した火の玉が小瓶を包む。

同時に、小瓶が破裂したかと思うと、炎が液体のように辺りに飛び散った。

——なんだ！どういうことだ。

魔法が無効化されたのか？

いやいやいや、落ち着け。

過去にそんな例はない。

聞いたことも無い。

飛び散った炎が自らの周りに展開していた火の玉にあたる。

すると、炎が落ちるかのように、わたしの足元へかかる。

クソ、何てことだ。自らの魔法で火傷をするとは！

いかん、相手をみていなかった。

相手は……何処だ？

何故だ！何故こんなに早くわたしの目の前に居るのか！

まだ射程外のはずだ！

わたしが炎に意識を捉われたのは、ほんの一瞬。

一瞬のうちに何故この距離に？！

駆けても後2歩はないと射程ではないはずだ！

相手の男は、投げた小瓶のアルコールに引火した炎に驚いて、一寸、視線をずらした。

——勝機。

わたしは、左足で跳躍した。  
右足は前へ、棒を同時に振り上げる。

男が此方を向くと、驚嘆の目を向ける。

男の剣はいまだ、だらんと垂れたまま。

もはや右手に持ったショートソードでは防げまい。

腰が引つ張られるような感覚を覚えつゝ相手の方へ飛ぶ。

棒を持つ両手を振り下ろす。

右足で着地。ブーツが土を削る。同時に棒が男の頭部へ直撃する。

――面。

左足が右足に引つ張られて地に足をつけ、  
打ち込んだ棒を頭の弾性を以って反動で上に上げる。

男がのけぞりつゝ、間合いを遠のく。

男に合わせ、一足一刀の距離をとる。

息を吸う。

息を吐く。

息を吸う。

男は額から流れる血も拭かず、剣を地面とは水平に中段の高さで切つ先が男から見て左側になるように構えた。

私は中段構え、正眼で構えなおす。

男は打ち込んできた。

剣を天に向け、しかし剣道の様な速さはなく、ただ駆けて打ち込んできた。

わたしは、跳躍すると共に、振り下ろしてくる剣を棒の先で下から掬い上げていなし、楕円を描くような軌道で棒先を一回転させた。同時に右足で大地を踏む。

——小手。

棒で叩かれた右腕は、恐らく骨が折れたか、亀裂が入ったのだろう。男の剣が下に向く。

そのまゝ、打ち込んだ棒を上へ上げ、引っ張られた左足が地面に着地したと同時に直ぐ右足を踏み込む。同時に、腹から息を一気に吐き出す。上へ上げた棒を振り下ろす。

——面。

この面は男に打撃を与えなかった。振り上げた高さが低く、打撃力は少ない。

しかし、この面は本命ではない。

男は顔面を護ろうと、反射的に自らの剣を頭へ持っていった。

剣道ならば、この後は胸が望ましい。

私も其れを予定していた。

しかし、相手の喉元が開く。

好機。

スツと息を吸い、  
面を打った棒を地面と水平に構えなおし、  
ハツと息を吐いてすぐさま、また右足を踏み込む。

水平にとった棒を腹に引き寄せ、右足が前へ出た瞬間に、腕を前へ  
押し出す。

棒が相手の喉元へ食い込む。

――突き。

男は吹っ飛んで、剣を落とし、アンの横の大木に叩きつけられた。

アンは暫し呆然としていた。

大丈夫か？と声をかけようと近づいたら抱きついてきた。  
傍らにあったロープをかけてやる。

目には涙を浮かべている。  
私の胸を濡らす。

唯、彼女を抱いて、頭を撫でてやった。

暫くしたら、思い立ったように私の顔を見上げて、

「答えがわかりました」

と言った。

何のことだと思い、問おうとしたら、

「労働者は一日20G貰います

それは、「一日」

というだけで生産すべき数は指定されていません。

だから、2時間で商品が一個作れるのならば、

一日8時間労働させれば商品が4個生産できます。

よって

商品4個を8時間で作る場合のコスト

一日の労賃 20G

原料 160G

商品を作る道具の維持費 160G

＝商品4個の交換価値は340G

商品1個の交換価値は100Gなので商品4個で400Gの交換価値になります。

しかし、労働者に一日4個作らせたことにより、400Gの交換価値が340Gになり、60G余ります。

資本家は等価交換の原則をまもりつつも、60Gの利益を得ています。

これが余剰価値。

労働者が搾取されているというのは、このことですよね。

「

「そうだ。よくわかったね。」

私はまたアンの頭を撫でてやる。

しばらく私に身を預けていたが、不意に立ち上がったので、私も釣られて立ち上がる。

「先生」

とアンは言った。

アンは私の瞳を見据えて、  
真剣なまなざしで、  
確かに力強い目で、

私にこう言った。

「先生。わたしに凡てを教えてください。経済もそうです。礼、儀、算術、医学、薬学、建築、戦術、外交、剣術、……凡てです。先生の知っている事を凡て教えてください。」

私はアンの瞳を、唯見つめていた。

少し間をおいて、アンは続けて言った。

「戦う術を教えてください。  
この世界を変える術を、  
力なき者が打ち勝つ術を、  
労働者を護る術を、  
家族を護る術を、  
搾取されている者を解放する術を、  
魔術師を斃す術を、  
貴族主義者を倒す術を、

闘争を戦い抜き、打ち勝つ力を、戦う術を教えてください。

「

私は、彼女の目を見つめたまゝ、「わかった。」とだけ返した。

そして、これをやろう、と言って血のついた布に包んでいた棒を取り出した。

棒を布切れから取り出す。

やまとがたな  
日本刀が姿を見せた。

鞘はまだ仮でハッダードがその辺の木で作った物に過ぎない。柄もまた然り。  
見ると先ほどの打撃で少しへこんでいたり、傷がついている所がある。

アンにそれを渡した。

アンが刀を引き抜くと、刀身が赤い光を反射させる。

これはハッダートに口頭で日本刀の作り方を説明して、試しに作って呉れとお願いしたものだ。

故に、純粹に日本刀とは呼べない。

日本刀風の刀というところか。

試しに作ってもらっただけであるので、これから改良を重ね日本刀に近づけようと思っている。

だが、見た目は良い刀だ。

決してナマクラでは無いだろう。

アンと共に大木のそばで動けなくなっている男の元へ近づく。

「アン、彼を君の好きなようにするといい。」

そういつて、私は男の体を起こし、首を前に出させた。

「はい、先生。」

アンは刀を高く振り上げた。

夕焼けに赤く染まるゝ日本刀幾とせ耐へし我が弟子赤き

音も鳴らせず、刀を振り下ろした。

——見事。

男の首と胴体は別れを告げた。

血ぶるいをしていない刀からは赤い血が滴る。

切先から血が滴り落ちて、地に生えていた草を赤く染める。

夕日の所為か血の所為か、赤い刀を持ったまゝ、アンは私の方へ振り返る。

「ヒットレルさん。先生って呼んでもいいですか？」



## 第八話 あかいろ（後書き）

先生と呼び始めたところです。  
書きたくてしよがなかった剣戟シーン。

## 第九話 てつ

空を見れば宵の口。

多少日の落ちてきたうつすらと紫がかった空に木刀を持つ娘の姿が一つ見える。私を入れると小さな小娘二人だが。

三つ編みの髪を揺らし、彼女は木刀を握る。

その構えはまるでバットを握っているかのよう。

八双の構えと呼ばば聞こえは良いが彼女の其れはまさしく今にもホームランを撃ち出さんかのごとく。

呼吸も大きい。

肩が揺れ、息を吸うのと息を吐くのが見て取れる。

対して私は正眼にとっている。

微動だにせず、剣先に蝶々がとまっても此処が木刀の上かと気づくかどうか。

まあしかし、昨日の今日始めたにしては良くやっていると思った。

昨日の夕暮れのあの後、あはれにも首と胴体が泣き別れた男の処理もアンと一緒に帰路に着く際に、隠れていた金髪殿下に視線を送って処理を任せて帰った。

金髪殿下は結局アンに姿を晒さなかった。

あの状況で意気揚々と出でて来られるのも困るが。

アンはローブを拭き裂かれていたので、帰る前に適当なローブを買ってやりアンに着せてやった。

帰った後、いつものようにアルの部屋でアルとアンと私の三人で晩飯を食ったがアンが「先ほどの一件は秘密にしてください」と言うのでアルには話していない。

アンが私の事を「先生」と呼ぶのでアルは不思議に思っただけ何故先生と呼んでいるのかと聞いたが、アンは先生だから先生なんですとしか言わなかった。

私にも聞いてきたが唯、笑顔を返してやったのみである。

その日の夜、いつものようにアン部屋の教授をした後、ではおやすみと別れようと思ったら、アンと一緒に寝てくださいと言うので一緒に寝た。

女の子と枕を並べるのは初めてであったので少々恥ずかしかったが、アンがにこにこしていたので頭を撫でてやりながらすごした。

寝る前に、実は明日に革命を目論む同志の集まりがあるらしく私に招待が来ているんだがアンも一緒に来るか？と問うたら二つ返事で「行きます」と言う事だったので、アンも連れて行ってやることにした。

朝、目覚めたらアンが私の腕に引っ付いて中々離れず困ったもんだと思っていたらアルが起こしに来て、私とアンが何故一緒に寝ているのかとか何とか言っただけ羨ましそうにしていた。

朝食を食っていたらそういえばサシュワルから手紙があると言ってアルが丸めた羊皮紙を渡してきたので、朝食の後読んだら

「夜に俺の部屋で」

と書いてあったので、おそらく今日の集まりのことだろうと思い、アンにも伝えて私は昼過ぎくらいまでいつもどおりアルの助手として過ごした。

昼過ぎになって、仕事も落ち着いたところでアンが、剣術を教えて欲しいとのことだったのでその辺の木を削って木刀を二本、私の物とアンの物とを作ってやった。

昨日、えせ日本刀をアンにあげた所であつたのでこの機会にまともに使えるように教えてやつても良いかもなと思つたので、まずは基礎からと簡単に足捌きやら柄の握り方、西洋剣術（この世界の剣術のことだが、便宜上そう呼ぶ）との違いやらを教えた。

暫くすると、実際に打ち合ってみたいと言うので、まだ危ないからよせと言つたのだが、どうしても昨日の私の動きが見たいからと言うので、まあこの機会に彼女の力量を見るのも良いだろうと思つて居住区の宿舎の裏に移動して現在に至る。

始めてから3分ほど経つたろうか。

いまだにどちらも動かず、はたからみれば何をやっているのかと言われるだろう。

彼女の手も震えてきている。

ちよいと可哀想だなと思つて私は一步踏み出すと共に右脇に構えた。すると彼女は跳躍して切り込んできた。

その速度は中々のものだが、いかんせん呼吸が分かりやすい。

剣道においても剣術においても相手の呼吸を知ることが重要である。息を吸っている間は急速な動きは出来ない。

対して息を吐いている間は咄嗟の動きも可能である。

神速を以って打ち込みたい場合は腹の中の息を瞬時に一気に出すような感覚で吐く。

熟練してくると相手に悟られずに打ち込めるのだが、アンはまだまだのようだ。

跳躍する前に、大きく息を吸った。

これを見て私は右後ろに下がる。

彼女の剣はいわば怒りの剣。

力任せに斬り込んでいる。

気持ちは分かる。

だが、焦ってはだめだ。

敵と相対した際に必要なのは、礼と志と義

憎しみだけで振ろう剣に何が斬れようか。

ひととき

一時だけならばその剣は強い。

しかし、それは己の為に振るう剣。

大儀や旗の為に振るう剣に出会えばたちまち、折れる。

もっと実践的な事を言うと、平常心を保てなければ負ける。  
相手の呼吸、

目線、

足、腕の震え、

それらを落ち着いて見渡せる、余裕がなければ負けるのだ。

昨日の魔法剣士に勝ったゆえんも此処にある。

彼は魔法がアルコールに引火したことに驚嘆し、一寸平常心を失った。

私はそこに飛び込んだだけである。

もっとも、彼が日本剣術の特徴である「跳躍」を知らなかったと言うことも関係してはいるが。

ハッと吐く息にあわせてアンは大きく跳んで、袈裟懸けに打ち込んだが、虚しくもその木刀は空を斬り、大地を削る。

アンの腕を見る。

——刀の持ち方がなっていない。

右腕と左腕の間隔——手幅が拳半分位の距離を以っているのは良い。しかし彼女は柄をハンマーグリップで握っている。

また、腕の角度が良くない。

彼女は柄を左右から引っつかんだような格好で握っている。

右手も力みすぎである。

右手は添えるだけ、位の感覚でかまわない。

これでは斬るのは無理だ。

飯に斬ったとしても、刀身と標的とが垂直にならないので、刃筋が狂い刀が曲がるだろう。

最初はきちんと教えたとおりに持っていたのだが、疲れから握りが甘くなったのだろう。

また上半身と下半身の呼吸も合っていない。

故に、次の行動が読み取れる。

左足を前に押し出さんとしている。

手首を返えし切り上げようとしているのだろう。

——左足を前に押し出し、燕返しの大要領で打ち込む。

アンは腕の力を主にして振っている。

だが木刀、竹刀、日本刀然り、薙刀しかり、日本における武器はどれも腕の力で振るうのではない。

足、腰で斬るといっても良いかもしれない。

例えば腰の動きに連動して胴が動き、それに連動して腕が動くと言ったような。

私は此れに応じ、右足で地を蹴り、左足を前へ押し出すと共に、脇に構えた木刀を半円を描くように打つ。

所謂、逆風で斬る。

予想通り、彼女はえせ燕返しで切り込んだ。

だが、遅い。

私はアンに股に当たる直前に右手に力を入れて、剣を止めた。

剣の速度を緩めるには右手にちよいと力を入れれば大丈夫である。

、がこのまま残身をしていてはアンに切り上げてくる木刀に右太も

もが直撃するので、体重を左足から右足へ移し、体を起こすと同時にアンの木刀に自らの木刀を、ひよいっとぶつけてやり剣を止める。互いに数歩下がり、木刀を血づるい。左手に収める。礼。

例えどのような相手であっても、礼を怠ってはいけない。そう教えている。

「参りました。」

アンがどつと疲れた様子で言う。  
見ると汗のせいか髪が頬にくっついていてる。

私は水とタオルを渡してやり、打ち合っていたときに思った事などを述べた。

「初めてにしてはうまくいったと思うよ。特に打ちが強くて良いね。いきなり小手先の技を使うよりも、思い切って斬り込んだのは良い。技に憂いが無い。まあまだ技とは言えるような物ではないけども。」

「先生は、凄いです。」

そんなことはないかと返す。

先生は凄い。

このことを言うと拗ねられるかも知れないが、背が低くて私と同じ年くらいに見える。  
実際には年上だが。

ともかく、兄よりは年下ではあろう。

だが、どこか落ち着いていて、女の子では無いような気さえする。  
もちろん体は女だ。昨日の夜一緒に寝たからわかる。

しかし、なんだろうか。口調のせいもあるかもしれないが。

頭を撫でてくれた時に、母親のそれとは違う、言うならばお父さんの様な……

違うか。ともかく抱きしめてもらったり頭を撫でてもらったりした時に不思議な感覚を覚える。

それに何故か凄い知識を持っている。

わたしはこの世界の仕組みを教わった。

私たちが貧しいわけ、魔術師達が汗を流さなくてすむわけ。それらを可能にしている機構を教えてもらった。

そしてそれらを変える方法も話してくれた。

算術も政治も教えてくれた。

それだけでなく、知識だけを持っていてそれをひけらかすような事もしない。

知性もある。

女なら男と付き合うときはかくあるべし等と言つことも教えてもらった。

最初はそれだけだと思っていた。

しかし、昨日の夕方。

——あの魔術士を斃したのだ

魔術師は貴族主義者だ。

資本家だ。

圧制者だ。

わたしはあの時自分の無力を嘆いた。

あの憎き魔術師に心の声で言っただった。

「群集が毒の杯を置いた。

飲め、呪われしものよ！

これがおまえの運命だ！

お前の真実や天の声など

わたし達にはいらぬ！」

——そこに先生が現れたのだ。

勝てないと思った。

先生も又、わたしの様に辱めを受けて殺されるのではないかと。

しかし勝った。

小瓶を投げて魔法を負かし、

見た事の無い剣術で。

魔法のことを考えずに単純に考えても、先生のほうが魔術師の男よりも断然小さかった。  
なのに勝った。

小さい者が大きな者に勝ったのだ。

今日の昼過ぎ、先生が兄さんの手伝いも一段落ついたということで、あの剣術を教えてもらおうと頼んだ。

先生はわかったと言って、何やら木の棒を探しに行った。  
暫くすると拾ってきた木を削って、何やら作り出した。

渡されたのは両手で握る木剣だった。

形が昨日頂いた日本刀やまとがたなに似ている。

先生曰く「木刀」と言うそうだ。

なるほど、木でできた「刀」だから木刀か。良いネエミングだと思った。

剣術を先生に教えてもらったが、私が以前徴兵されて戦争に行った事があるおじさんから聞いたような剣術とは大分違う。

足裁きという、足の動かし方も特殊だ。

まずは基礎を、と教えてもらっていたが実際にあの剣を見てみたくなった。

先生と打ち合ってみたくなった。

実際に魔術師を斃した剣と戦ってみたくなった。

最初はやめておけと言っていたが、わたしがどうしてもお願いしたらわかったと言ってくれた。

先生とわたしで打ち合おうと言うことになった。

結果は見事、先生に斬られた。

その後もつとこうした方がよい、とかここは良かったなどと指導してもらった。

わたしはもつと学ばなくては。

この剣術もそうだが、皆をまとめて社会を変える術も学ばなくては。

ともかく、夕食の後に何やら社会を変える為に活動している組織の人達と会っらしい。

わたしも連れて行ってくれるそうだ。

それにしてもこの街でそんな組織があるなんて始めて聞いた。

一体今まで誰が何処で何をしてきたのだろう。

晩飯も食い終わった後、アンと例の集会に出かけた。

アルは晩飯の後は何やら本を書いているようなので、アンと一寸出かけて来るといつて出てきた。

何処へ行くのかと問はれたので「なに、農業区へ花と月を見に行くだけさ」と言っておいた。

アルはそいなら一緒に行こうなど行っていたが、アンが「先生と二人きりがいいんです。」とか言ったら不満そうな顔をしていたが、やることがあるらしく部屋にもどっていった。

だが上目遣いで、ごめんなさい、と言ってやったら機嫌が良くなつたようだ。

サシユワルの部屋へ向かうまでの道中、アンにあげた刀の名前をつけてやるうと言つ話になつた。

ちなみに私もアンも昨日の一件のこともあり、帯刀している。

私は九十四式軍刀を、アンはえせ日本刀を帯刀している。

とは言つても、ロープの下服に吊るして、上からロープを着ているので傍目からはわからないだろう。

帯刀の仕方も唯帯びに指すというわけではなく、帝国陸軍の帯刀の仕方を参考に、地面と垂直になるように帯刀しているのでなおさらである。

いつまでも「えせ日本刀」では可哀想だろうと言つことで、歩きながら二人で考えた結果、「共生花<sup>きょうせい</sup>」とか言つ案が出たが、結局「外<sup>がい</sup>刀<sup>とう</sup>」というのにした。

単純でよい名前である。

アンも喜んでいたし、よろしい。

サシユワルの部屋のある棟に入り、二人分の床の軋む音とブーツの音とを聞きながら、部屋のドアの前に来た。

ノックをすると男の声で誰何が返ってきた。

自らの名前を名乗るとドアを開けてくれた。

アンと共に部屋の中に入った。

わたしは両親の死を最大のきっかけに  
凡ての人間への  
温かい感情は消えた

しかし先生と出会ってから、  
先生は私の石の様な心を和らげてくれた。

わたしは先生を神と崇拝する。  
先生の後ろを歩けば、温かい世界が待っているんじゃないだろうか。  
いや、先生と一緒にならこの世界を変えられる気がする。

魔術師のいない世界。

それは誰も搾取する者がいない世界。

皆が幸福、笑顔な世界。  
だれも不幸な者のいない世界。

先生は不幸な人のいない社会体制を共産主義と言った。

先生について行こう。

このドアの先にも、戦場にも、地獄にも、

この理想を、先生を邪魔する者には粛清を。

共産主義の勝利の為に！



## 第九話 てつ（後書き）

ちよいといつもより短いですが、次回の長さとかを考えると区切りが良いのでここで。

レエニンとスタアリンの関係って悲しいですね。

## 第十話 わかれ

アンを傍らに置き馬車の中でゆれる。

この馬車はどうやら囚人兵の輸送馬車のようで、徴兵によってか、罪を犯したる労働者へ罰として兵役に就かされるかした者共を戦地へ輸送する馬車であるようだ。

馬車は屋根もなく野ざらしであり、またさかんに激しく突く様に揺れるので走り出して一時間ほどで腰が痛くなる。

殆どの者は沈黙しているが中には会話をする者もいたが誰も皆ここから聞き取れるほどの声では喋っていない。

かく云う私達もその中の一組である。

「乗客」は髭を生やしたる中年の者やガタガタとしきりに体を震わせたる若者。又見るからに悪人であるぞと分かる悪臭も甚だしい男が主で、女子は私とアンと三十歳ほどの髪を後ろで束ねた女と数人のフードを深く被りたる女とくらいである。

その三十歳の女曰く女は戦地へ着いて二日後には餓えた男共の慰み物になるそうで顔を覚えられる前に看護兵として登録せんがためにローブを着、フードを深く被りけん、との事だった。

看護兵ならば野戦病院にて任に就くことが多く、野戦病院には魔術師が配属されている故、余り不屈きなる行いは皆慎む傾向にあるそうだ。

それでも氣立ての良い娘はその魔術師の枕で寝りけむことは悲しき世であるとアンと共に嘆くことゝなしつ。

我らがこの馬車で揺られん理由は一週間前までにさかのぼる。

あの日、アンと共にサシユワル同志の会合に招待され参加したるが、誰も革命の本質を理解しておらず、甚だ遺憾に思つて大人気なく革命とはと熱弁を奮いたるに、大半は我に続いて諸活動大に行い啓蒙、労働者階級の団結今かと云う段になつて愚かにも貴族の金になびき、反革命分子ならん奴出づり貴族への密告により我ら牢獄へ打ち込まれ不公平な裁判によつて「革命を企てしこと明白なり。革命なる思想を奴隷階級に広く扇動せしめたる事は貴族への冒瀆反逆であり、そればかりか世界の秩序をも破滅に導く危険思想である」とし、幹部らはいづれも死罪または流刑、女は十年の慰安活動を命じられしことなりけり。

だがそれに心を痛めたのか、アンに想いを寄せん金髪殿下ハリツクス・サラノフの尽力によりテリーフ民国北部での安全保障問題により最近開戦したイエグザン皇国との戦争に送られることになった。刑罰の一つに戦地への兵役と云うのがあり、労働者階級から徴兵された兵で構成される奴隷軍団なる物に所属し前線で戦闘を行うものだそうだ。

労働者階級の軍医は貴重であり、一個大隊に一人いればその大隊は大変優遇されていると云うらしく、魔術師は魔術師の治療しかせぬということだそうだ。

兵科は軽装歩兵、パイク歩兵、騎兵、弓兵、看護兵、輜重兵と分かれていたらしく、いづれの兵科に属するかは戦地の奴隷軍令部に到着してから振り分けられるそうだが、案外いい加減なところがあり

希望すればどの兵科でもなることは出来るということらしい。

唯、余りにも適性が無い場合はもちろんはじかれる。

看護兵などは希望が多く男は大抵はいれない。

軍医は看護兵科に属する。

看護兵のなかでも医術の心得があるぞと魔術師に認めさせれば軍医の階級が得られる。

軍医は結構わがままが利くらしく、数の多い軽装歩兵科などは兵舎にすし詰めで鍵がかけられ自由も何もあつたものぢや無いが軍医となるとその辺を散歩していてもとやかく云われぬそうだ。

とかくこの世界の戦争におけるドクトリンを知る良い機会であるな  
と思った。

私はこの世界の戦争のやり方を知らぬ。

というのも魔法なる未知の戦力が存在するわけであるので、その魔法が如何に戦場にて発揮されるかをこの目で確認せねば武装革命は成功などしない。

魔法の戦略的価値を見、戦術に如何に用いるかを知るまたとない好機であるなと思った。

生の戦場が見られるわけであるので「労農赤軍」の勝利の為に見学させてもらう事にしよう。

もちろん我々もそこで死ぬ可能性もあるわけだが、アンの

「先生と一緒にならば例へ灼熱地獄へ落つるとも何等不安は無し。先生と共に歩まん事はわたしの最上の仕合せです。」

の言葉に暫し恍惚としたが、アンの頭を撫でてやる間に我が心も決まった。

急ぎすぎた革命の火は小さくなってしまったが、幸いレシンらによるマスケット銃の生産や選抜した確実に裏切りの無い者達によるひそかな訓練などはいまだばれていない。

火が消えたわけではない。

赤旗は破れど赤旗をつくる材料は幾らでもまだあるということだ。街を出る馬車に詰め込まれる前にレシンらと打ち合わせをし、逮捕を逃れた同志であるナジウム奴隷区の医者の一入であつたサナツキに、銃やテレビシエツト、大砲などで武装した労農赤軍の組織化を委ねた。聴いた様な名前の所為かえらく信頼できる。実際に中々優秀な奴である。

暫くは地下に潜つて私の帰りを待っていて貰う事で決着した。なんだかんだでいまや私はブラゴニーエのレーニンのようになってしまった。

自分でまいた種であるが。

ちなみにあの日のやり取りはこんなのである。

「我々に残された道は唯一つ！」

この街から脱出し、新たな共同体コミュニティを作るのだ！」

「だが魔術師にすぐつぶされてしまうのでは？」

「だがこの奴隷区にいつまでも押し込まれていては我々の平和など

ありえない！」

「いや、まて。逃げていてもいずれは滅ぼされるのが落ちだ。この街の城を落とし、市街を制圧し此処を赤髪白髪の樂園に……」

「しかし真正面から戦って魔術師に勝てるのか？まずは我々の同志をもっと募って組織の拡大を……」

「そもそも我々は経済的地位向上につとめるべきではないのか」

部屋の中には男が12人。

部屋に入るなりそんな話し声が聞こえた。

私達は部屋に入り軽く紹介をしてもらった後、部屋の隅に居た。

どんな組織かと思っただけなら何という組織なのか。というのもこの発言だけ見ても誰も革命の本質について理解をしていないとは思えなかったからである。

革命は帝国主義の鎖の一番脆い所から起こる。

革命とは労働者階級が団結せねば成し得ない。

労働者階級の結束によって現体制派である貴族主義者を打倒する必要がある。

そのためには日和見的な平和革命など不必要。

階級社会の打倒をめざし、労働者階級を先導する指導的な革命政府が必要である。

「くだらん、帰らせてもらおう。行こうアン。」  
「はい先生。」

帰ろうとすると一寸待って呉れと止められた。

では貴方は何か違う意見でもあるのかと問われた。

「我々は人間だ。金髪も赤髪も白髪も黒髪もみな人間だ。ではなぜ、我々だけが虐げられているのか？」

「奴隷だから？」机に並ぶ一人が言う

「魔法が使えないからだ！」もう一人が立ち上がる。

「違う。」

それはやつらが資本家であり、我々が労働者だからだ。  
あの帝国主義者どもは我々を搾取する。

決して魔法が使えないからだとか言う下らない理由からではない。

労働はあらゆる富の源泉だ。

奴らはそれを購入して新たな付加価値の付いた商品を作り利益を上げる。

本来ならばその利益は我々労働者が作り出した物だろう？

労働者が作っているのだから。

ならばその富は労働者へ分配されなければならない。  
ではその富は分配されたのか？

いや、されていない。

では何処に行ったのか。

資本家——つまり魔術士だ。

我々は搾取されているのだ。

何故搾取されるか？

階級の所為だ！

階級を打倒しない限り我々に日々のパンは、平和は、幸福は、誇りは、子供達の未来は訪れないのだ！

諸君は誤解している。

我々の目標は唯一つ！階級の打倒だ！階級の崩壊だ！

労働者階級、農民階級、ブルジョア階級、貴族階級。  
それら凡ての階級という概念を打ち滅ぼすことだ！

ではどうやって打ち倒すか？

——武装革命だ！

我々、労働者階級が団結し、貴族主義者、資本家、金と権力に溺れた者を打倒することだ。

万国の労働者の不幸を取り除けるのは共産主義しかない。

「我々」は知識人にならねばならない。社会の仕組みを学び、思想を入れ替える！

そして革命の必然性を労働者達に教えるのだ！

しかし革命には階級社会の打倒をめざし労働者階級を先導する指導的な「前衛党」が必要である。

前衛党たる共産党が労働者を指導し、武力を持って権力を奪取するしかない！

そして権力を議会に引き継ぐ。  
ソウイェト

それが我々が未来を得る、唯一つの方法だ。

「

部屋が静まり返る。

突如、拍手が起こる。

サシュワルが最初だった。そして次々とその部屋にいる者達が続いた。

「そうだ。貴族を魔術師を斃さねば俺達に明日は無い。」

「革命だ！魔術師におびえてひもじく生きていくのはもうごめんだ。

「

「共産主義！それこそが赤髪、白髪の希望だ！」

「そうだ！我々の理想郷。地上の楽園だ！」

ソウイェト  
「権力を議会に！」

「——しかし。

しかし魔術師に勝てるのか？」

一人の男が言った。

数人がざわつく。

気持ちは分かる。聞いた話だと魔術師は杖の一振りでも爆発を起こし10人を殺すと言う。

私が昨日死合った男は魔法剣士といって魔術師の仲でもそれほど魔力が無いそうだ。故に火の玉を一個飛ばせる程度だったらしい。

しかし、打開策はある。

私が口を開く前にアンが一つ発言した。

「先生は昨日わたしの目の前で魔法剣士を斃しました。」

——一同驚嘆する。

それは本当かなどと聞かれるので、アンが気にするようなことは省略しつつ、昨日の事件を話した。

「我々も魔術師に勝てる。魔法が使えなくても勝てるのです。」

「我々の人口と魔術師の人口、どちらが多い？」

「わしらの方が多いよ。」

この街だけで考えても、わしらは7万強。魔術師は2000人がやっとならう。

ブルゴーニエ全体で考えると、確か我々は1億はいたはず。対して魔術師は国中集めても10万くらいか。」

発言したのはレシンだった。彼もメンバーだったのか。

「なら、勝てる。勝てるぞ諸君！」

如何<sup>いか</sup>にして？

と誰かが言う。

「我々の力は数！この街だけでも七万人は居るのだ。ではその七万、いや八万が武器を取ったらどうなる？ たった2000人に止められるか？」

「いや、しかし実際に兵力になるのは八万もないぞ。その数は女  
子供も数えてあるからな。」

顔に傷跡のある古参兵の様な男が言う。

「私達は皆全員兵士だ。労働者階級凡ての人が兵士になる。そして  
其れが可能になる武器もある。」

レシンはどうやら気がついたらしく、自らの持っていた羊皮紙を机  
の上に広げた。

その図面はクロスボウ、トレビシェットをはじめ、中世的な兵器が  
描かれていた。

一同ざわつく。

——改良したのか？

——これなら実用的だ。

などと声を出す者もいた。

しかし一方では、

しかしクロスボウは女子供ではひけぬ。

訓練も命令系統、指揮系統もなしに戦えるか。

そもそもそんな訓練などをしていては決起する前に見つかって叩き  
つぶされる。

そのような意見が出る。

しかし、問題は無いとっておいた。

私はレシンに黒色火薬は出来たんでしたよね、と言った。  
肯定の意が返ってきた。

では、問題ないと言った。

私はここで一つ時代を進めるべく新たな武器を紹介した。

「武器の扱いは単純な弾込め、着火、引き金を引くだけ。

個人の能力に依存せず、使い方を覚えたら子供でも扱える。

訓練は音楽が鳴ったら歩くだけ、何があっても列を乱さず下士官の命令を聞いておけばよい。

それだけで済む武器を考えてある。」

一同問う。

——如何な武器か？

火縄銃である。本来は火打石式マスケットがよかったが、おそらくまだ生産は不可だろうということで先に火縄を推した。

火縄銃とはと問うので、銃と戦術の解説、レシンの作った黒色火薬の解説をした。

どうやらここに居るのは知識層であるようだったので飲み込みが早かった。

革命はいつもインテリが始めるのかと心でつぶやく。

「しかしそのような武器が量産できるのか？現物はまだか？」

現物は一週間以内に試作するといっておいた。

私の見た限り、ここの生産能力で火縄銃の量産は可能と判断していた。

ついで5ポンド砲、12ポンド砲の図面をその場で描いてやった。

どれも技術面ではここで生産可能であると判断している。

——重要なのは

「重要なのは、武器や戦術もそうだが、必要なのはこの計画を労働者全員が共有することだ。

武器製造、製造した武器の保管、ひそかな訓練、指揮系統の構築。八万人全員の団結がなければ、成功はありえない。

—

そして、

「そして、もつとも重要なのは我々の存在、我々の思想を広めねばならない。

人民の関心を得ないことにはただの自己満足に過ぎない。多くの支持者が必要だ。

我々の存在を気づかせるのだ。

党員も獲得せねばならない。

綱領も定めねばならない。

君達のように字が読める者ならば、明確な綱領が必要だ。

党員章、旗、シンボルが必要だ。

人々が希望を抱けるような、シンボル、象徴が必要だ。

知識層向けには説得力のある文を、

民衆には、希望を抱かせる言葉と象徴が必要だ。

—

「演説やテロが必要だ。

読み書きできる物にはビラもいい。

新聞を新たに作るのも良いかもしれない。

とにかく我々の存在に大衆が気づき、そして共感しうるような活動

をしてゆくべきだ。まずはそれからだ。

そして魔術師達に我々を潰されない様にしなくてはならない。奴らに密告する者には刑罰を。そして奴らの動きをつかんだ者は我々に密告を。隣人が裏切り者だった場合も我々に密告を。

そして英雄的革命精神のあふれるものは火薬樽、タール樽を魔術師に投げつけさせる。

この街の労働者全員の団結あってこそ勝利は得られる。

「

その日以降魔術師への火のついたタール樽の投げ付けやらあらゆるところでの演説が起こった次第で、現在に至るわけである。

ところで私達が逮捕され戦地送りになったことに対し、アルは可哀想に一人泣いていた。

私は彼の心情を察し、アンは必づ護るから安心せよと云ってやり、唯一言「すまん」と云っておいたが、アルの気持ちになれば私がアンを巻き込んだわけで私を殴りたい心持であつたかは知る由もなし。

彼が如何思ったか、その時如何いうことを考へたかはわからなかったが彼を見上げる私の瞳は真つ黒であつただろう。

アルは私を抱きしめて、如何云う事は無い、と云つたが、私の肩にはらはらと落つる涙に白装束は濡れた。

どうしようもなくなつて私は爪先立ちで背伸びして軽くアルと口付け<sup>吻</sup>を交わした後、ごめん、と云つた。

なんら憚りもなく行われた一連の動きに我ながら驚嘆したが、アルは紅葉を散らしつゝ動揺していたが流石アンの兄であり男である。すぐに「氣をつけて」と云つて濡れた頬を拭つた。

押収を免れた軍刀と南部と医療用具一式及びダスモ二等の入つた薬鞆を持ち、アンは刀「外刀」とフリントロックピストルと医療用具と薬鞆を持ち、二人ともローブを羽織り馬車に揺られる。

馬車の周りを行く魔術師の跨る馬の後ろに見ゆる村々と森林の上へ微かに雪の降るのを眺めつゝ

アンは私と微笑みながら言葉を交わし、如何なる危急存亡の秋<sup>とき</sup>であれども先生の傍らにて戦いぬかん。悲壮に思ふこと無しと云いはなつその姿は、傍から望めば真<sup>まこと</sup>の師弟愛を見ゆる事ありなむ。

我が心は彼女に師弟愛を超え師弟の恋心をも感づる。

この三つ編み赤髪と我がみどりの黒髪とは何が因縁か然もあらん。

唯、先生先生と慕つて呉れるアンは如何やら何時の間にか、我が命を投げ打つに相応しい大切なものになつたようである。

雪隠れ 望む村落 息白し

## 第十話 わかれ（後書き）

忙しくて手をつけられず、久々に書きかけのを見たら何とつまらない文かと思い、削ったり付け足したり。

そのまま残っているのは、ヒットレルさんが演説してるところ辺り。他の部分との文体の違いが目立ちます。我ながらけしからん。

## 第十一話 ゆうし

馬車は引き裂いた絹の様な雪の中、東を目指して走った。

前を望めば白き畑や木々。

右を望めば白き山々。

左を望めば白く染まる貧しい村落を見ゆ。

時折名も知らぬ街に入りて休憩す。

その間も我々は一箇所に集められ監視の目を受ける。

魔術師もご苦労様である。

休憩中は男も女も一緒に八畳ほどの部屋に詰め込まれるので女は必  
づ固まっていた。  
ひとたひ

一度孤立すれば欲求の溜まった男が何をするかわから無いからだそ  
うだ。

とは言え武器や防具などは故郷から持参し使用することが認められ  
ているので、中には丸腰の男も居るわけであるから自衛は出来そう  
な物だがなと思ったがそれは私が男だったからか。

私は今こそ十六七歳の四尺八寸ほどの可憐な女の子であるが元々が  
男であるので余り気に留めず男と談笑するの機会が多かった。

とはいえ談笑相手の男は一人であり、他の男共は俯いていたり震え

ていたり大層絶望の淵にあるようで話すことなどなかった。

その男は結構おらかな性格のようで名をジュリコフと云う。

聴くに故郷には妻と息子が居るそうで、魔術師相手に一寸喧嘩闘争をおこし現在に至るそうだ。

どうやら腕っぷしに大層自信があるらしく——その証拠が彼の傍らには三尺ほどの戦斧があつた——、戦地に行つて相手の魔術師を血祭りにあげてやるなどと云ひけるのをアンと共に微笑して聞く次第。

アンはいつも如何なるときでも私の後ろについてまわつた。

私がジュリコフなる男と笑談を云い合ふ時も私の横にちよこんと座り赤い目を細めて笑つていたりしていた。

ジュリコフが私に「ヒお嬢さん——私の事を彼はよくこう呼ぶ。ヒお嬢さんとはおそらくヒットレルのヒであるう。アンの事は単にお嬢ちゃんと呼ぶので聴く側が判別しやすいようにと配慮したのか。

——はなんだか男っぽいな。あゝすまん。失礼かもわからんが歩き方やら言葉遣いと云うか、なんかこう女の子じゃなくて男っぽいんだ。うん。いや学が無いもんだからうまく表せんが。」

などと云ひつる際にはアンが私の横で私の面を見つめつゝ、

「あゝ、其の感<sup>そ</sup>はわたしにも覚えあり。言葉にて云い表はす事困難を極めん。されど先生からは女よりも男の心を見たり。」

等と真顔<sup>たま</sup>での玉ふ始末であり、

「これ、アンまでもが私を男と云ひつるか。」

などで笑談<sup>じょうたん</sup>を交わすまでにいたれり。

周りの男は何等変化<sup>なんら</sup>はなかったが、女達は女達で談笑を交わすほどにはその場は明るくなった。

それにしてもそんなに男らしく見へるのだらうか。

それは良いことではあると思ふのだが、今は女であるわけで、余り男らしいと云はれるのは如何したものやら。

後で聞くに、アンは冗談のつもりではなく本当にそう思つて云つたと云ふ事であるので益々（ますます）困つた物である。

街から街へと馬車に揺られ東へ向かう。

どの街も奴隷区を覗く機会があつたが殆どの街で、栄養が足らず痩せこけた子供達が走り回るのを見るとアンは厭いとはしさを感じたようであつた。

それは憐れみ見下した感から来る物ではなく、同情と怒りと悲しみから来るものであるだろうと察する。

配給されるパンを雪解け水につけ腹に入れつゝ傍らのアンと共に、腰の痛くなる馬車に揺られ東へ行く。

数週間の後、幾多の奴隷兵士と見られる者共が列を成し行進する姿を見るやうになつた所で漸やっう目的地に到着した。

その間、私の不老による新陳代謝の無いのに感謝した。

と云うのもアンなどとは何とか隙を見つけて雪解け水にて寒がりながらも体を洗うのだが、他の男共となると無頓着で体臭の酷いことには閉口するしかない。

女達は不思議な匂いを醸し出していて、不快になることは無く、むしろ心地よかった。

アンはその匂いには不快そうにしていたが。

男と女では匂いの好き嫌いは違うのか等と思つた。

何はともあれ奴隷軍令部のある、「ブラゴーニエ」極東に位置する

軍事都市「セクテムストック」に入る。

ぱらぱらと雪の降る中、魔術師の隊長さんに連れられ奴隷軍司令部まで列を成して街の中を歩いてゆく。

道は石畳で中々広く、海が近いのか塩の匂いがする。

雪が三寸ばかり積もっていた。

建物は石造りの2階建てが標準らしく、同じような建物が並ぶ。

この街は奴隷区と市街の区別が曖昧なようで、労働者と貴族が同じ道を歩んでいる。

とは云え労働者は道の端を歩くようである。

街は非常時であるらしく、軍服や甲冑を纏いし者共がせわしく闊歩し、我々と同じ境遇の者なのか列を成して軍司令部へ向かう者、屋台の露店も商品は剣やら槍やら兜やらばかりである。

軍司令部の前に来ると、何やら豪華なゴシック様式の建物と掃除の行き届いていない雨の跡も残る建物とが二つ並んでいた。

看板を読むに、豪華なほうは正規軍の本部であり、汚いほうは奴隷軍の本部であるそうだ。

中に入れば列がある。

奴隷軍団と云えども、どうやら書類仕事やは魔術師の仕事であるようで彼らの顔は不満そうだ。

おそらく此処に配属されるのは余り名誉なことではないようだ。

なにはともあれ無事、看護兵科に属することが出来た。それも私とアン共に千人隊つきの軍医の階級を得た。

聞いた話どおりいい加減な仕事で、私とアン二人とも一緒の部隊に配属して呉れと云ったら其の通りに成ってしまった。

配属は極東奴隷軍団第2千人隊である。

どうやら千人隊長及び参謀は魔術師であるが、百人隊長以下は労働者の中から選抜されるそうだ。

そんな制度では戦闘において壊走することや魔術師に対する反乱も起こるだろうと思っていたら本当にあるようで、早速本部に伝令が走り、とある十人隊長らが結託して四個十人隊が練兵所で決起し暴れまわっているらしい。

軍医の地位を手に入れた私とアンは其の足で自らの部隊の兵舎に向かった所で自己紹介もそこに反乱軍の鎮圧に向かうので第1百人隊に附いて行けとの事だった。

脱走の機会がトンでもなく多いことに驚嘆したが、この世界の戦闘を見る良い機会であるので附いて行く事にした。

アンとはかねてより今回の従軍の意義は打ち合わせてあるので、互いに目配せのみで二人とも日本刀を携えつゝ百人隊長揮下の十人隊長らが集う兵舎まで行った。

その兵舎の中に入れば隊長と思しき甲冑を身に着けた数人の男共が私達を見た。

お前へは何某<sup>なにがし</sup>かと問うので、名乗ると共に己の配属先と階級とを述べた。

すると見たことの有る顔に出会った。

奴隷軍団第2千人隊第1百人隊の百人隊長はジュリコフであった。

ジュリコフ笑いつゝ、看護兵科に属するとは思つたが此処で再び合間見えるとは何かの縁だな等と云う。

十人隊長らは私の事を可愛くてちっちゃい女の子だな等と云う。

こう見えても十七であると云うと、食べられないように用心した方が良いたの事だつた。

アンについては十四だとアン自ら云うと益々驚いたようで、そんな年の女の子も戦場に立たせるとは決起した十人隊らを応援したくなるね等と云ひたる者もいた。

男ならば十四で戦場にでる労働者も多いが女の子は珍しいそうだ。

其れに対しジュリコフは、こんな所で決起するような莫迦は応援する必要なしと云いけるに、時勢も読めぬ莫迦は労働者を解放する事などできぬ今は耐えて忍ぶべしと云つた。

十人隊長らは深く感心し、「おやっさんついて行きます！」などと云う者まで出る。

何はともあれ鎮圧任務に協力せんと云つた所、軍医が二人も居れば心強い、こんな可愛い娘二人に治療されゝば兵達の士気も上がるだろつ等と云はれ、微笑みつゝいとねんごろに看護すると云つておいた。

簡単な作戦会議もそこそこに、では出動だと云う段になって、出陣前にジュリコフが隊員を広場に集め、規定によりより勲功を上げし隊は特別切符の発行及び待遇の改善があるぞと云つた。

すると隊員から女の肌はどうなっている等と云う者があり、其れに対し、慰安婦もよこしてくれるかもなとジュリコフは答えた。

アンはそんな男に厭あきれている様子で、「先生、今発言した奴の治

療は後回しにしませう」等と私の傍らで云う。

アンの心持ちを察するに冗談であっても気持ちよく無いものであるはずだが、彼女は本当に健気である。

強い娘だ<sup>こ</sup>なと改めて思った。

私は彼女の頭を一撫でしてやって、「そうしようか」と云ってやった。

彼女は心持ちよさそうに目を細めた。

隊員達は軽装重装の違いあれど服の何れかには紅色が入っていた。どうやらこの国の軍の象徴の色であるようだ。

私達二人は官給品のフードつき前空き紅色ローブ（ローブというより外套に近いかもしれない）を羽織り、その下には刀と銃を忍ばせる。

中に着る服は紺色の詰襟の軍服を調達し、長ズボンを履いた後、ナジウムからの相棒であるブーツを履く。

二人とも背丈が小さいので少しダボダボである。

治療用の道具や薬はバックバックやら背囊やらに詰め込む。

さて現場近くに辿り着いた所で、剣戟の音やら雄叫びやら物が打ち壊される音やらが聞こえた。

先に到着した他の隊と交戦中らしく、決起した隊長はしきりに、諸君は魔術師の犬でよいのか共に魔術師を打ち倒さん、などと呼びかけているが、誰も聞く耳持たず。

魔術師達もちよつとくらは頭が回るようで、鎮圧側には褒賞を用意していたりするので目先の事に目が眩む連中ばかりの奴隷軍では反乱軍側につこうとする者はなし。

と云うよりも、一寸考えればこんなタイミングで決起しても成功するはずが無いと分かるわけであり、反乱側になびく者は本当の脳無しであるう。

ジユリコフらはそのまま敵に突貫し、乱戦状態に突入する。

市街地であるので屋台やらを打ち壊したり盾にしたりしつつ、互いに斬りあう。

とはいえどちらも同じ格好であるので弓兵の誤射は多発する。

又、弓兵以外でも、味方同士が互いに敵だと思いあい片方は相手の頭を斧で砕き、それを見た味方が又敵であるなど誤解してそやつに槍の一突きを食らわし、斧を持っていた男の顔を知っていた味方はさらにその槍兵に対し剣を振るう、などと云う馬鹿げた状況に陥った。

これではこの世界の戦術云々の話ではない。

前線の一つ後ろで、看護兵らと共に、担がれてくる負傷兵の弓矢を抜いてやったり、焼灼止血しょうしゆけつをしてやったり、応急手当に追われる。

すると前線の一箇所が崩壊したらしく、数人の兵士が此方に駆けて来る。

だが、此処で困ったことになった。

此方に駆けて来る兵士らは味方なのか、それとも敵なのか。

判別つかぬ。

これ以上近づかれては危険だという距離になった所で、横で負傷兵に手当てを施していたアンが立ち上がり、ロープの下に手を入れ、刀の鯉口を切った。

彼女は何の迷いもなく抜刀した。

駆けて来る二人ほどが両手剣、所謂クレイモアいわゆるを構えて突進してきた。

彼らの殺気を感じる。

駆けて来る兵らは敵であったのか。

其の二人に呼応して残りの兵らも各々の得物で戦闘態勢をとる。

看護兵らは混乱し、恐慌状態になったが、今はどうすることも出来ない。

下がっていると云う以外に何が出来ようか。

アンが待つ。

彼女は正眼に構へた。

敵は二名とも革鎧を着、両手剣を八双の構えの様な要領で構え疾走してくる。

アンに向かう敵は二人。

私はローブの裾を後ろに払い、軍刀の鞘を左手で握り、右手で負傷兵の握っていた短槍を握り投げる体勢をとる。

革鎧の男が駆けて来る。

敵は片手斧を高く振り上げ、もう一人は盾とショートソードを構え、もう一名はショートソードのみを構えて疾走してくる。

私に向かう敵は三人。

アンに対し、両手剣使いは大きく上から袈裟懸けに斬り込まんと大きく振りかぶる。

力任せに、右足にて踏み込む。

その剣先は彼の背中に触れそうなほどに。

その一撃を食らへば、アンは骨をも砕かれ一撃で以って死ぬことになるだろう。

ましてや男は六尺ほどの背丈であり、アンへの威圧感は何程のものか。

そしてその男の体から生み出されるエネルギーは例へアンが刀で防がんと受けようととも其の刀をも容易く折るだろう。

そしてもう一人の両手剣使いはアンの左側を取ろうと回り込む。

しかしアンの目には恐れはなく、その赤い瞳は唯二人の敵の姿を見据える。

恐怖を抱かず、唯々敵の動きを見る。

平常心を保ち、相手の動きを見る余裕を持つべし。

両手剣が敵の背中から離れる。

溜めに溜めたその腕の弾性を以って敵は両手剣を振り下ろさんとする。

もう一人が彼女の左側につき、両手剣を彼女の脳天めがけて振り下ろさんと振り上げる。

彼女は左足を右足の近くまで引き付ける。

右膝を曲げつゝ刀を左水平へ

その勢いの残る間にその勢いを以って右足を右斜め前へ押し出す。

アンの体はバネのように、文字通り射出される。

両手剣を振り下ろさんとした男は驚嘆の顔つきをした。

アンの左側へ回り込んだ男は一瞬アンの姿を見失った。

彼は今からでは防御はできぬ。

彼の腹めがけてアンの刀が迫る。

彼の右足が大地を踏みしめる。

——左薙ぎに抜き胴。

彼女は彼の側面から後方へ抜ける。

彼女は右足を地に着けた後、すぐさま左足を左方向へひきつけ、其の左足を軸に右足を円を描くように右後方へ滑らせつつ首を捻り、後ろの腹を斬られ驚嘆している男の後姿を望む。

そのまま右足の運動により右回りに腰から後ろを向き、体軸をずらず両手を捻って左薙ぎに男の首を飛ばす。

首を飛ばされた男は自身の振るった両手剣の重心移動により前へ倒れこむ。

アンの目には残ったもう一人の両手剣使いの男が映る。

彼女は右足を前に出したそのまま一度上段へ構えなおし、右諸手上段に構へた刹那、口を小さく開け

「サアッ」

と息を吐きつつ右足を踏み込み、上段に構えた刀を男の額を目掛けて振り下ろし、

——直斬

男は薄く体の中心を頭から股間まで斬られ、一步後ろへ仰け反る。

彼女は振り下ろした刀を中段に構えなおし、そのまま男の喉への突きを食らわす。

喉への刺突を受けた男はそのまま後ろへ倒れこむ。

私に向かう男は三人。

私を中心にして距離は4メートルほど。

私は左側に回り込もうとする男に向かって短槍を投げつける。

これはただの牽制であり誘いである。

故に左に回り込もうとした盾を持つ男は其の盾で槍を防ぐ。

その刹那私の右側をとっていた斧を持つ男が好機とばかりに疾走し、接近してくる。

私は首を右側の男に向け、左手で軍刀の鯉口を斬り、右手で柄を握り、左足を右前に向かって半歩ほど踏み出す。

ついで右足をつま先を右側に向けつつ右側へ踏み出しつゝ抜刀。

腰が右側を向き、居合い斬りの要領で片手にて左袈裟掛けに斬る。

斧を持つ男は薄く斬られ、飛びのく。

首を動かし正面より接近したる男を望む。

正面のショートソードを持つ男は上段に振りかぶり私の左手諸共胸

を斬らんと剣を振り上げる。

私は手首を返し両手で柄を握り軍刀を右水平に構へ、左足を軸に右足を円を描くように左前へ動かし、左旋回しつゝ右薙ぎに正面より来る男を斬る。

私の背丈は低いので我が胸の高さで振れば相手の胸を斬れる。

正面より来る男はそのまゝ血を噴水のように上げ斃れる。

私はその軍刀の勢いを以って更に左旋回し、左側より来る盾を持つ男へ、右足を押し出し、重心移動により前傾姿勢となりつつ突きを食らわす。

盾を持つ男は其の盾で以って私の突きの軌道を反らす。

——ぬかったか！

失態である。

見ると男のショートソードは私の頭上へ振り下ろさんとしている。

そもそも実戦経験に乏しい私が三対一を無傷で切り抜けることは不可能だったのだ。

しかし、ふと思う。

私は一度死んだ身である。

ならば今更わが身の何が惜しかろうか。

左手くらい呉れてやろう。

死ぬ覚悟をしたれば如何なる局地に陥ろうとも、不思議と説明できない力が出てくるものである。

その源は何か。

信義であり

義理であり

仁義である

そう。

己が望んで死を受け入れ、其の命を以ってなさんとする本懐が、義の為であるならば、何事も恐れることは無く。

うぬばれだが、薄志弱行な者達には分からぬ思考だろう。

私は手首を返し刃を天に向け刀は地面と水平に。

そのまま男のショートソードを持つ右手に小手を食らわす。

同時に振り下ろされたショートソードにより左手を微かに斬られる。

運が良い。

かすり傷で助かった。

この男が徴兵による兵であるから助かったのだ。

もし熟練の兵であつたらば、私の小手よりも先に相手の剣が私の左手を斬っていただろう。

男の右手首が地面に落ち、男は激痛により盾を投げ出して悶える。

私は其の斬り上げた刀の勢いを以って頭上に上げ、左旋回し、斧を持つ男を望む。

其の男は斧を振りかぶる。

右足を前へ押し出し前傾姿勢になる。

体重の移動による重心移動によって得られたエネルギーを用い、頭上に上げた軍刀を振り下ろす。

私の体の体重を用いた斬撃は腕の力のみによって振り下ろされた斧よりもすばやく、男の脳天へ叩き込まれる。

――面

男は衝撃で仰け反る。

斧の重みで後ろへ斃れる。

男の頭の弾性を利用し軍刀を再び振り上げ、すぐさま振り下ろす。

――連面打ち

ついで斧を持ちたる男は頭蓋骨を碎かれ斃る。

己の軍刀に刃こぼれ一つ無いのを見ゆ。

だが、その理由を考えても仕様の無いことだと思い、手首を落とされ、のたうち回る男の下へ行く。

男に止めをさし、痛みから解放させたる後、アンの方を望めば、丁度アンも二人を斃した所であった。

私がアンに微笑みかけ、彼女の傍へ行つた瞬間、激戦を繰り広げる戦場にガラスの割れるような音と、轟音とが鳴り響いて、私とアンがそちらを見たとき、とんでもない光景が目映る。

一人の魔術師が杖を持ちなにやら唱えている。

彼の目の前には反乱軍と鎮圧せんとする軍とが激戦を繰り広げていた。

しかし今見えるのは建物の2階ほどの高さまでそびえ立つ氷の柱であり、其の氷の柱の先端はすどく、赤く染まっている。

その場で戦闘を繰り広げていた兵達は何れもその氷に貫かれたり。

其の氷は美しく、しかし人々の骸を貫く姿は醜く、してそれをなしたるうら若き金髪の女性の魔術師は悲しそうな顔をする。

アンは「先生、」と云つてその三つ編みの赤髪を冷たい風になびかせ、赤い瞳で私の顔を見る。

アンからは私は肩で切揃えた黒い髪を冷たい風になびかせ、黒い瞳で己の顔を見ていると見えるだろう。

アンは先生と呼ぶ後は続けて云わなかった。

私とアンは刀を血づるいをし、それぞれ鞘に収めた。

斬られけん勇士は雪に隠されぬ何処が墓やら道さへ知らず

## 第十一話 ゆうし（後書き）

時折文語を入れたくなるが、それって読みづらいのだろうか。  
自分は文語が好きなので違和感を感じないですが、他の人から見たらどうなんだろうか。

## 第十二話 こひじ

己の周りには斬り捨てられし男共が5人ほど。

胸に義無く、

想いも無く、

信念無く、

唯々云はれるがまゝに、欲望すら抱かず剣を振るう者の末路である。

兵は命令されたから剣を振るうと云うのは間違いである。

其の振るう剣には例へ命令によるものであっても想いが込めれる。

それを無くして、振るう剣は大儀や信義、仁義、信念によって振るう剣に打ち折られる。

彼女は其れが在ったのだろう。

私が教えているとは云えまだ一月も経っていないが、二人の両手剣士を抜いた。

想い無くして出来ようか。

或は唯才能があつたか。

彼女はあの時なんと想つたのか。

雪の冷たさで凍る白刃に男の赤を添えたときの感情は、恐怖か、嘲笑か、無心か。

抜き胴に右旋回にて男の首を飛ばしたる一刹那に何を想ったか。

精神論で以って戦いに勝利など出来るかと云はれそうだが、幾ら戦術や腕があろうとも心が弱くては斬れるものはない。  
とにかく後で褒めておいてやろう。

空を仰げば曇り空。

雪がはらはらと降り積もり、兵の亡骸をも隠す。

件の魔術師は私とアンとの横を一寸此方を見た後歩いて去っていった。

石畳から生えたる氷の柱は魔術師の去る後割れて消えた。

暫し私とアンは兵達の亡骸の方を見ていた。

ふとアンを見ゆ。

彼女の赤髪と肩には一寸ばかり雪が積もっていた。

彼女は私が見ているのに気がついた後、私の肩に積もる雪を払って呉れた。

私も彼女の肩と頭に積もった雪を払ってやる。

其の日、負傷兵を看護せんと駆け回り、決起した隊も鎮圧側も判別無く治療して回った。

ジュリコフらは軽傷であり生き残ったが、部隊は壊滅判定を出しても良い損害であった。

魔術とやらの威力を見た。

個人の戦力としては極めて強力である。

個人で彼らと相対した時はどうしたものだろう。

其のときの状況にもよるが、幾ら自動拳銃を持っているとは云へ、勝機を見出すのは至難であろう。

しかしながら個人の力で戦争には勝てぬ。

日も沈んだ刻限になって兵舎の振り分けられた部屋に入る。

木製の建築物で所々腐食しており床が軋む。

しかし歩兵科の連中と比べれば良い方で、彼らは部屋も無く、広間でゴザをひいて寝るそうであるから大層衛生環境諸々が悪るそうである。

私とアンとは同じ部屋である。

部屋には2段ベットが二つありそれだけでもう殆どスペースは無い。

だが住人は二人だけであるので、結構自由なものである。

体を拭いて髪を梳きつつアンの身体を見る。

彼女は髪を三つ編みではなくそのままおろしている。

二人とも部屋の中で他に誰も居ないと見て裸である。

幼いが成長途中の其の体はなんとも美しい。

紅葉の様なのを見つめていたら抱きたい衝動に駆られる。

されども私は今女の体である。

その所為か男の其れとは違う感情が活発になる。

女子の肌を知る事も無く逝った身である私は先生と慕って呉れる彼女に何かせん。

師弟愛によるものか。

それとも家族に対する愛なのか。  
あるいは恋心なのか。

己が得たいと想うよりも与えたいと想う心の方が大きい。  
しかし、

その与えたいと云う想いをば得たいと想う。

恋愛と云うのが果して私と彼女の間にあるのだろうか。

私が恋心を抱くのはあの娘だけであるはずである。

私が彼女に抱く感情はあの娘に抱く其れとは違う気がする。

だが宿主無しには愛などあるわけも無く。

此方がどう想おうとあちらが如何して呉れるのかが問題ではないか。

何が何やら適当な語句も見当たらず。  
水の入った桶に己の顔を望む。

「彼女」は美しく、彼女こそ私が純粹に得たいと想う。

「彼女」を得て私は仕合せになる。

「彼女」と想い合はなむ。

されど、

今の私は「彼女」であるのか。其の娘の皮を被っているだけの私か。

日暮れが来ると泣けてくる不思議さ。

夢に出づれば朝泣く不思議さ。

されども我とはもはや会う事も叶わぬ。

「彼女」の生きる前世を去った私が今更何を想わん。

一つ決別をした。

私はアンを後ろから抱擁し、頭を撫で髪を撫でた。

彼女は一寸驚いた様子だったが直ぐに気持ちよさそうに目を瞑り身を任せる。

私の背丈は145センチほど。

彼女の背丈は五尺ほどであるので私の顎が彼女の肩に乗る形である。

其の日はアンと共に枕を交わした。

ちよいとばかり布団を我が血で汚したが気にする者は居ないだろう。

破瓜は存外に痛い物であつた。

彼女はしきりに私を求めた  
私は彼女の望むようにした。

それこそが我が得えんとするもの。

彼女が望むがままにしてやるのが私が欲するものだと思ふ。

深く長い接吻の後「先生……」という呟きを発し、彼女は我が腕の  
中で夢に入る。

「お早う御座ゐます、先生。」  
「お早う」

昨夜は何事も無かつたかのように、彼女と二人で朝食を食おうと云  
う話になつた。

軍の食事はこういうものなのかと楽しみにしていたら、トレーにパ  
ンと芋とを乗せて食いつつ患者の切開をしていると言つのは如何云  
う事か。

飯が不味いとはこう云う事である。

とは云え彼女が口に芋を頬張りもぐもぐとさせながら鋸で負傷兵の手足を切断し、手際よく「それ」をバケツに放り込んでゆく姿を見ていると心持が良い。

負傷兵は悶え、叫び、

看護兵らは俯いているが。

彼女へ微笑みかけると、切断部より噴出した血を浴び髪の色と目の色とに妙にマッチングしたその笑顔を私に返して呉れるのはこの貧相な食事の最大のおかずである。

患者もうまく片付けた後、例の決起した下士官の絞首刑が執り行われるとのことで魔術師が床に寝ている右手を切断したばかりの男を連れて行った。

彼は決起側の隊長かそこらだったのだろう。

しかしながら死に行く者の命を繋ぎ止めておいて其の命が目の前で奪われると云うのは飯が不味いと思った。

とは云え、片輪になってしまった労働者に明るい未来が待っていたかどうかは知らぬ。

軍医とは練兵所内では暇なものである。

我が第2千人隊の遠征は一週間後であるそうで、新兵の訓練やらが練兵所の広場で行われている。

あまり風邪だとか腹痛だとかを訴えてくるものは居ないし、其の程

度なら看護兵にまる投げしている。

この文明レベルの医者なんて普通はこの程度である。

医者で食っていくのが本懐ではないので、適当にやっておく。

暇であるのでアンの刀を見てやり、研いだりしてやった。

彼女が引っさげた刀の柄頭を握って、稽古をつけてくれと云って来たので、そんなら広場の隅を使わせて貰おうと思って手術着（焦げ茶色のローブ）のまま刀を引っさげて広場に向かった。

到着したらなにやら広場の中央に絞首台があり、そこに先ほどの右手のない男が吊るされている。

元気に走り回っているジュリコフに、あれはなんだと問うたら、見せしめのつもりだろうと返ってきた。

飯が不味いとはこの事である。

広場の隅のほうで彼女は刀を振るう。

三つ編みが揺れるのを見ていると心地よい。

技とは何か。

技とはある状況において其れを打開せしめる為の方程式である。

（これについては剣客物の小説や刃鳴。らすに詳しい）

仕合とは互いの勝機を奪い合うことにある。

技はその勝機に打ち込むための型である。

勝機とは、

先々の先

先の先

先

後の先こ

の四つに分類される。

もちろん流派などによつてはその数も解釈も違つが、私の似非剣術ではこのように考える。

「先々の先」とは

互いに先を狙っている際に、相手の起こりを発見し直ちに打ち込むこと。

「先の先」とは

相手が動く瞬間を狙つて一瞬早く打ち込むこと。

「先」とは

相手が動く前に不意を突いて打ち込むこと。

「後の先」とは

攻撃を防いだ直後にあるいはそれを先読みして、切り返しの技を出すこと。

打ち込みの型、所謂、技はその勝機に適した動きのテンプレと考えれば分かりやすい。

想定した相手。

背丈六尺。

得物、打刀。

中段構え。

対して此方はこちら

背丈五尺。

得物、打刀。

中段構え。

相手は「先」を狙い、此方の小手を斬ってくる。

——勝機、後の先

此方は右足を後ろへ、刀は八双の構えに近い位置まで、尚且つ右上方へ両の手を外す。体をひねる形になる。

相手の刀は虚しく空気を斬る。

その一寸も待たず、足腰を垂直に落としつつ刀を振り下ろす事によって、直ちに相手の小手へ打ち込む。

相手は攻撃中である為、此方の斬撃を防げない。

——『ひねり打ち』

此れが「後の先」の「技」である。

相手は小手を打たれ、此方の二の太刀を受ける事は出来ないので、好きな様に料理する。

と言う具合である。

と云つても、油断をしていたら此方も死が待っているので、突きを打ち込み鳩尾へ刺突するなどする。

ちなみによくフィクションなどで、互いに思い切り振り下ろした刀で刀の斬撃を音を鳴らしながら受けるシーンがあるが、刀で刀を受けるのは本当に非常時のみにした方が良い。

そんな事をすれば刃こぼれは当たり前、刀身もひん曲がるという残念な結末が待っている。

刀で刀を受けたい場合は、力技で受けるのではなく、相手の軌道をそらす、と云う感覚で受ける。

彼女はとても筋が良い。

というより才能があつたのだろう。

数えで十四。学問も優秀、剣術もすぐ身につける。

振るう刀に彼女の猩々緋色の髪が映る。

彼女の赤色の瞳、紅色と云つても良いそれを見ゆ。

何を見ているのか。

見ゆるのみならば彼女が「想定した敵」を見ているのだろうか、心

中は何を見ているのか。

彼女は可憐である。

真上にある太陽に照らされつつも、其の肌は白く、腕は細く其の細さは貧しさからよりもそれで十分であるからと考えさせる。

髪は赤色であり癖毛でもなく真っ直ぐに降りる其の髪を後ろで三つ編みに一つに束ねたる長さは腰の辺りまで降りる。

瞳は紅色であり、顔は西洋人らしい深さは無く、かと云って亜細亜人らしい平坦さもなく。

だがどこか日本人らしさもあり。

笑うと口元に現れる小さな皺しわが可愛らしい。

器量は十分。それで居て私を先生々と云ってついてくる。

何の因果で出会ったのか。

彼女と私の交際は青白くもなく、桜の舞うことも無く、ほおずきの様。

なぜなら私は真の名前を述べることも無く、自らのこの身体でさえ紛い物である。

しかし彼女にはそれが本物である。

私は本物ではないが彼女には本物であるのだ。

このような思考をしても仕様が無いことだ。

——ラメチャンタラ　ギツチヨイチヨイデ　パイノパイノパイ

彼女が何の歌ですかと首を傾げ小さく口をあけて問うてくる。

就寝時間になり部屋へ行く。

彼女と共に寢床に入りぬ。

私の横でうつ伏せになりつつ、羊皮紙の束とペンとを持ち私の話を書き留めるアンを眺めていたら、彼女はふいと此方を見つめて紅葉を散らしながら云う。

「先生、わたしはヒツレルさんを戀づる想ひは強くなり行き、最早離れ難き。社会を変えんと理想と大儀を語るこの身なれども先生を求める想ひの勝るのを赦し玉へ。」

「何を云ひつるか。私はアンを愛づる想ひあつてこそ。アンを想ふ愛の情の心は出会いし時より浅くはならぬに、君の望むならば如何な道をも共に歩まんを。」

そう云つて接吻を交わす後、目に涙を浮かべつゝ、「女子同士であるのに愛し合ふなど、おかしい事でせうか」と彼女は問う。

私は男である。ならば何等おかしい事など無い。

身体は女子であるが。

だが思考や心までも女子にはなれぬ。

思考や心が男であるならば彼女が私を求める理由も不可思議なことも無く。

人は言の葉では説明できない事で惹かれ合う事もあるならば、言葉で以って表す事は難きともたとい身体は女子であろうとも男である

私と女子である彼女が交際しうるのに迷いはいらぬ。

されど、

真名を隠す私は彼女と歩む筋は立つか。

いや、彼女にとっての真名が今の私ならばそれは語らずとも道理は立たぬか。

ならば、彼女の仕合せな風に。

私は彼女への接吻を以って答へと成した。

朝は刺すように寒く、空気中の水蒸気までもが凍ったかと思つほど。救いはアンの体の温かさか。

寒さは強くなり、雪も激しさを増す。手ぬぐい程とも思える雪が降り積もる。

この地域はそろそろ冬のようなようだ。

そんな中後三日で南へ行軍をしなくてはならないとは、満州へ行つた先祖の心持が理解できそうな気がする。今回は私達が露側なんだろうが。

「お早う」

「お早う御座ゐます、先生。」

朝食を取りに二人して廊下を歩く。

飯は各兵科ごとの炊事当番が行う。

看護兵科の当番が既に飯を用意しているようだ。

大鍋の中からスープを茶碗に入れて貰う。

このスープ、具が芋だけなのは最早気にせず。

雪も弱まった所で他の兵科の連中が訓練を開始しようとそろそろと外に出てゆくのを窓から見た。

兵舎の外に出ようと恐る恐る扉を開ければ、ヒュウツと雪が建物の中に入ってくる。

看護兵らが顔をしかめたのを見て、ちょいと会釈<sup>えしゃく</sup>して謝ったつもりで外に出る。

雪にブーツが4寸ほど沈み込む。

歩きづらいつたらありやしない。

後ろからアンに呼び止められ、外套を忘れてますよとにつこり笑って例の赤い外套を渡して呉れた。

着ようとしたら、彼女は外套を貸して下さいと手に取り、私に着させてくれた。

アンを傍らに野戦病院を設置するための機材を確認に行こうとしたら、目の前から魔術師が歩いてくる。

弱くはなったが雪が降っているのでこの距離からではよく人相が見えぬ。

どうも雪に足を取られる様子もなく、どうやら地面の上に己の踏みしめるところだけ氷の床を作って歩行しているようである。

しかし氷とは気温が低けりやよいが、寒さもちよっと和らいできた

所なので滑って転びやしないかと思う。

かの魔術師は此方に歩んできた。

其の服は青地のローブに赤色の装飾がされている。

ローブの下にはサーコート付きの鎖帷子を着込んでいるようで、そのサーコートも青地に赤の装飾がされている。腰には三尺ほどの黄銅の杖を差している。

とそこで彼は盛大に前のめりに滑ってこけた。

手を衝いて受身をとろうとしたが、下は雪である。そのまま雪の中へ沈んでしまった。

アンが右後方へ俯いて、くすくすと笑っていた。

中々起き上がらないので手を貸そうと思って彼の近くまで行き、手を差し出しながら大丈夫ですかと問うた。

見ると金髪の女性である。

彼女は赤面しつつ、「ああすまない」と云って立ち上がった。

すると何やら我に返ったように「奴隷に手を借りるなど」云々と云い始めたが、何やら無理して云っている様子。

よく見ると、どうやら先日の反乱軍を一拳に氷の柱で貫いたあの女魔術師である。

まあ落ち着きんさいとうまくなだめたところでヒットレルとアンジユルペナは何処にいるか知っているかと問うので、ここで知らぬと

云つても後で直ぐ分かることであるので、私であると名乗った。

すると彼女は、ハリックスからちよいと話を聴いているので軍令部の隊長室まで着いて来いとの事だった。

聴くに彼女がこの第2千人隊の千人隊長であるとの事だった。

なるほど先日のあの場所に現れたのも気まぐれではないということか。

アンが不機嫌そうに口を一文字にしていたので、嫌なら私だけ行つて話を聞いてこようかと云ったら、一寸慌てた様子でついでいきますと云った。



## 第十二話 こひじ（後書き）

剣術の蒔蓄やら。

共産趣味は暫しお休み。 2、 3話の間は剣術解説しつつ、剣客商売に精を出します。

## 第一話 せんせい

打ち鳴らされる音楽。

太鼓とラッパの音。

この音楽は先生が「せきぐんてきだんへい赤軍擲弾兵」と題して作曲したもの。

一見陽気な音楽だが、そのなかに気品がある。

だが戦場で奏でられると陽気さ気品さは感じられない。

あるのは一步も引かず、銃剣を掲げ突き進む同志達の情熱のみ。

懐かしき故郷、ふるさと「ナジウム」近郊での会戦。

なだらかな平原。

膝丈ほどの緑色の草花を踏みしめ白い服に赤色の装飾が入った服を着た男達が音楽に合わせて行進する。

そついえば先生は緑色の事を青色と呼んでいた。

何故、緑なのに青色と呼ぶのかと聞いたら、なんでかな私にも分からんよ、といっていた。

自分でも分からないのに何故青というのだろう。

いまだに分からない。先生自身がわからないのだからわたしには最期の時が来ても分からないだろう。

どうも最近先生のような言い回しが多くなってきたな。

わたしは白服の男達のほぼ中央で、やまとがたな日本刀と先生が呼んだサーベルを携えて行進している。

本来ならば後方から指揮をしなくてはならない立場だが、無理を言つてここに立たせてもらっている。

なぜならわたしがこの手で、斬らなくてはならないから。

別に誰が命令したわけではない。戦略、戦術的に考えても、わたしが斬らなくてはならない道理は無い。

だが、わたしが斬るのは義理の為。

そして理由を問いたい。

ついぞその理由を聞かず此処まで来てしまった。

もはや斬り結ぶ剣戟けんげきの中で聞くしか無い。

わたしの直ぐ横に、空気を引き裂く音と共に相手の20ポンド砲が着弾し、大地がえぐれ、肉片となった同志が飛んできた。

青々とした草花が赤く、革命の象徴の色へと変貌を遂げる。

我が軍も砲兵隊が撃ち返す。

四方に撃ち出す砲声は雷鳴の如く、互いの戦列に地を降らす。

副官はわたしに大丈夫かとしきりに問うてくる。是非も無い。大丈夫に決まっている。

わたしは理由を聞き、自らの手で斬るか斬られるかされるまで斃たおれるつもりは無い。

兵士達は動揺する。だが戦列は崩れない。戦列を崩せば銃殺だ。逃げ出す者は反逆者、反革命分子とみなされる。

それよりも先に戦列が崩れれば相手の騎兵が突貫してくるだろうが。兵たちはそれを分かっているのか、動揺しつつも足は止めず。

前方には黒服を着た者達が並ぶ。銃剣を掲げこちらに前進してくる。

その歩みはこちらよりも早足。しかし列が崩れるそぶりは無い。

黒服達の顔が見える。目が見える。

彼らの目は忠義に満ちた目。  
彼らを率いる者への信頼の目。

今では彼らは反革命軍。

しかし此方よりも戦意は高く、統率が取れている。

空が青い。夕焼けであつたらならば悲壮感があつたかもしれない。  
しかし太陽は真上。

空の青さの中にこちらに向かって大きくなる丸いものが幾何十。  
空の青さの中にあちらに向かって小さくなる丸いものが幾何十。

進めば進むほどそれは益々（ますます）互いに白と黒を崩れさせる。

黒服達の表情が見えた。

彼らは口を一文字に閉め、まっすぐに此方を見据えている。

わたしは全隊に止まれを命じた。

構えと叫ぶ。

サーベルを天へ向ける。

狙え。

黒服はまだ歩む。

サーベルを大地へ振り下ろす。

発砲。

砲兵のそれとは小さな音が連続して鳴り響き、辺りを白煙で包む。

黒服が斃<sup>たお</sup>れる。しかし、斃<sup>たお</sup>れたものの後ろから又黒服がその欠けた穴を埋めるように出てきて、行進が止まることは無い。

わたしは一列目をしゃがませる。

二列目に構えの号令。

狙え、

再びサーベルを天へ。

発砲。

サーベルが同志達の屍<sup>かばね</sup>の方へ向く。

再び白煙に包まれる。

黒服の姿が見つらい。

すると黒服は歩みを止めた。

一寸間があつた後、向うから白煙が上がる。

刹那、同志達の白服が赤く染まる。

白服が紅白の服になる。

わたしは待てない。待てなかった。

「バイヨネットチャージ！」

マスキットを掲げる兵たちは銃剣突撃を。

隊長格の兵たちはサーベルを掲げ、黒服に迫る。

走る。躍進距離二十。

黒服もそれに呼応して銃剣で突貫してきた。

数の上では此方は相手の三倍。先生の教えてくれたランチェスターの法則に当てはめても、勝てる。

黒服の中央を見据える。

黒服の中でも突出して迫ってくる一隊があった。

わたし達は抜刀隊と呼んでいた。

長銃を持たず、サーベルで武装した突撃専門の部隊。

それはどの隊よりも雄雄しく、鬼神にも恥じない勇。その跳躍する隊の中に「先生」を見た。

上段に構えたその刀は太陽の光を映す。

風になびく黒髪、——先生から言うところの緑髪が——がひどく美しく思えた。

何時までも変わらない先生。あのときから変わらず、わたしが尊敬する先生のまま。

強いて言うなら隻眼となつたくらい。

しかし残った片目は真っ直ぐにわたしの瞳を見つめている。

わたしは先生に向かって躍進する。

ふと、出会った頃を思い出した。

わたしは何時から先生と呼び始めたんだっただろうか。

私は跳躍する。

白服の中に、ほぼ中央に、先生と呼んで慕つて呉れてゐた子が居た。

上段に構へ、跳躍する。

風が涼しい。

私は此處で死ぬ。

死なねばならぬ。

屹度先生と慕つて呉れてゐた子に斬られねばならぬ。

此の際、勝敗は最早知つた事ではない。

あの子と斬り結ぶ事だけが今は望み。

あの子は理由を聞いたがるだらう。

だから懷に手紙を入れた。

あの子が私を斬つたら、見て呉れるだらう。

距離は後十歩ほど。

あの子は左脇で構へた。

當然だらう。あの子は私よりも背が高い。  
出會つた頃は同じくらゐだつたのだが。

「脇構え」とは別名「捨の構え」とも呼ばれる。

左脇構えからの斬撃は素早く逆胴を打てる。

然し、胴以外打てないのだ。

其れに比べ左脇構えに對しては何處へでも打ち込める。

左脇構えを取る者に、打ち込まれた斬撃を防ぐ術は無い。

左脇構えとは變化に乏しい、實用性の無い構えである。

なのに、

何故あの子は左脇構えを取つたのか。

先生と慕つた師を斬るのに躊躇ひがあるのか？

其れとも自己の能力に自惚れてゐるのか？

否。

あの子はそんな阿呆では、子供ではない。

私は上段に構へてゐる。

「上段の構え」とは別名「火の構え」とも呼ばれる。

小手、胴や脛、全ての防禦を捨て、相手の斬撃をかはすならば後ろへ下がるしかなく、命を惜しまぬ構え。

——私の最期にふさはしく、私の人生其のものだつた。

さう思ふことも出来る。

中段の構えなどの攻防の妙はなく、ただ攻撃一邊倒。

己の身は捨て置き、相手を先に斬る——若しくは（もしくは）相打ちと成らうとも一撃を加へる。

故に「火の構え」と呼ばれる。

攻撃手段は上方からの打ち下ろしのみ。

其の打ち下ろしを掛ける爲の勝機——其の機に最速の速さで以つて斬る。

此の絶対優位を誇る構えに、左脇構えをとる其の理由。

其れはあの子の技にある。

長い闘争の末、あの子は一つの技を生み出した。

單純に見れば、左脇構えよりの斬り上げである。

私が見た事のあるのは、ただ其れだけである。

背の低い私が上段で構へたならば、同時に斬りあへば先に刀が届くのは私。

相手よりも背丈が低いと云ふことは相手との距離が短いと云ふこと。

どう云ふことが。

背が高い者が背丈の低い者に對し、振り上げてから振り下ろして相手へ届くまでには、相手の背丈の小さい分刀が空気を斬り裂く時間が長い。

對して背丈の小さい者が背丈の大きい者に對して、振り上げから振り下ろしによつて相手に届くのに空気を斬り裂く時間は短くてすむ。

私の背丈は4尺八寸。あの子は五尺四寸。  
私が上段を取る理由は此處にある。

後の先<sup>こせん</sup>を狙ひ、後手に回ればどうか。

いや、あの子は其処まで甘くは無い。  
加へて此の體格<sup>たいかくさ</sup>差である。押し切られるのは道理。  
故に私はある意味、攻めるしかない。

然し其の體格差を利用し、私は上段からの先の先<sup>せんのせん</sup>、先々の先を狙つた、最速の斬り下ろしを狙ふ。

あの子からすれば、後の先若しくは先の先を狙ひ、下から斬り上げれば私の突貫を黄泉への突貫に變へる事が出来る。

だが、甘い。

此處に來たばかりの私なら、躊躇<sup>ためら</sup>つて一步引いたところを斬られるか、其のまま袈裟懸け、唐竹に斬りかかつて、下から斬り上げられて死んだだらう。

然し、私も學<sup>まな</sup>んだ。

右目を犠牲にして何も學ばなかつたわけではない。

私は大上段に構へる。

勝機はフェイント。

後の先である。

今まさに斬らんと見せかけ、あの子の刀が目の前を掠めたところで

小手を打つ。

等と考へてゐたのは兩目が在つた頃。

私は其のまま大きく跳躍する。  
からだ たいじゅう  
體の體重全てを乗せて、跳躍する。

其の體重移動で得られる力を利用して軍刀を振り下ろす。

あの子の赤き瞳を見つめる。

三つ編みの赤髪が視界の端に見える。  
出會つた時から變はらない髪。身體からだは成長し變はつたが、髪だけは  
變はらない。

ふと、出會つた頃……いや此處に來る前からの、事を思ひ出した。

## 第二話 りんね

生粋の讀書家で暇さへあれば本を讀んでゐた。

物事を中々決められず、所謂「優柔不斷」とよばれる類であるが思ひ込みが激しく、かうだ、と決めたら突つ走る。

又何か作つたりするのが好きだつた。よく工作をした。

高校は工業系にすすんだので楽しませてもらった。

純文學から機械力學、葉隠まで、何でも讀んでゐたので雜學だけは豊富だつたが、いかんせんテスト等ではまるで役に立たず、テストも下から勘定したはうが速い教科ばかりだつた。おかげで中學生の時分には、奇人變人のレッテルを貼られてゐた。

本を讀み漁るうちに自らの凡其の思想が形作られていつた。

我が國は何故自虐史觀に捉われてゐるのか。教科書を開けば、他の國の出來事は「遠征」やら「平定」「併合」等と聞こえの良い言葉が用ゐられてゐる。

然しどう云ふことか豐臣の朝鮮出兵をはじめ數々の我が國の戰爭行為に就いてはことあるごとに「侵略」と言ふ言葉が使はれてゐる。

「」のやうに日本がインドネシアを侵略し、占領すると外國からの非難の聲が強まつた云々」

と云ふ文があるが、當時の世界情勢をどうみても非難の聲を強くしてゐるのは聯合國であり、其の聯合國は其の當時我が國と戦争中であつたので、非難するのは當然である。敵對國に對して「よくやつた！よくぞ我が國の植民地を占領した！かの國こそが世界の模範だ！」と言ふとても思つてゐるのか。そもそもスカルノの件などには一切觸れてゐない。

其のやうな賣國教育が行はれてゐるのは何故か。

其れはWGIPによる云々だからこそ日本人の誇りを取り戻し、眞の獨立國家として振舞ふべきなのだ！

と言つた工合である。

様は右派的思想に成つてゐた。と言ふことである。

其れに加へ、其のやうな性格なので、我が母校に國旗が掲揚されてない事に氣づくと言身、校長室までのりこんだものだ。

そんなので日本男兒ならばと言ふ理由で劍道も嗜んだ。

然し、高坊にも成ると其のやうな思想に對して疑問を抱くやうに成る。

日本を窮地から救ふにはどうすればよいか……最早末端にゐたるまで洗腦され荒廢した我が國を救ふには生半可な方法では不可能だ。

此の時期讀んでゐたのが「我が闘争」であつたので、最早ファシズムによつて國民を啓蒙し、先導をするしかない。と考へてゐた。

然し、其の當時のヒットラーのやうな政權奪取劇は展開できさうにない。

私は半ばあきらめて、教師にでもなつて平凡な日々を送るのも悪くない。と考へ始めてゐた。

そんなとき出會つたのが「資本論」やら「共産党宣言」なので、無論影響され、此の國を蝕む賣國奴も、所詮は階級闘争によるものと悟た。

賣國行爲が生まれるのは工作員の所爲ではない。經濟的格差けいざいによる階級闘争によつて引き起こされてゐる。

我が國は資本主義經濟に傾きすぎてゐる。富む者は益々（ますます）富んで行き、貧しいものは益々貧しくなつてゆく。もう少しバランスをとる必要がある。

共產主義の實驗じっけんは失敗したが社會主義色しゃかいがとても濃い資本主義經濟ならどうか？と云ふのが當時高校2年時の思想であつた。

然しどちらにしても政權奪取をしなくてはそんなことも夢の中で終はつてしまふのでどうしたものかと考へ、いつ其のこと自分が議員に成り變革へんかくの旗手に成るか。などと考へてゐたが、我が國の選舉體制を鑑みるに此れまた不可能に近く、武裝革命しかないか……などと話の合ふ仲間内で話したりしたものだ。

其れに関連して、ヒットラーに心酔し始めてゐた。ネットに落ちてゐた「意思の勝利」を鑑賞した所爲だらう。案外自分は影響されやすい方だつたのか。

のめりこんだら突つ走る性格であるので、どうしても演説がしたく

なつた。

丁度其の時期生徒會役員選舉があつたので其れに立候補しヒットラ  
ー式の演説をさせてもらつた。

演説後の拍手の量はすさまじく、いつもは寝てゐる諸氏も聞き入つ  
て呉れたやうで、案外うまくいくもんだと驚いた。

生徒會は其の後一年間前期後期共に勤めさせていただき、集會のた  
びに演説をぶちかます機會きくわいが得られて其の年は樂しませて戴いた。  
然し附いたあだ名が「演説の人」と云ふのは如何なものか。

兩親は私が小學生の時に離婚し、父が男手ひとつで面倒を見て呉れ  
た。

母は別の男とくつついたやうだが、其れでも特段母が嫌ひなどとは  
思はなかつた。

私には想ひ人が一人いた。

とても可愛らしい娘で肩で切りそろへた緑髪に小柄な身長、性格も  
今時には珍しく撫子の様な娘だつた。

進學先も決まり、さて此の學び舎とも後僅かで別れんと云ふ時期に、  
私は悶々としてゐた。

どうしても首相を斬り度くてしやうがなかつた。

野黨第一黨やうが今までの与黨うの議席を上回り、新たな政權に成つたの  
だが、次々施行される法が許せなかつた。

かやうな政府を許してよいものか。

今の政府ーいや政治家には何の信念も志もない。

誰も國家ための爲に働かず、

利權の鬼と成り、  
自らの保身に勤める。

そして其れに惑はされる臣民達。

誰も聲を上げず、

仁義は廢れ、

腐敗がまかり通る。

私は滿身の怒りに満ちてゐた。

私の怒りは純粹な怒り、

邪惡なものに對する怒り、

義の爲の怒り。

誰かが此れを正さねばならぬ。

正さねば國が滅びる。

國が滅びると言ふことは日本人が死ぬと言ふこと。

そんなことは許してはならぬ。

かつて大和を、

故郷を、

家族を、

想ひ人を、

仁義を、

信じるもの護るために散つてゐた者の魂、

言ふならば、國家の魂が許さなかつたのだ。

誰も彼を斬らうしなひし、宮城かつきよに向かつて切腹する者も居なかつた。

民衆も自ら敵性國家の絞首臺かうしゅだいに立つた事に氣づいてゐなかつた。  
だから私がやるしかないと思つた。

義理を立てれば道理は引つ込む。

護國の鬼と成つて死ぬことによつて得られる生もある筈だ。

一首相を斬つたところで直ぐ何か變はるわけではない。然し變はる  
事のきつかけに成る筈だと確信してゐた。

私は自稱共產主義者に成つてゐたが、愛國の志を捨てたはけではな  
かつた。

そんなわけで大分前に倉庫で發見した軍刀（おそらく陸軍の九十四  
式であらう）を持ち出した。

先祖が歸國後筆筭の中に突つ込んでゐたものを、先祖の死後、物置  
のなかに於ておいた儘忘れ去られてゐたらしい。

不思議にも60年近く放置されてゐた割にはよい状態であつた。

自分の中で

「救國の志に答へて刀が再び力を取り戻したのか」

などて痛い事を考へつつ、妄想も大概にしておかないといけなが  
本當にさうなのではないかと思へなかつた。

何やら刀身が櫻色に發光してゐるやうな氣がする。

發光するのはおそらく昂揚して幻覺を見てゐるにしても、状態が  
良いのは事實だ。

なにはともあれ手入れ用の打ち粉やらをネットで取り寄せた。

此のご時勢、ネットで何でもそろふものだ。

然し、得物があつても技術がない。

剣道をやつてゐたとは云へ、當日に成つて反射的に軍刀で面打ちなどした日には目も當てられん。

抑も剣道の構へと真剣の構へは柄を握る位置が違ふのだ。

暫く考へあぐねてゐたが、戸山流などの動きを映像などから學ぶことにした。

様は、服の上から致命傷を負はせる事が出来ればよい。

残つた學業もそこそこに練習に勵はげんでゐたら良い工合に成つてきた。

人間、なんとか成るもんだ。

斬るのはよいが身内に迷惑はかけられんと思ひ、父に其の旨を傳へると最初は驚嘆してゐたが直ぐに

「よしわかつた」

と返事をして呉れた。

さう云ふわけで斬つた後はお巡さんが出張つてくる筈なので、縁を切り、私物を處分したが、此れまた再び悶々としてゐた。  
其の例の娘の事が頭からはなれなかつた。

此れから死なんとする時にかやうな想ひを抱くとは、人間不思議なものだ。

「ああ、一緒に月を眺めれたら如何程よいものか……」  
などで呟く事數十回數十回。

いつそのこと自分は死に行くことを打ち明け、死地に行く前に抱かせて呉れたら此れほど嬉しい事はない、と思ふやうに成り、はたして傳へるべきか否か揺蕩う。<sup>たゆと</sup>

然し、私は何も傳へない事に決めた。

手紙くらゐはとも思つたが、此れから居なくなる男にかやうなものを貰つて何に成るのか。

うだうだとしてゐた心にけりをつけ、首都に向かふ。

もう12月で雪も降りさうだ。

五月十五日だとか二月二十六日に決行すれば、洒落が效くかなどと思つてゐたが莫迦らしいのでやめた。

父から——戸籍上はもう違ふが——餞別にと南部式と片道分の交通費を戴いた。

何故南部式があるのか不思議に思つたが、どうやら此れも同じ倉庫にあつたやうで、私よりも前に見つけて保管してゐたさうだ。

おそらく使はない（使へない）だらうがありが度く受け取つておく。

トレンチコートを羽織り、以前キャンプ用に贖入した折りたたみナイフをポケットに入れる。

軍刀は竹刀袋にいれて持つていった。

雪の降る夜の中、首都に降り立つた私は、即刻首相官邸に向かふ。

離れてみてゐたが、どうやら此處で斬る事は出来なささうだ。警備の数が多すぎる。<sup>かず</sup>

素人の私が突貫しても刃は敵に届かないだらう。

暫く思案して、首相の自宅附近へ移動する。

雪が肩を白く染めるころ、首相が歸つてきた。

其の時、首相が車を降りた其の一寸、首相に間があつた。

警護の者が3人居た。だがしかし、素人の私が斬れるのは今此の瞬間ををいて他にない。

勝機は在る。あの頭がお花畑の首相だ。だれも斬りに来るなどとは露にも思つてゐないだらう。

そして其の警護のものも、まさか此の國で辻斬り、此れほど価値のない者を殺さうとする者などいまいと思つてゐるに違ひない。

さう脳が考へてゐたときには、私は敵に向かつて躍進してゐた。

鐔を左手の親指で優しく押し出し、右手で柄をつかんで抜刀し、上段にかまへて疾走する。

あと六歩ほどで間合ひに入る。

狙ふは型どほりの袈裟斬り。

必殺を狙ふなら喉への刺殺、突きが良いのだが全力で走つて近づき突く、と成ると確實に當てる自信がない。

そんな自信のない未熟な技は使はない。

今は「確實に斬る」ことが求められてゐるのだ。

警護の者が氣がついたのか此方の進路を妨げようと駆け出し始めたのが視界に入る。

別の者は此方を拘束する爲か駆け出さうと右足を踏み出したのが見える。

もう一人は首相へ手を伸ばすため車のドアから手を離す。

だが私は相手にはしない。

すれ違ひざまに斬つて応戦——等してゐては本来の目的に逃げられるかもしれない。

抑も私には彼ら専門職の腕には敵わぬ。

ならば我が目指すのは首相唯一人。他の者など知らぬ。

「天誅！」

と叫び跳躍する。

其の聲に氣づいた首相は此方に振りむかうと首を動かす。

此方の進路を妨碍しようとした者の間合ひに自分が入る。此方へ向かつて駆け出した者は最後の跳躍をし私に迫る。手を伸ばしたものは首相の右肩へ手を觸れんとしてゐた。

おそらく、二太刀目はないだらう。

一太刀で以つて斬るしかない。

左足で地を跳躍し、右足を前へ前へと押し出す。

全身の體重が高速で前へ移動する。

同時に上段に構へた軍刀を其の體重移動を利用して袈裟斬りの軌道で振り下ろす。

首を動かした首相は首と連動して體を此方に向けた。

彼は我が目を疑った。

此の現代社会で刀を持つて自らに切りかかるうとする者がいる。  
其の刃は自らの目の前に迫っている。

——どう云うことだ？！

何故己が斬られる？

軌られなければならぬ？

——殺されるのか？

党を結成して爾來じらい党を支えつづけ、長年の野党生活を脱し与党につき、遂には首相にまで上り詰めたと言うのに！

慥かに不祥事はあつた。然し隣國との關係改善等の功績は大きい筈だ。

国民が望んだことも全てやったじゃないか！

だのに、何故目の前に刀を持った男がいて、己を殺そうとしているのか。

——何故だ？

首相のネクタイが赤く染まる。

「え？！」

其れが首相の最期の言葉だつた。

首相を斬つた。

私が腐敗の象徴と見立てた男を斬つた。

目的は果たした。

だが、私は此處で死なねばならぬ。

此の腐敗の象徴と屍を重ねねばならぬ。

此處で警護の者にわが身をあづけられようか。

此處から全速で以つて逃げ出せようか。

其れは爲らぬ。

其れは無責任。

自らの行ひに責任を取らねばならぬ。

責任をとらねば此の男を軌つても何も意味は無い。

——斬つた本人も其の場で果てる。

其れは義。

義を貫かねば意味は無い。

社會に何も變化は無い。

唯のテロリストで終はる。

其れは避けねばならぬ。

だから、私は此の場で死して、義を貫かねばならぬ。

右足を膝を折つて前に、左足は大きく後ろに、體は前傾姿勢で殘心

をせずに反動で左足を少し前に出し右足を後ろに。

斬つた反動で動かした足と腰にあはせて胴、腕が動き軍刀を上げる。

中段構への高さまで戻したら、其の速度を以つて左手で柄を握つた  
儘手首をかへし、右手は其のまま刀身を逆手で握り、軍刀を自分の  
腹に突き刺す。

腐敗の象徴の血と、おのれの血が混じる。

此方に駆け出した者が私を拘束せんと私の體をつかむ。

彼には焦りがあつた。

自らの任務を果たせなかつた。

何のためにいままで訓練してきたのか。

なんというザマだ

この国ではテロなど無いと高を括っていた。

その油断がこれだ。

ふと劍客の目をのぞいた。

信念に満ちた目。

この剣客に迷いはないのか。

よく見るとまだ十代ほどではないのか  
なぜ其れほどまでに信念を抱けるのか。

この国で。

自分でもわかつている。あの首相はクソつたれだったと。

自分はなぜあんなのを護っていたんだ。

自分が護るべきは、もっと違うものだったのかもしれない。

いかん。迷っていたら気がつかなかった。

この剣客は自らの腹に刀を突き立てている。

割腹するつもりか。

すると剣客は右手を離し、ナイフを取り出した。

この軌道は此方へ突く軌道か！

近接格闘では此方に分がある。

このナイフは叩き落す。

己は己の仕事をこなす。

私は警護の動きなど気にせず、右手を刀身から離し、峰を渾身の力で以って叩く。

綺麗に一文字に斬れた。

腸はまだ出てきてゐない。

其のまま右手で折りたたみナイフを取り出す。

彼は私の手の軌道をそらさうと手首をつかんできた。

其のまま彼を突いた場合の動きに合はせて彼は私のナイフを無力化しようと動く。

然し私は其のやうな氣はなかつたので、其のまま自らの首にナイフを突き刺した。

同時に強引に宮城の方へ體を向けたところで體の力がスツと抜けた。

「斬り結ぶ　雪にやどれる　月影の　刹那の下こそ　我のまほろば」

視界が赤く染まり、ぼやけてくる中で私が見たのは雪に隠れる綺麗な月だった。

氣がつけば彼岸花の花畑の中に斃れてゐた。  
確かアスファルトの上で割腹したはずだが。

此處が黄泉の國か、靖國か。

等と思つてゐたら意識が遠のく。

腹部を見れば、臓物さへ出てゐないが一文字に切れてゐる。だが首

は無傷だ。  
どう云ふことか。

あれ此れ考へてゐたら思考能力が低下してきた。視界がかすむ。視界がぼやけてくる中で見たのは此方に驅けてくる人影だった。

気がつけば彼岸花の花畑の中に斃れてゐた。

これはデジャヴか。

腹を見たら特段傷はない。確か割腹したはずだが。

軍刀と南部は手に持つてゐたが、羽織つてゐるものが死人の着る白  
い着物、白装束である。

ここが黄泉の國か、靖國か。

等と考へてゐたら、向かうに人の列が見える。

全員私と同じ死人の服だ。

日本人の習性か何となく最後尾に成らんで前にゐた、道端で井戸端  
會議をしてさうな奥さんに、

「ここは何処か」と問うたら

「あの世ですよ」と返つて来た。

「今きたばかりなの？」と奥さん

「さうだと思ひます。氣がついたらあすこに斃れてゐたので」と私  
「まだ若いのに、かわいそうに」

「いえ、氣をつかはんでください。ところでこの行列はどこに續いてゐるんです？」

「向うにあの三途の川があつてね、その川を渡るための船を待つてゐるんだけどこれがまた本数が少ないらしくて……にも関わらず搭乗審査が厳しいらしくて、すごいチェックされるのよ。なんだか前世でよい行いをした人はお金がもらえて、そのお金で船に乗れるそうだけど、お金がない人は泳いでわたれとか言つらしいのよ。で、泳いで渡つた人は大抵おぼれちゃつて、天国にも地獄にもいけないとかわたし旦那をいつもこき使つてたからもらえる量が少ないかも……もおう、あの世にきてまで私に迷惑かけるなんて、なんて人なのかしらっ！」

などと會話してゐたら、ようやく審査の検問所が見えてきた。

いくつか前にゐたチャラ男が金がないらしく、近くのご老人から金をせびろつとしてゐた。

ケシカラン奴だと思ひ、軍刀でぶつた叩かうとしたら（もちろん鞘に納刀したまゝ）彼は検問官に河に突き飛ばされてゐた。

浮かんでこないやうで、溺れてひどい目にあふのは本當のやうだ。

さて、私の番が回つてきて検問官が言つた。

「どうやら君は別の便のようだ」

「どう云ふことです？」

「この紙を持つてあすこへ行きたまえ」指で場所を示しながら言う。

と言ふので、何やら一筆書いた紙を渡されその場所まで云つた。

明治時代の建物の様な場所で直ぐわかつた。

中へ入るとモーニングを着た若い兄さんが

「何か御用か」と問ふので

紙を渡しつつ「ここへ行けと云はれた」と答へた。

「……お持ちください。」

と言ふことで暫く外を眺めて待つてゐたら、見事なカイゼル鬚をは  
やしたおじさんがしかめっ面でやつてきた。

「もう一度生き還つたとして、生き返つたそばから死ぬ以外に欲し  
いものはあるか。」

「どう云ふことです？」

「質問に對しての返答をしなければ成仏できんぞ。」

どう云ふ事かわからないが、話の流れからするとおそろく生き返ら  
してくれるのか。

前世の記憶は引き継ぐと言ふことをお願いした。

折角なので來世は別の視點<sup>しってん</sup>で楽しませてもらはう。

「女の娘の姿にしてください。」

容姿に就いての細かい注文をしてゐると、私が生前、月と一緒に見  
たいと思つてゐたあの娘と瓜二つの姿になつてゐた。まあ、さう云  
ふものだらう。

勿論一定の容姿になつたら不老に成ることは必須だ。しかし不死は

遠慮しておかう。

後、勿論軍刀と南部式は持つて行く。

軍刀が刃こぼれ、折れたりしないやうにして欲しいと言ふのと南部も現役時代同様に使へるやうにして欲しいとお願ひした。

「それだけでよいか？」

後、全ての言語を読み書き會話くわいわができるやうにしてくれと頼んだ。生前の英語のテストの英語などは下から勘定したはうが早いくらゐだつたので、これが叶ふなら有難いことだ。これ以上は望まん。人外や超能力者になるつもりはない。不老の時じ點で超人ではあると思ふが。

「さて、では切腹したまへ、介錯はしてやらう」

きつとこのカイゼル髭はキチガヒなのだらう。

いままでの會話からどうして切腹する必要が出てくるのか。

しかしあの世で死んだらどうなるのか。あの世のあの世なんてあるのだらうか。

カイゼル髭がポン刀を持つて來て素振りを始めた。

まあこの際何でも良いだらう。

あの世で死んだらどうなるかと言ふのも興味がある。

落ち着いたらこの體驗を基にした小説でも書いてみようか。

軍刀を抜き、モーニングの兄ちゃんから渡された白い布を切つ先か

ら20センチくらゐのところ刃に巻きつける。腹に刺した後、持つて動かすためだ。  
切れないやうに巻きつけるのが中々難しい。

上着をはだけさせ、呼吸を整へる。

息を吸ったところで止める。

そして切つ先を腹に刺しこむ。

十分に入ったら

息を吐く。

痛みで動けなくなる前にそのまま一文字に掻つ捌く。

首を介錯しやすいやうに伸ばす。

すると肩に激痛が！

なんてことだ、カイゼル髭が介錯に失敗した！

「心靜かに！」

カイゼル髭を勵ます。なんと云ふことだ。この道のベテランかと思つたがちがふのか。いや、介錯は失敗すること多い。彼を責めても仕方がないだらう。

痛みが傳はつてきた。これ以上待てばその邊を臓物を引きずりながらのた打ち回つてしまふかもしれない。

等と思つてゐたら風を切る音と共に、私の視界は眞つ黒になり意識を失つた。

最期に見たのは窓の向ふに生えてゐた彼岸花だつた。

逝きつきて 美しきかな 黄泉の國 あはれこの身は 輪廻を彷徨ふ

### 第三話　であひ

幼少時から咳が出ると長期にわたって止まらなくなるので、何度か死に掛けた。

咳が出ると呼吸ができなくなつて窒息しそうになる。

咳が止まらなくなるたびに背中を押してもらいつつ手を引っ張ってもらつて胸を張ると幾分か楽になるので、咳が出るたびにそれを繰り返していた。

しかし、月日がたつごとに酷くなる一方で、周りには成人まで生きられそうにないと思われている。

何とか治療をと、くそつたれの魔術師共に両親が何度も懇願したが叶わなかった。

おかげで虚弱体質扱いで女として生まれたが体で働くこともできないので労働は免除されたがその分を部屋族に負担をさせてしまった。

その所為か両親は3年前に死んだ。

兄は魔法以外の治療方法を、少ない書物から学び、居住区でも片手で数えるくらいしか居ない、「異端の医者」と認められ重労働の義務は免除されたが居住区内の健康管理を一手に引き受けることになった。

元々、魔術師たちは奴隷など使えなくなったら補充すればよいという考えていたが、ある時期異常な数の奴隷が死んだのでお上の命令で一定の治療をするということになった。

しかし奴隷の治療などしようと思う者など居ないので——中には物好きもいたが——奴隷達が自ら古代の「魔法を使わない治療」を行うようになっていた。

兄は私の病を治そうと様々な手を尽くしてくれたが、未だ直っていない。

毎日寝たきりで、外から聞こえてくる鉄を打つ音や坑道が爆発して崩落する音、見栄えのいい女の子が奉公だといって魔術師に連れて行かれるときの声を聞くのが唯一の楽しみだ。

我ながら随分と曲がった性格になったものだ。

ある日、何時もよりも調子がよく、農業区にあるアランカザンダツカの花畑に遊びに行った。

調子がいいとよくここに来る。アランカザンダツカは大抵奴隷が住む場所に多く生えているので奴らからは奴隷の花と呼ばれているが、私は好きだ。

花と花の間を通りながら花畑の中心まで散歩する。お決まりの散歩コースだ。

しかしいつもとは違う風景が視界に入った。

人が倒れているを見た。

思わず自らの体のことを忘れて駆けて行く。どうやら大怪我をした女の子のようだ。

大方、強姦された後に殺されたのだろう。よくあることだ、ほかっ  
て置こうと思ったのだが、私を探しにきた兄が——大抵抜け出した  
ときはここに居ると知られている——この子を見つけてしまった。  
ほかっておけばよいものを、世話好きな兄は部屋へ運ぶと言い出し  
た。

私が、

「でも死んでいるんでしょう？」

と言ったが、気を失っているだけでまだ生きている、担架と人を呼  
ぶからここで待てと言って駆けていった。

しかし同じ奴隷同士でも強姦して殺すなんて良くあることなのにそ  
んなことに一々構っては手が回らないだろう。

そもそもまだ近くに犯人が居るかもしれないのに私を置いて行くと  
は、私が襲われるとは思えないのだろうか。

兄は優しいが、焦ると思考が浅くなるのは玉に瑕だ。

ふと斃れている女の子を見る。すごくきれい。綺麗な黒髪をしてい  
る。私よりも年上だろうか。しかし身長が低い。センチであらわす  
と150センチもないのではないだろうか。そう見るとそれほど年  
は離れていないのかもしれない。

なんだか周りに咲くアランカザンダツカと相まってすごく絵になる  
ふと、このまま倒れていてくれた方が美しいと思った。

視界に色が燈つて最初に見へたのは木造部屋屋の天井だつた。左側から外の光が入つてきてゐる。

觸覺が戻つてきて感じたのは、柔らかい、布團の中にゐる感覺だつた。

嗅覺が戻つてきて最初に嗅みだしたのはドクダミに似た草の匂ひだつた。

聽覺が戻つてきて、活氣のある大勢の人の聲が遠くの方から聞こへる。

こゝは一體どこだらうと體を起こしてみると、部屋は大分狭い、簡素な木製のベットのの上に寝てゐるやうだ。きしむ音が聞こへる。ふと横を望むと三つ編みの赤髪の少女が坐つてをり、私と目が合った。

「や……やあ」

と聲をかけたら向ふへ驅けて行つてしまつた。

何かまづかつただらうか。どうやらこゝは日本では無ゐやうであるし、言葉が違つたか。

然し赤髪とは面妖な色だ。染めてゐるのか。  
唯、革命的な色ではある。

「うぐっ」

腹部に痛みが走る。

そふゐえば割腹したんだつたか。

しかし転生と云ふ形で黄泉の国から戻つてきたと云ふ訳では無いやうだ。

其れにしても腹部くらい治してからこの世に送つてほしかつた。

治療の後がある。包帯が巻いてあつたが赤く滲んでゐる。体を起こしたのはまづかつたか。

ふと自分の體に違和感を感じた。腹部が痛いのは別に、股間に何ぞ足りない。

まさかと思ひ、傍らに於てあつた水の入つた桶の様なものの水面に自らの面を映してみた。

おゝ、要望どほりだ。

綺麗な緑髪を肩で切りそろへたあの娘と同じだ。

ふと自らの胸を弄る。柔らかく、氣持ちが良い。

そんなことをしてゐたら益々腹部が痛くなつてきた。繃帯が更に滲んでゐる。

此れはまづい。

其のまゝ體の力が抜け、倒れてしまった。

視界が霞む。

妹は昔から体が弱い。

体力が無いと言っわけでは無く、呼吸に難があるようだ。

咳が始めたら直ぐに胸をはらせて少しでも息を吸うのを楽しんでやらないといけない。

埃っぽい周りの環境の所為もあって、よくつらそうな顔をしている。

妹を何とか治してやりたくて、何度も魔術師に懇願したが跳ね除けられてしまった。

居住区の医者にも相談したが彼を以つてしても治療法はわからないと言う。

そもそも彼らの治療と言うのは外傷に対してが主であるので、妹の様なのは打つ手がないと言われた。

しかし、彼によるとそもそも外傷に対する治療法にしても、古代の書物から得られる情報が主らしい。

古代の書物は我々奴隷が労働させられる鉱山で採掘作業中に出土したりする。

基本的には魔術師らに持っていていかれるが、彼らからしてみれば魔法についてなど書かれていないらしく一度目を通したら必要ないらしい。

彼らがそれを欲するのはいわば知的好奇心を満たすためと言うのと、骨董的価値から欲する。

結構世に出回っているので、話のわかる監視員に調達してもらった幾つかの古い書物に様々な治療法が書かれていた。

自分は読み書きを覚え、その本を読み解きつつ、医者に教えを請い、勉強に励んだ。

おかげで今は労働者達の治療健康係の一人として魔術師に認められたので、妹共々肉体労働は免除されている。

しかし、とてつもなく忙しい。

医者は自分を含め5人しか居なく、正確な統計は出てないが、この都市ナジウムには約七万四千六百人の奴隷が収容されている。

坑道ではよく爆発事故が起こったりするがそれをたった5人でさばかなくては成らない。

おかげで妹を治療するという本懐を遂げられていない。そもそも治

療法は未だわからないのだが……

妹は体調のいい日はよく部屋を抜け出して農業区にアランカザンダツカが多く群生する場所があり、そこに散歩に出かける。心配でしようがない。

もし出かけた先で咳が出始めたらどうするのか。又、いやな話だが襲われると言う可能性もある。唯でさえ妹の散歩ルートは人気が少ないのだ。

閉じ込めてばかりも良くないと思うが、唯一の家族なのだ。心配をしてしまうのは仕方が無いだろう。

ある日患者をさばくのもひと段落を見て、妹の様子を見にいったら、どうやら例の散歩に出かけたようだった。

場所はわかっているので迎えに行くことにした。

アランカザンダツカの花畑の中央付近に妹の姿を見た。近寄ると、どうやら倒れている人を見つけたらしい。

一目見たら雷に打たれた。

なんてかわいい、いや可憐なのだろうか。

奴隷身分にしては綺麗な白い肌と、何より綺麗な黒髪だ。

自分達奴隷は基本的に赤髪か白髪。貴族、魔術師は金髪が多い。稀に青髪やらが生まれてくるようだが、黒髪は稀の稀である。

黒髪は奴隷身分にしか生まれない。そして希少価値が高いので基本的に直ぐ魔術師らに取り上げられ、恐ろしいことをされるのが常なのだが、このような場所で出会うとは。

今まで黒髪がここに居るなんて聴いたことが無かった。

やはり奴隷同士で生んで隠して育ててこられたのだろうか。

しかし、これはこんな世でも神は居ると言うことか、運命の出会いとやらが許されているのなら今この瞬間がそうだろうと思った。

普段ならこの様に重症と見える素性もわからぬ者は手が足りないので放って置くが、この子は別だ。

この子を助ければ自分は命の恩人なわけで、自然と彼女とお近づきになれよう。

手当てをすれば暫くは安静にしている必要があるわけで、うちに泊めておく口実もできよう。

また何か事情があり行く先もないのなら自分の助手としておけば労働も免除されるので恩も売れよう。

打算が働くのは仕方が無いが、兎に角この子を助けねばと思った。

担架と人を呼ぶため、妹に様子をみて待っててもらおうと言って駆ける。

よく考えたら妹一人を残すのは危険かもしれないが、幸い農業区の労働者が近くに居る。

持ち場を離れているのを巡回している監視員に見られれば罰が与えられるが、医者と一緒にならそれも免除される。

奴隷の治療をしたくない魔術師にとって自分の様な医者は便利であるから、治療行為の為と言えは何人が連れて行っても認められる。

自分の部屋まで運び、治療を施した。

腹部が綺麗に斬られている。危うく臓器が出てくる一歩手前だった。唯、とても綺麗に切れていたので、消毒と縫合をして安静にしていればくつつくだろう。

ひとつ気になるのが彼女が着ていた服と持っていた剣である。

見たことのない素材、形の服だったし、剣の形状も見ることが無い。そもそも剣など武器を持っているなんてどういうことだろう。

とり合えず一緒に持つてきておいたが……まあ意識を戻したら聞いてみるかと思案していたら、また坑道で爆発があったようだ。そちらに行く必要があるそうだ。

妹も部屋で寝ているし、心配は要らないだろう。

再び氣がついたら邊りは暗く、もう夜に成つてゐるのだらうか。周りは静寂に包まれ鳥の鳴き聲と、時折部屋の外かどこから聲がするだけだ。深夜に成つても車の走る音が絶えなかつた日本とは大違ひだ。

静かに、心地よい静けさ。ランプのオレンジ色の光がうつすらと部屋を照らす許り。此のランプはアルコールランプか何かだらうか。電球ではないやうだ。

起き上がり、<sup>あた</sup>邊りを見渡す。

視線の低さに驚いた。

前世の身長は大體170cm位はあつたが、此の身體<sup>からだ</sup>は150cm、いや其れ以下かもしれない。

首の邊りが髪<sup>せい</sup>の所爲か暖かい。然し不快では無く、寧ろ心地よい。

試しに其の場で右足を軸に一廻轉<sup>ひとまわし</sup>。今度は反對周り。

前世とは違ふ高さの視線。

奇妙な感覺に捉われつつも、髪を手ぐしで整へる。

腹に巻いてある繃帶以外何も着てをらず自分が裸である事に氣がついた。

流石に裸で歩き回るのは良くないだらう。傍らにあつた白装束を着て部屋を出た。

部屋を出ると狭い廊下の様な空間があつた。

廊下の先には少し広い空間があるやうで、其処には随分とゆがんだ木製の卓子の上に食事がおいてあるのが見える。

ふむ、さう云へばよい匂ひがする。

すると件の赤髪少女が向かひの部屋から出てきた。

さう云へば前回目を覺ましたときには彼女が傍らにゐたな。

私は屹度此の子が世話をして呉てゐたのだらうと思ひ、禮を述べようとした。

赤髪の少女は私が口を開くよりも先に

「あの、もう動けるんですか？」

と云つた。

私の身體のことを云つてゐるのか。

私の腹の治療を施して呉れたのも彼女だらうか。

「えゝ、お陰様で。私の治療をして呉れたのは君か。」

「いえ……私ではありません。」

改めて見ると若いな。

年は十二、三歳邊りだらう。

治療をして呉れたのは別の者か。とは云へ、面倒見て呉れたのは彼女だらう。

何はともあれ有難う、と禮を述べた。

すると此方に向かつてくる人影が在る。

またしても赤髪である。

實に革命的な色だが少し目に痛い。

松の木肌のやうな色の服、ローブの様なものを着た青年がやつてきた。

然し目立たないが、其の茶色い姿の所々に赤黒い血の痕がある。

「あ、兄さん」

兄さん、すると彼女の兄か。

「あれ、貴女は……まだ動かないほうがいいと思いますよ。綺麗に切れていたで直りは良いとは言え、お腹をばっさり大きく切られてましたからね。肩を貸すので部屋に戻りましょう。安静にしてください。」

兄妹共に身體の心配をして呉れる。

「いや、もう大丈夫です。其れよりも君が治療して呉れたのか。」

「ええ、そうですよ。妹が倒れている貴女を見つけてね。急いで治療所に運んだんです。」

「すると君は醫者<sup>いしや</sup>か。迷惑を御掛けしたやうで。」

「いえいえ、しかし本当に安静にしていたほうがよいですよ。」

だが實際に活動に支障は無い所まで恢復してゐる。此の場所が如何どういう場所なのかも不明である故、布團ゆえの上で暇を貪るのは私の性分からして心持の良い事ではない。

「己の體の事なので云へるが、まあ大丈夫でせう。其れにしても少しお腹が空ゐてね。何か食べないと落ち着か無ゐるので食べ物を探しに行かうかと。」

「さいですか。では立ち話もなんですし、私の部屋へ行きましょう。粥なら食べれるでしょう。」

と云つて彼の部屋で食べると云ふことに成つた。

彼と赤髪兄妹が食事を取りにいくと言ふことで、私は部屋で先に待つてゐるやうにと云はれた。

部屋を見てみると、藥草と思しき者や、鋸、縫合用の針、絲などがおいてあつた。

なるほど、醫者の部屋らしい。

机の上には幾つかの本が置いてあつた。先ほどまで讀んでゐたと思しき本をふと手にとつて讀んでみる。

アラビア語に似てゐるが見た事のない文字だ。ふむ、然し自然と讀める。此れはカイゼル髭のおかげか。

題は「外傷に於る燒灼止血しょうしつ法の有効性」と云ふものだ。

中を開くと四肢切斷などの重傷の場合に有効な止血法として云々。  
特別な技術・器具・薬品を用ゐずに行へるので危急の際でも云々。

と云ふ近代以前の内容が書かれてゐた。

大丈夫か此處は。

いつの治療法の本を読んでゐるのだらうか。

彼の趣味だらうか。

然し私には焼ゴテで止血はして貰ひ度くは無いな。

ふと机を見るとメモが置いてあつた。

妹の治療案

・カンゾウ、タイソウ、バクモンドを調合した薬を試す。

物は農業區にて確認済み、明日採取

などと走り書きがあつた。

ふむ、カンゾウ甘草、タイソウ大棗、麥門冬（バクモンドⅡバクモンドウ）のことだらうか。漢方薬でも作る積りか。

麥門冬湯と言ふ漢方薬があつたはずだ。

咳に效くと言ふ代物の筈だが、妹さんは風邪か何かか？

と考察してゐたら彼らが戻つてきた。

「そのテーブルへどうぞ。」

見ると廊下の先にみえた大層歪んだ卓子よりも幾分マシな卓子があった。

椅子にかけると——軋む音が聞こえてくるが——粥を差し出された。

然し此の粥の中身、米ではないやうだ。ぐぬ、米が食ひ度かつたがさう贅澤も言へまい。

彼らも粥のやうだ。

「では、頂きましょうか。」  
と青年が云つて食べ始める。

木で作つたスプーンで食す。

うむ、不味くない。然し美味くも無い。なんとも云へぬ味。だが腹は膨れるので今は文句はない。

「それにしても妹がアランカザンダツカの花畑の中で倒れている貴女を見つけて、ここに運んでから四日間も意識が無かつたんですよ。一体何があつたんです？」

醫者の青年が質問した。

どうしたものか。私は此の場所のことを良く知らない。抑も兄妹そろつて赤髪があるやうな場所だ。其れでゐて片方は醫者だと云ふ。下手に回答は出来ない。

此處は日本か等とも問へない。此處の常識がわからない以上、下手に喋るのはまづい。

旅の者で行き倒れた。

や

旅をしてゐたら何者かに襲はれたのだ。

等とも云へない。

旅が非常識な行動であつたらどうするのか。  
抑も此處は現代なのか。

どうも此の建物に現代科學の匂ひを感じない。  
石造りの壁に木の天井。棚等を見ても規格があつたりするわけでもなささうだ。

彼らの着る服は北歐邊りの民族衣裝の香りがする。

では邊疆の村かどこかに飛ばされたのか。

だが、何かが違ふ。

如何答へたものか。

答へやうによつては不信感を與へかねない。

頭をうんうんひねつてゐたら、

「……何か訳が……あるのでしょうか」

と赤髮少女が云ふ。

ふむ、其れもありかもしれない。

「よろしければ、聞かないでもらへないか。」

「そうですね……何か理由がありなのでしょう。何、こんな世です。逃れなくてはならん時もありましょう。」

案外うまく事は運んでゆくものだ。

屹度彼らもさう云ふことが在るのかも知れない。

「恐らく寝泊りする所も無いのではないのでしょうか？よければ患者用の部屋を一つ貸すので、使ってもらつてもかまいませんよ。」

「なんとかたじけない。有難う。」

此處までされると、せめて名前くらゐは名乗らねばなるまい。

ナナシで通るわけにはいくまい。

どうしたものか……此處は現代日本ではないやうだ。此處で日本の名前を言ふのも違和感があるだらう。

此處は先に彼らの名前を聞いてみるか。彼らの名前にあはせて此方も適当な名前を言はう。

「ところで二人の名前は……」

「あゝ、そういえばまだ名乗っていませんでしたね。自分はアルヘルワです。」

「私は……アンジュルペナです。」

青年はともかく、少女は可憐な名前だ。

ふむ、矢張り此處で日本式は違和感があるだらう。どうする。なんて名乗らうか。

目の前の彼らは日本人ではなささうだ。然し、骨髄やら肉のつき方やらが確實に違ふとも云へない。

日本人のやうで日本人ではないやうな。

おそらく同じアジア系の人が見たら彼らを日本人だと思ふだらう。然し私にはさうは見えない。

半島か大陸か。いやどうも其れらしい血の香りはしない。

彼らの名前はど此の國とも言へない。

強ひて言ふならアラビア語に近い。

私が日本人だからと云つて日本式の名前を名乗れば違和感があるわけだ。

一つ案が浮かんだ。

適当な歴史上の人物の名前から借りてこよう。

若しも此處が現代なら、何かしらの反応が見れる筈だ。  
特に何も無ければ、此處は少なくとも現代ではない、と言ふことがわかる。

では誰から貰はうか。其れほど詳しいものではなくとも皆が知つてゐる人物……。

獨逸第三帝國總統から戴かう。

彼ならば知らぬ人は少ないだらう。

然し其のまま其の名前を云つては問題があるな。

若しも此處が現代で彼らがユダヤだつたりしたら？獨逸の辺境だつたら？若しくは過去でソ連の僻地であつたら？

また、明らかに其のまゝ使つては問題が起こりさうだ。

少しもぢつて「ヒットレル」と名乗つた。

性根の腐つたファシストの豚め！と云ふ極端な共產趣味思考はないので、此れは問題ない。

響きでわかるだらうから何か反応があるだらう。

そしてもしも其れで問題があつても、發音やらつゞりが違ふ、などと云へばごまかせるだらう。

然し、特に此れと云つた反応は無い。

視線や筋肉などを見ても、變化は無い。

ヒットレルさんですか、華麗な名前ですね。などと青年に言はれる始末。

うむ、此處が現代ではないと假定しても良いかもわからない。

然し、其れだけで判斷するのは腦がない。

「さう云へば、今は西暦何年か？」

「西暦？紋章歴の間違いでは。いまは紋章歴1901年ですよ。」

紋章歴？聞いた事の無い名前だ。

まさかとは思ふが此處は前世にゐた世界ではないのか。

若しも彼らの頭がイカれてゐるか、おちよくつてゐるのかでなければ、

所謂、異世界にゐると云ふことが。

異世界に飛ばされる類の小説はいくつか讀んだことがある。

有名どころならガリバー旅行記だらう、

然しまさか來世は異世界で過ごすことに成るとは。

ならば早急に此の世界の常識を知らねば。

では先ほど讀んだ「外傷に於る焼灼止血法の有効性」と云ふ本は現行の彼らの醫療技術か。

若しも此處が中世の暗黒時代のやうなところなら、智識を得ねばやすやすと屍をさらすことに成る

此處は芝居を打つか

「あいすいません、私は長い間、両親に隠されて育てられたのです。私が倒れてゐたのも其れに關係があります。」

「そうでしたか、いや黒髪など珍しいので、屹度親御さんはあなたが連れて行かれるのを恐れていたのでしょうか。」

「なので私には常識が少し足りません。よろしければ暫く此處にお

世話に成り度いのです。勿論、タダ飯を食べるわけではありません。貴方は醫者とみえます。少しくらゐなら私にも醫療に關して嗜みがあります。助手としてお手傳ひをさせてください。」

此れでよいだらう。若しも此處が中世歐羅巴なみの醫療技術なら私の本で得た附け焼刃智識でも十分役立つ筈だ。

其れに此の天井は低いが大きな建物。其の建物を兄と妹で二部屋、私の寢てゐた部屋で三部屋、そして私に其処を使つても良いと云ふのならもう一つくらゐは部屋はあるはず。

最低でも四部屋。此の世界で醫者であると言ふのは中々有利に働くことなのだらう。

其の醫者の助手と成れば何かしらのトラブルがあつても少しくらゐの後盾と成るだらう。

「なんと、貴女は魔法を使わない治療ができるのですか。まあ奴隷区に居るのだから魔法は使えないでしょうが、それでも最低でも読み書きはできると見える。わかった。実は自分も手が足りなかったところです。貴女の事情は聞かないから、此処にいてください。」  
「自分達のことは家族だと思つて接してください。そうですね、自分事は『アル』とでよんでください。」

なんと快諾して呉れた。斷られたらどうしようかと思つてゐた。

然し、此處でまた一つ新たな情報が得られた。

「魔法」と「奴隷区」と云ふ單語が出てきた。

話からすると此處は奴隷区であると云ふことか。奴隷区と云ふからには恐らく我々は奴隷の身分にゐると云ふことか。

然し我々がよく想像する様な奴隷ではないやうだ。

かなりの自由が認められてゐると見える。でなければ何故こんな個

室が與へられるのか。

おそらく羅馬帝國のやうな奴隸、若しくは此の二人は奴隸区の診療を担当してゐる奴隸ではない人、と言ふことだらう。

そして「魔法」についてだ。

魔法と云ふ單語が平然と出てきたからには恐らく魔法なるものがまかり通る世界なのか？

奴隸區にゐるのだから魔法は使へないでせうが、と云ふことは奴隸ではない者は魔法が使へるのか？

それもどのやうな魔法なのか。

此の際魔法の存在を疑ふのは止めておき、魔法が平然と使はれる世界と考へたはうが良いだらうが、魔法にも色々あるだらう。

唯單に雷やら炎やらを起こせるのか、其れとも人の心を操つたり、死者を甦み還えらせる事が出来る魔法なのか。

不安要素は多いが取り敢へず此の世界で生きる糧を得られた事には感謝だ。

青年、もといアルは家族だと思つて接してください。とも云つた。打算なくして云つた言葉ではないだらうが、今は其れに乗つからう。

ふと、赤髪少女のアンジュルペナと目が合ふ。微笑んでやつたら恥づかしさうにしてみた。



#### 第四話　せゝらぎ

此處<sup>こゝ</sup>は夢の中であらうか。

昨夜三人で飯を食つた後、寢たのだが。

主はわからぬが聲が聞こえる。

——驚き覺えたることならむ。（驚いている事であろう）

貴様の好ましくするに良し。（貴様の好きにすると良い）

此の地にて靜かに明かし暮らしても良し。（この地にて靜かに過  
ごしても良い）

惡行の限り盡くし、此の世が灼熱地獄へと落とさんや良し。（惡  
行の限りを尽くしてこの世を灼熱地獄に落としても良い）

此處なるは國産みて忘り去なれき奇形兒也。（此處は國産みによつ  
て生まれた奇形兒）

何人も目向かれけれどらなかりき、水へ流されき忌み嫌はれし子な  
り。（誰も目を向けない水へ流された忌み嫌われし子）

貴様は國育てき。ゆゑに此處へ連れて來き。（貴様は我が國を育て  
た）

水に流されども生き永らゑ、耐へがたき苦痛の時ば生くる此の子に  
掛けそ樂なりてきるやもしられず。（水に流されても生きながらえ  
た耐えがたき苦痛の時を生きるこの子も貴様なら樂に出来るかも知  
れぬ）

此は本來、餘により解決せしめるべきことなり。（之は本來余によ  
つて解決する問題である）

ゆゑに、絶對にして呉とは言はず。（故に、絶對にして呉とは云  
わない）

我子育てゝくれし禮なるに思ひ、好ましく來世生け。　（わが子を  
育ててくれた例だと思い、隙に來世を生きよ）

此れはカイゼル髭の聲だらうか。

私は目を覺<sup>さ</sup>ます。

夢だつたのか。

そんなやんごとなきお方だつたとは思はなかつたな。

彼は私に大層なお願ひをしたかつたやうだ。

絶對にして呉とはいはぬとは、して呉れと言ふことか。

まあ、良い。好きに生きよとのたまひ給うたのだ。折角の來世だ。  
おもひきり楽しませてもらはう。

桶に入つた水で顔を洗ひ、髪を整へる。

前世との背丈の違いも一夜明ければかなり慣れるものだ。

水面に移る自らの顔を眺める。

色は乳のやうに白く美しい。

髪はみどりの黒髪にて、髪癖もなく綺麗に眞つ直ぐに降りる髪を肩  
の邊りで切りそろへ、前髪は眉のあたりで切りそろへてある。

目は一重であり目蓋の間から覗く瞳は、うるしのやうに黒き瞳であ  
る。

唇は薄い櫻色である。

笑ふと頬のふつくらとするのが可愛らしい。

うむ、今日も可愛いものであると『彼女』を譽める。

白装束を上に着てゐるのもどうかと思ひ、昨夜の食事の後着る物はないかと問うたら、松の木肌色のローブを呉れたので白装束の上に其れを着込んだ。

下着はアンのを借りた。（アンジュルペナと言ふ名前は長いので、食事中『アン』と呼んだら恥づかしさうにしつゝも特に不快に思つていなささうだつたので、これからはさう呼ぶことにする。）

軍刀はさげようと思つたが、冷靜になつて止めておいた。

昨夜の食事の後、この劍けんとよく分からないもの（南部）は貴女のだらうと返して呉れた。

奴隷が帶劍たいけんするのは禁止されてゐると言ふ話だつたが、持つてゐる理由を聞かないで呉れたのは有難かつた。

黒髪は珍しいとの事で面倒めんどうことを避けるためフードを被り、朝食代にと貰つた金を持ち部屋を出て配食所へ向かつた。

奴隷は皆輕装で、ローブなど着ないが、醫者いしやなどは簡易治療具を懷に入れておくのと、外傷を防ぐ理由等から着る事もあるらしい。

もつとも、一番の理由は醫者であると言ふ事を一目で分からせる事で監視員からあらぬ誤解を受けないやうにすること、醫者であることは奴隷達の仲でも稀少な存在らしいので、先に醫者であると言ふことを誇示して他の者とのトラブルを避けることが目的ださうだが。

色が茶色なのは治療の際に附着した血を一つ洗つてゐるのは手間な

ので目立たないやうな色といふことださうだ。

食事は金を使う。金は労働の對價<sup>たいか</sup>として支拂はれる。

但し、金の量はすくないらしい。實際にその労働の現場を見ないと其れが妥當かどうかは判別できないが。

奴隸達は皆寢泊りはこの場所と同じやうな、石材と木でできた建物ですと言ふことだ。收容棟はアルが擔當<sup>くいき</sup>してゐる區域<sup>くいき</sup>だけでも124棟ある。

一般には一部屋6人ほどで寝るさうだが、一部の者、丁度アルのやうな醫者は治療等の爲に個室が与へられる。診斷室兼手術室兼私室世言ふことだが、彼は患者が多いといふことで他にも六つほど治療用として部屋の使用を申請してゐるさうだ。

今回の私に對する厚遇も、必要以上に申請してゐるからださうである。

しかし、これだけの數、少なくともアルが擔當する區域の人口は一萬人を超えるはずだが、奴隸の主もこれだけの數の奴隸を管理するのは非常に困難なはずだ。

6人部屋とはいへ、自由な寢牀がある所を見ると、古代ローマの奴隸制度の様な感じかと考察する。

食事を貰はうと竝んでゐたらやけに視線が飛んできて痛い程であつたので早足で部屋に戻らうと足を翻して部屋へ向かふ。フード越しから見ても可愛いさがわかるのだらうか。困つたさんばかりである。

己の身であるが己の身でないやうな不思議な感覺<sup>かんかく</sup>に陥つた。ネットゲームで譬へるとネカマといふ奴の感覺であらうか。

てくてくと歩いていくと部屋の前にアンがゐたのでアルを交へて三

人で食はうと言ふ事になつた。

窓からさしこむ太陽の光が？器でできたコップの中に入つた水を照らす。

昨夜は薄暗い中であつたので良くわからなかつたが、アルは赤い髪  
の短髪で眉毛は中々に濃い。

肌の色は江戸茶色である。

昭和の日本男児を思はせる。

アンの背丈は150cmほどだらう。

瞳に彼女の猩々緋色の髪が映る。

髪は腰ほどの長さにして、後ろで三つ編みで一つに束ねてゐる。

若干、髪の癖がありウエ、ブがかかつてゐる。

顔は西洋人らしい深さは無く、かと云つて亞細亞人らしい平坦さもなく、

だがどこか日本人らしさもあり、

笑ふと口元に現れる小さな皺が可愛らしい。

彼女の瞳は赤色、紅色と云つて良い。

小さな唇は薄紅梅色である。

朝食で貰つたのが黒パンであつた。

黒パンは硬くて不味ひ。

水につけてふやかしてから食ふのである。

米が食ひたくてしやうがない等と思ひつゝ顎の運動をする。

黒パンを食つてゐたら、アンが如何してこのパンは3オウラ（この  
國の通貨らしい）もするのかとつぶやいたので、カールマルクス著  
「資本論」から使用価値と交換価値とを、説明してやつたら、理解  
したのかどうかは知らぬが何やら納得した様子であつた。

十二、三歳の少女に理解できたのかは不明である。

おかずの代はりにとアルにこの街について簡単に説明して貰ったが、目の前のアンの顔ばかり見つめてゐたから彼の話は右から耳に入つて左の耳から抜けた。

アルに聴<sup>き</sup>いてゐるかと思はれたので聴いてゐなかつたと云つたら困つた顔をしてもう一度説明してくれたが、話の途中にふとアンの方を見ると、何やらブスーと頬を膨らませてゐたのでしてゐたので、女子は笑顔が一番であるので笑顔のはうが素敵だと云つてやつた。

なんだか妹が出来たやうである。

どうせなら私の理想の女の子になつてもらひたいものである。

光源氏に許されて私に許されない道理はあるものか。

ついでに言葉は言ノ葉と言つては自らの心を寫すんだ、的なことを話してやつたら、これまた感心した様子で、どこでそんな智識を得るのかと聞いてきたので、本を読むことだと云つてやつた。

其の後にアルの話をせがんだら、彼は落ち込んでゐた。

朝食も食ひ終はつた所でアルが、今日は酷い發熱をしてゐる者が居て、其の子の診察等に行くので着いて來て欲しいとの事であつたので、もちろん快諾した。

アルの指示で鋸やら針、藥草やらアルコールやらを鞆へ詰め込んでゆく。

どのやうな醫學を持つてゐるのか、高を括つて醫學の嗜みがあるとは言つたつたものゝ、近代並みの技術であつたならどうするか等と思案してゐたが、杞憂だつたやうだ。

道具やらから、ルネサンス期のヨーロッパ及びイスラム圏が少し入

つた並みの醫療技術であることが伺へる。  
これならば私でも何とかかなりさうだと安堵する。

さうしてアルと共に行くことになったのだが、アンは留守番らしく、不満さうにしてゐた。

アル曰く、呼吸に關する病で寝かせておくださうだ。さういへばそこまで酷くは無いが咳をしてゐた氣がする。後で診てやるかと思つた。

外に出てみると、太陽がまぶしい。

ずっと部屋で寝てゐた譯であるから、目が明るさに慣れるまで少し掛かつた。

目が慣れてくると、建物が視界に入つた。

壁を石材で造り、傾斜がついた天井は木できてゐる。一定の間隔で乾燥させた糞と糞ふんちわらを混ぜ合はせたのを塗られてゐる所がある。

30メートルほどで長い一階建。

建物の脇には横約30センチ幅に石材を敷き詰めた水道と思しき物が掘られてをり、遠くのはうまで水が流れてゐる。それらは汚水のやうだ。

なるほど、公衆衛生には氣を使つてゐるやうだ。

カサブランカが水道に沿つて植ゑられてゐる。

私が花を見てゐたら、

「綺麗で良い匂いの花でしょう？タタラアルバイダという花だね。汚水道ができてから匂いがくさいって言うんで、私らが良い匂いの花を植えたのよ。」

と見知らぬ白髪女が話しかけてきた。

一體誰だらうと思ひ、アルに聞くに、農業区のうぎょうくの労働者どれいの「ゼア二」

と云ふさうだ。見た目は二十歳そこそこのグラマアな姉ちゃんである。

「あなた、アルのところに運ばれた黒髪さんでしょう？随分酷い目にあつたんだね、男が信じれなくなるかもしれないけど、見たところアルは大丈夫そうね。」

と餘分な同情を受け苦笑しつつも何故私の事を知つてゐるのか聞いた。

「そりゃ、担架でアルのところに血を流しながら運ばれてく女の子がいて、さらには黒髪の別嬪さんっていうんで少なくともこの区はみんな知ってるよ。」

これはフードを被る意味はなささうである。黒髪は珍しいさうなのだからもう少し隠匿して運んでもらひたかつたものだ。

それでグラマア姉ちゃんとアルを交へて、これからどうするのかと云ふ話を少しした後、時間だと云ふことで我々の歩む先と反対方向へ歩いていった。

所で農業区とは何かとアルに問うたら、先ほどの食事の説明しただやないかと云はれたが聽いてゐないものは聽いてゐないのである。私が悪いのだが。

聽くに、

「この街は魔術師達の住む市街と我々労働者<sup>どれい</sup>が住んで働く奴隷区に分けられます。

市街についてはまた今度お話ししよう。

奴隷区は様々な区に分かれています。

我々の住む居住区が五区、

鉄や銅や魔法石を採掘、製鉄し刀剣類や道具に加工するのが鍛冶区、彫金もここで行われます、

農作物や薬草、木材などの生産から酪農、牧畜などを行う農業区、土器、？器、陶器などの生産をする工芸区、布などの生産もここで

行われます、

その他区を設けるまでも無い中小規模の物を生産をする総合区に分かれていて、それら奴隷区は長大な城壁で囲まれています。出入り口は北門と南門と西門のみで、それらは生産したものを運び出したり、監視員が巡回にでたり、新たな奴隷が入ってくるとき以外は開かれません。

ちなみに北門は市街と直通で一番警備が厳しいです。

ただ、鍛冶区の一部と農業区はとても広大なので、城壁でカバーしきれませんが、街の外には追いはぎやらがウロウロしてるので、運よく脱出してもすぐに殺されます。

なので最近では脱出を企てる人は少ないです。」

などで長い説明をされたので農業区のところだけ摘んで覚えておく。

では此處は居住区と云ふことである。

道は舗装はされてをらず、歩きたびに土ぼこりが立つ。

歩幅が前世よりも若干小さいので歩くのに一寸ばかり苦勞する。

フードは要らないと思ひ、被らずに歩いてゐたら先々で、おお黒髪だの、可愛いだの、ちつちやひ子だなのと云はれて、視線もいやなので收容棟（勞働者たちは宿舎とよぶさうだ）を4つ行つた所で被つてやつた。可愛いのも困りものである。ふとアルが残念さうにした。

一寸間を空けたところでアルが、君は本當に可憐だからそのうち云ひ寄つてくる者があるかもと云ふので、私は君しか見てゐないよと冗談を云つてやつたら、それからもごもごして何も云はなくなつた。春いやつめ。

そんな笑談を言つてゐたら、目的地に着いたさうで、148號棟の

前とまる。

中に入ると静かなものだ。皆出拂つてゐるやうだ。

牀の軋む音とブーツのヒールが鳴らす足音とを聞きながら歩くと、  
件の病人の部屋に着いた。

アルがノックをすると誰何すいかが歸つてきた。若い娘の聲であつた。  
あれこれで来た何某なにがしだと答へるとドアが空いて中に入った。  
すると白髪しろがみの強面の髭おやぢがゐた。儂げな少女を期待してゐたら、  
かう云ふ目に嬉しくないものが飛び込んできたので落膽らくたんする。

お嬢ちゃんが例の黒髪さんかなどと自己紹介もそこそこに髭の話を  
聞く。

話に聞けば髭の娘さんが三夜ほど熱が下がらないさうだ。  
その強面に似合はず小さくなつて泣きさうにしてゐる所を見ると、  
よほど娘が心配らしい。今日は労働もすつばかり、代はりに息子に  
自分の分までやらせるさうだ。

今更ながらベッドのはうを見ると長い白髪が汗で肌にくつついてゐ  
る少女がゐた。中々に整つた顔立ちをしてゐる。

アンもさうだが、この世界の病弱系少女は皆可憐であるな。

白髪少女は此方に首をむけ、目を細めて云つた。

「あゝ、アルヘルワさん…… よろしく願ひします。」  
と挨拶した。

一寸のうち、私に氣がついたのか新しいお醫者様かと聞いてくるの  
でアルの助手であると答へた。

アルは、では失禮しますと首に手を當て脈をみた。

其の後、白髪少女の心臓の鼓動を聞かためか、服をはだけさせ、胸

に耳を當てようとした。

にしても此の子は私の前世と同年代ほどに見える。

同年代の女の子の裸を見るのは初めてであるので自然と緊張して背筋が伸びる。

自分の體も女の子であるが言ふならば其れはネカマのやうな感覺であり、本物の女の子とは云へない。

ついぞ女子を抱くことなく黄泉の國へ行つた身としては何やらコンブスのやうな氣持ち。

此のままでは刺戟が強いと、アルに一寸待てと言つて木の筒を其の邊で調達して此れで聽いたはうが正確だと云つて渡した。

當初、不思議さうな顔をしたアルと髭と白髪少女であるが、直ぐにアルが此れはすごいと云つて、一同驚歎する。髭も自ら試してみて驚く。

君は何故こんなことを思ひつuitたのかと云つてゐたので、なに、科學（化學）のおかげだと云つておいた。

アルは熱を冷ますために氷水の入つた袋を額に乗せておいたらよいとしたが、念の爲私からも少し診させてもらはう。

「ところで嬢さんの名前は何であつたか。」と問うたら

「サウサンって言います。」との事だつた。

「良い綺麗な名前だね。では、サウサンさん……？」

サン、さんと來て呼びづらいなと思つてゐたら、

「どうか……サウサンと呼びください」

「エえと、では、サウサン。熱のほかになにか變はつた事は無いだらうか。さう、例へば頭痛や間接の痛みや黄色い液を吐いたり、腹痛がする、なんて事はあるだらうか。」

「えつと……お腹が痛いのとさつき……は、吐いちゃいましたです。」

「なるほど、少しお腹を觸診するかと思ひ、其の旨をアルに話した。アルは承諾したが、觸つて痛がつた場合にあの髭が騒ぐといかんの髭に先にあれこれかう云ふことをしますと傳へた。」

みぞおち邊りから下腹部を押してゆくと、右下の腹部を押した際に強く痛がつた。

附け焼刃智識だが此れは盲腸ではないか？

其の旨を話し合ふため、いったんアルと廊下に出た。髭が心配さうにつぶらな瞳で此方を上目遣ひで見てゐたが、大丈夫ですよとだけ言つて出てきた。

「少し自信が無いのだが、彼女は盲腸―蟲垂炎かも知れん」

「それは何ですか？」

「む、えと説明するとだな……」

私は教科書どほりの事を説明した。然しよくもまあそんなスラスラと出て来るもんだと自分でも感心した。

「むむ、腹を開くんですか……」

「うむ、澁る理由はわかる。切開時の痛みと、周囲の衛生が保てないから開腹時の菌の侵入が心配なのだらう。」

「何か手が……？」

「ない。痛みは少し心当たりがあるが、衛生に就いては魔法でも使つて周りを覆ふ、殺菌のできた空間が作ればよいのだが」

私は死んだ時分はまだ高校生である。B J先生のやうな道具も無ければ、流石にそんな智識も経験も無い。あるのは讀んだ本の中のことだけである。

「体内に入った金属片やらを取り除く事はした事があるか。」

「あります。此処じゃしょっちゅうですからね。」

「其のときは切開などはどうしてるか。」

「急を要するので痛みだとか細菌だとかはお構いなしですね。酒を飲ませながら切り口に強い酒をぶっ掛けてやりながらやるしかないですね。」

「流石にあの子に其れは酷かな？」

「ま、まあ、そう思います。」

「ところで私の腹を縫ったときはどうしたんだい？」

「ぐぬ、え、えつとだね……自分の、だ」

「聞かないでよくよ。まあ殺菌はしやうがない。酒をぶっ掛けよう。」

「痛みはどうすんです？まさか何もせずには斬ったら悶絶しますよ。」

「其れなんだが……なんて云ふか知らないが、アヘンだとかタイマだとかつて聞いた事あるか。」

「アヘン？来たこと無いですね。」

「どうやら言葉は通じて、一寸した名称等は通じないやうだ。カサブランカ」タタラアルバイダの様に名前はうまく傳はらないやうだ。

ふと、私は繪を描いてみようと思った。

羊皮紙とペン、インクを鞆の中に入れてきてゐたのでスケッチを描いて見せた。

「うーん、見たことあるような無いような……農業区の連中に聞いてみればわかるかもしれせん。ちよいと朝出会ったゼア二に聞いてみましょう。」

と云ふことで今日は一旦引き上げて、農業区やらを回る乍らゼア二を訪ねるついでに歩きがてら話さうと云ふことに成った。歸り間際に髭が土下坐をしてきてアルが大層困つてゐた。今更だが髭の名前はサシユワルと云ふ事を思ひ出した。

宿舎（收容棟）を出たとき、水のせせらぎの音が聞こえた。  
目で見ると汚水其ののだが、目を瞑ると小川のやうな氣がして、  
心が安らぐ。

意図したのかは分からないが夜寝るときに落ち着くのは此れのおか  
げか。

目を瞑り、小川のせせらぎの音が體に滲透する。

祖國日本の原風景がまぶたに浮かぶ。

ふと懐かしく思ふ。

あのころには氣がつかなくつた音に今氣づく。

まだほんの僅かな時しか經つてゐないのに、何故だか何年か經つて  
ゐるやうな氣がした。

少し先に歩んでゐたアルが私が水道をみてボーツとしてゐるのに氣  
がつき、歩みを止めて此方に振り向く。

私の事を呼んでゐた。

我にかへり、謝辭を述べて三步後ろからついて行つてやつた。

元、男である私が一番望んでゐたシチエイションである。出来れば  
前世である子にかうして貰ひ度かつた。

なので自分がさう振舞つて、少しでも満足感を得る。少し楽しい。

アルを覗くと、其の微妙な距離感の所爲かアルは頬を染めてゐた。

せせらぎや 百合の匂ひに 誘われて

## 第五話　さんぼ

何故わたしたちはこんなに困窮しなくてはならないのだろう。

同じ人間であるはずなのに、魔法が使えると云うだけで暖かい家で寝ているだけで腹いっぱいになれるのだろう。

魔法が使えないわたし達は過酷な労働をし、寒い日も凍えて暮らし、食えるものはパン一つ。

もちろん金はもらえる。だが、やっと食っていきけるだけの金しかない。その日の食い物を買ったらそれでおしまい。

食い物を作っている人達も今が精一杯で、食い物と引き換えに貰った金も次の食料を確保するために無くなってしまふと云う。

わたし達が作った芋やムギはどこに行ったのだろう。

わたしは魔術師が憎い。彼らもここで働いてみると良い。

巡回にくる監視の魔術師は働いてない者を見つけるとひどいことをする。

何のために金を払っているかと怒鳴る。

何故わたし達は働けど働けどその日暮らしなのか。

わたしは其れを解明したい。

そして魔術師たちを踏みつけたい、わたし達の分まで働かせたい。

そんなことを、やんわりとヒットレルさんに話してみた。

ヒットレルさんは不思議な人だ。

見た目は私と同じ女の子なのに何故だか兄の様な、いや何とも云えぬ物がある。

それでいて博識だ。

今朝の食事のときに「どうしてこの黒パンは3オウラもするんだろう」といったら、

「そもそも物には値段は無い。例へばこのパンも元々は値段は無い。なぜ値段がつくかといふと、それは人の手、労働が加はったからで、そして市場へ出されたからだ。市場に出されればそれは何でも価値、値段がつく。さういへば、みんなが使つてゐるであらう金には元來価値などない。金を食へば腹が膨れるのかといふことだ。

人間生活にとつて一つの物が有用であるとき、その物は使用価値になる。使用価値といふのは役に立つもの、つまりこのパンを食へば空腹をしのげると云ふ工合のこと。

使用価値は消費されてこそ實現されるといふ事。パンは食へば無くなるからね。その使用価値は富の社會的形態がどうであれ、交換価値とはイコールの關係なんだ。

交換価値といふのは、少しばかり難しいかな。例へば君が服を作つて、このパンと交換したとしよう。服が欲しかつた者はそれが満たされるし、君もパンが欲しかつたのが満たされるだらう。

何故、違ふ物なのに、交換できるんだらうね。そして今は何故、パンと金オウラは交換できるんだらうね。

……私はこの世のことをあまり知らぬ。だが、君の話を聞くに、君達のやうな状況を搾取されてゐると云ふ」

そう云つた上でわたしの事を褒めてくれた。

こういうことに気づく人は凄い人なんだと云つた。そういう者がいるからこそ、万人が幸せな国が作られると云つた。

話の途中で兄が割つて入つたのでこの話は又今度ということになつ

た。

ちよつとふくれていたら、ヒットレルさんが笑顔のほうがいいと云った。

そして言葉について教えてくれた。

まだ難しく、理解はできないが、どうしてヒットレルさんはそんな事が理解できるのだらう。どこで知ったのだらう。

そんなに物知りなのに、常識的なことは全く知らないみたいだ。

金の単位も昨夜初めて知ったらしい。

魔法石を粉碎した粉を紙に振りかけて、それに魔法を掛けたものがこの国の通貨で、その通貨をオウラと云う。と教えてあげた。

大体鍛冶区の奴隷が貰える1日の給金が12オウラで、飯が一食5オウラ程度であると教えたら、驚嘆すると共に、納得した様子だった。

ヒットレルさんと話していると面白い。

ヒットレルさんは今は兄と共に出かけている。

今夜は何を話そうか。

その交換価値について聞いてみたいな。

突然ノックがした。

誰何をした。

「僕だ。ハリックス・サラノフだよ。」

なんだ、ナジウム領主様か。

この国の王の息子でナジウム領主、つまりここの魔術師達の親玉である。わたしよりも3歳年上。

奴は事あるごとにわたしの部屋にお忍びで来る。兄がいないときにわたしは魔術師やらが嫌いなので相手にしない。何時も、僕は奴隷と魔術師の関係を嘆いてるだの、わたしを城で働かせてやるだの云ってくる。何が「嘆いている」か。ならこの現状は何故続くのか。そう云ってやると黙って帰る。

今日は何用か。

開けてくれとせがんできた。しかしわたしはいつも開けない。するといつもドアの前で語り始める。

奴隷に対する給金の改善を官吏たちに相談したという話を聞かされた。

しかしこのパターンの時はいつも、

「だが聞き入れてくれなかった。しかし、いつか僕が変えてやる。」

という話。今日もこの通り。

ここの領主ならなんとかしたらどうなんだ。魔術師様の泣き言なんか聞きたくない。

「……あなたも結局、わたし達を搾取して……お腹いっぱい食べて、暖かい部屋で寝ているのでしょうか？……理想じゃわたしたちは食べていけないの。あなたたちの所為でね。」

「さ、搾取？えと、どういう意味の言葉だい？」

わたしもまだ良く理解していなかった。ヒットレルさんの言葉をつ

い使ってしまった。失態だった。

暫く黙っていたら、足音がして、しだいに遠のいていった。

ドアを開けてみるとドアの前にアランカザンダツカの花が置いてあった。

その花を拾い上げて花瓶に入れてベットに潜り込んだ。

わたしは自らを戒めた。

こんなことでは駄目だ。

彼らは力でねじ伏せてくる。

力の差は圧倒的だ。

だが口は平等だ。

口と頭は彼らと変わらない。

だから口ですら負けていては何も成し得ない。

わたしはもつと学ばなくてはならない。

この世界の仕組みを学ばなくてはならない。

そしてこの現状を打倒する術を見つけなくてはならない。

窓の向うから聞こえてくる屈強な男達はなにもできない。

兄もなにもできない。

ならば、わたしがやるしかない。

もつと勉強しないといけないな。

ヒットレルさんと話をもつとしたい。

兄では駄目だ。話をしてもらってこない。

今夜はヒットレルさんと話をして夜を明かそう。

アルの後ろに尾いて居住區を歩いてゆく。

彼は良い奴だ。或いは無鐵砲な奴だ。

得體の知れない奴に醫者の仕事をさせて、そいつを更に内に泊めてしまはうなんて考へるからだ。

現代日本人でもさう云ふ藝當は中々出来るものぢやない。

道中に、兩親はどうしたかと問うたら死んだと歸つてきたので、さうか、とだけ云つておいた。

あまりこの手の話に首を突つ込むのは心持良く思はないだらう。

彼の家族は妹のアンのみであると云ふわけで、なるほど大層大事に箱に入れてゐるわけである。

太陽は眞上を過ぎた頃である。

背負子を背負つて走り回る子供達にぶつかりさうになりながら、すいすいと避けて歩いていった。

ところでこの子供達、ボロ着を羽織り、瘦せてゐたりして營養状態が宜しくないやうに見えるのには同情した。

かと云つて私も文無しであり、居候までさせて貰ひおまけにただ飯

を貪つてゐる立場であるので何か出来るわけでもなく同情するだけの偽善の時を過ごした。

暫く行つたところで何やら服を賣る露店のやうなのをみつけた。ここで商賣していいのかと聞いたら、労働者内での物のやり取りは居住区内でなら認められてゐるとの事だつた。

木綿の様な材質の服だが、質が悪いなと云つたら、これは出荷できなかったできそこなひで、我々はここからしか物を得られないとのことだつた。

幾らなのかと問うたら6オウラださうだ。オウラはこの國の通貨ださうだ。

ちなみに他の國ではどうなのかと問うたら、それぞれの國で違ふらしい。

他國との貿易の際には、昔ながらの金貨、銀貨、銅貨を使ふらしい。

變動するらしいが、だいたい銅貨一枚は十萬オウラに相當して、銅貨100枚で銀貨一枚、銀貨1000枚で金貨一枚ださうだ。

一文も無い私にとつては無縁の話である。

前世に有つても裕福な方ではなかつたが、腹一杯に飯を食ふのには困らなかつた。

だがここでは腹八分目まで食へるかどうかわからぬと云ふさうである。

銅貨だ金貨だなどと喚くのはブルジョアジーのみでよろしい。

いづれ労働者を搾取した對價として共產革命が起こつて私有財産は沒收されるのだ。

暫く歩くと廣場があつた。此處は全ての區の中央に位置する場所

らしい。

廣場の真ん中には杖と劍を持ち甲冑を着込んだ偉さうな人の銅像が立つてゐた。大方戦争の英雄だとか國王とかだらう。

見上げるとかなり大きい。10メートルくらゐあるのではないかと思ひ、一體どれくらゐの高さなのかとアルに尋ねた。

「9メートルちよつとですね」

と返つてきたので、ここは私の居た世界とは違ふのにメートル法なのか？と不思議に思つてメートルとは何かと尋ねた。

「メートルの前にセンチがあつて、1センチは私の小指の爪ほどです。そのセンチが100になったら1メートルと数えます。」

メートル法は各国共通なのかと問うた。

「国によつて様々です。統一しようとしたこともあつたらしいですが、各々の国が自国の単位を推すのでまとまていません。」

「ちなみにこの像はこの国、『ブラゴニーエ帝国』皇帝『ニーカ・サラノフ』の像です」

なるほどメートルは前の世界とそれほど變はらない長さであるので助かつた。

それにしてもこの國は「ブラゴニーエ」と云ふのか。王の名前が「ニーカ・サラノフ」とは、名前の同じメートルやら、この世界ができそこなひの子とはよく云つたものだ。

その名前を聞いて、私がこの世界でやるべきことが分かつたやうな氣がした。

だが、今はまだ早い。きつかけが必要だ等と思案しつつ、アルと喋つてゐたら農業區へついた。

結構廣く、東を見るとなだらかな平原の様な土地で南を見ると森、山があつた。

この土地は比較的寒冷で青森縣のやうな寒さであつた。

森には毛皮向きの動物がうろつき、川には魚が群れを成してゐる。

所々で牛や羊などを放牧してゐる様が見える。

栽培してゐるのは小麦、芋だらうか。田畑も一面に廣がり、見えるだけで三里先まで廣がつてゐる。

人々がせわしなく働いてをり、コルボーズ集團農場を髣髴とさせる。

川沿ひに歩いていくと見事な引水、治水工事の後が見える。

水田のそばには彼岸花アラシカザンタツカが咲いてゐた。

リヤカーの様な物を引いて行く人達に、君があゝの時の黒髪ちゃんか、など云はれるのでそこに挨拶しつつ、暫く歩いていくと林道があり、あなたはあの邊で倒れてゐたんですよと指差された先には、一寸した空間があり、そのなかに彼岸花アラシカザンタツカの花畑が見える。ここは元は田であつたが、立地が悪いので使はず放置してゐたら斯様になつたと云ふ。

林道を歩いていくと綿の栽培をしてゐる區劃に出た。

ここらは人通りが少ないやうだ。

地面がぬかるんでおり、穿いてゐるブーツが一寸沈み込んで足跡ができる。

そこに件のグラマア姉ちゃんことゼア二が居た。

あれこれかう云ふ植物を探してゐると云つたら案内するから着いて来いと云ふことで着いて行つたら、少し乾燥した地面に見事にアヘンが咲いてゐた。

彼らは「ダスモニ」と呼ぶさうだが、目立つ花だ程度の扱ひだった。私はこの植物の藥學的效果をアルにかうだ あゝだと説明した。それほど詳しくは無かつたが、鎮痛劑、麻醉藥として此れほど効果的なものはないと云つて收穫法を紹介した。

「こんな凄い花だったとは思わなかつたよ」とゼアニ

「少しだけなら鎮痛、催眠、消化促進、咳止め、腹部疾患の治癒等に効果がある。但し多量に服用すると昏睡状態になる恐れがある。アルなら藥に就いての心得はあるから大丈夫だらうが」

と現代人の知る苦い歴史もあるので義務として一つ忠告して置く。草に關はつた所爲で戦争などやらかすなど莫迦らしいことである。

何はともあれ、これは新たに栽培すべきだと一同一致。

しかしこれは内密に栽培したいとお願ひをした。

理由を知りたがつたので、件の魔術師の話をだした。

しかし魔術師は怪我や病氣も魔法で治療もするし、水の淨化もできるし、火も起こせるし。なんでもできるのでそんな草など見つけても何も氣にしないから大丈夫だらうなどと云はれたが、私はどうしても栽培してゐることは内密にしたい。

「ダスモニ」の發見は大きい。

この草が爲にブルジョアジー達はこぞつてしのぎを削るのであらうから、巻き添へを喰らふ労働者が可哀相である。

そもそも彼等ももう少し汗を流してはどうだらうかと思ふ。

他にも思ふところはあるが、兎に角この草の栽培は内密にしておきたい。

話は、ゼアニが責任を持つて隠匿して栽培をし、薬劑としてはアルが新たな調合法の結果かう云ふ薬劑ができた。と云ふことにすると云ふことになった。

ゼアニの瞳を見つめて力説してやつたら頬を染めて頷いてくれた。矢張り女子でも可愛い娘の視線には敵わないと云ふことだ。己の美少女ぶりを譽める。

それにしても話を聞くに魔法とやらは随分と便利な代物のやうだ。そんな事が出来るならカイゼル髭に魔法を使はせて呉れと頼んでも良かったかも知れない。

そんなこんなで部屋へ歸つてきた時にはもう夕暮れであつた。

もうこんな刻限か。体内時計によると、どうやら一日は二十四時間であらうとの事だつたので少し安堵する。

同じ腹の子であるので、さう云ふもんなのだらう。

戻ると我々を待つてゐたのだらうか、何人かの人が部屋の前に居た。

アンがその人達と會話してゐたので、彼女に唯今と云ひつゝこの方々は何だと問うたら、どうやらうちにきた患者らしい。

なるほど腕がパツクリ切れて出血してる者やら、熱でも出たかつらさうにしてゐる者やらがある。

アルと共に彼らの治療をしてゐたら、もう日は沈んでゐた。

夜空を見上げたら、面妖なことにお月様が一つと、月の回りに土

星の輪のやうなのがある。

面白い月だなどと思つてゐたら、もう飯ださうだ。

さう云へば私は金を持つてゐないぞと思ひ、その旨をアルに傳へたところ彼が私の分まで食はしてくれるさうだ。

かなり働いて呉れて、凄く助かつてゐる、そもそも自分一人でやつていくのは無理であつた等と云はれたので、彼の耳元で有難うと云つておいた。

そもそも3人ほどは養へる給金は貰つてゐるので構はない等と云ふことを云つてゐたが、それがつ回つてゐないのか、カミ過ぎであつた。

本當に純眞で良い奴だ。

アルは食事を取つてくると云つて部屋を出て行つたので、アンと話さうと、さて何の話題を振らうかなどと考へる前に向ふから口を開いた。

「あの、わたしたちが搾取されている、と云うことについて教えてください、  
ください」  
と云つた。

見た目は十二、三歳ほどなのに随分と難しい事を聞くものだ。  
私が其れを理解したのは高校生の時分であると云ふのに。

だが、其れを教へて呉れと云ふのだ。

今朝も話をしたが、難しすぎて興味がないのだらうと思つてゐた私は、そんなことを口走つた事などさして記憶に無かつたのだが、若しかしたら彼女はこの國を顛覆させられる器なのかもしれないなと思つた。

なら誰が斷れようか。

この國は封建社會であり、國王の權力がそこそ強く、領主、貴族（所謂魔術師）達は商賣熱心な、トンデモ社會である。そんな社會に不満や疑問を浮かべる者もゐるだらうが、今、目の前の赤髪三つ編み少女のアンジュルペナがさうだとは。

アンは妹のやうだ。なら理想の女子をなこに育てたくなるのは當然。

私はアンに凡てを教へてあげようと思つたのは、言葉を交はしてから、ほんの一日しか掛からなかつた。

「搾取されてゐる。と云ふ話をする前に、労働に就いて語らないといけないね。搾取に就いての話はまだまだずつと先だね。つまらないかも知れないが良いのかい。」

アンは強く肯ひた。

「えと、労働の前に交換價值に就いて續きを話さなければならぬか。今朝は何處まで話したか覚えてゐるか。」

「違ふ物なのに、價值が違ふ物と交換できるか、と云ふ所までですね。」

「さうだつたか。思ひ出したよ。」

「鐵、パン、小麦……さう云ふ商品は凡て使用價值と云へる。使用價值だからこそ、交換價值になる。」

例へば……と云ひ掛けたところでアルが食事を持つて戻つてきた。

アンは苛立ちの顔を見せたが、私はいい匂ひにつられて特段氣になかつた。

今日は芋を入れたスープであるやうだ。

味は香辛料が入つてゐないので述べるまでも無いが、食つてゐると云ふ感覚が嬉しいと思つた。

なぜなら、此處最近、まったく食欲が無く、そして腹が減ることがなかつたのだ。

理由を考へたら當然で、私はカイゼル髭に「不老」にして呉れと云つたのだつた。

屹度それに關聯して、腹が空かないやうになつたのだらう。

飢ゑる事は無くなつたが、食の楽しみが無くなると云ふのは悲しいことだ。

だから、食事をする機會が得られるのは嬉しいことだと思つた。

食事をしながら、この國の情勢を教へてもらつた。

今いる街、「ナジウム」は「ブラゴニーエ帝國」の首都「ウエルカ」から南西に下つて、ブラゴニーエの東と西の丁度中央附近にある丘陵地帯からウエルカ方面へ東に流れてくるブラヴ川沿ひ900キロの地點にあるらしい。

この國の、東から西への總距離は8000キロにも及ぶさうだ。ロシア邊りを想像すると理解できた。

その他諸々、述べるまでもない事を話してゐたら、一同食ひ終はつた。

ところで風呂に入りたい。

老化しないので新陳代謝は無いと思はれるが、一日の終りは風呂に入らなければ落ち着かないとは日本人の性質か。

昨夜は體を拭ひただけである。

それを話したら、大衆浴場、個人風呂は魔術師だけのもので、我々  
は入れないとの事だ。

小さいので良いから風呂に入りたいのだが、この様子では無理なの  
か。暫し落ち込む。

仕方が無いので自分の部屋で體を拭ひて我慢することにする。

體を拭き、部屋を出たら、アンが話がしたいので彼女の部屋へ着て  
くれと云ふさうだ。

だが、アルがその前に私と話したいことがあると云ふので、どうし  
たものかと思つてゐたら、アンは後でいいとの事だったので、謝辭  
を述べつつ、アルの部屋へ行つた。

アルの話は、例の白髪少女サウサンに就いてだつた。

何日後に手術を行ふかと云ふ話だつたので、ダスモニを收穫し、藥  
劑へ加工しなくてはならないので、其れができしだいと云ふことになつた。

手術に關しては、私にやつて欲しいとの事だつたが、アルの方が經  
験が上で私は經驗がとても少ない等と云つて彼にやつてもらふこと  
にした。

そもそも手術などやつたことが無いので、下手に私が切るより、經  
験者に任せたはうが得策だらう。自分の腹は二回斬つたが。

しかし、改めて、盲腸である自信が無いと云ふ事と、衛生が悪いの  
で破傷風になる可能性が高いと云ふ旨を話したが、經驗からこのま  
ま置いておいても死ぬであらうし、髭も承知だらうと云つてゐた。  
何もせずに死なせるよりは、手を盡くしたいとの事ださうだ。醫者

の鑑である。中世ヨーロッパももう少し斯う云ふ醫者が多ければあんな評價は受けなかつたのかもしれないと思つてみると、アンが部屋に来てくれとせがんだので、アルとはどうせ明日また一緒に仕事をするのだからと云ふことで、おやすみとだけ云つておいてアルに手を引つ張られるまゝ、彼女の部屋へ行つた。

部屋に入つたら、よい香りがした。

所々に花が飾つてある。

女の子らしい可愛い部屋だなど見てゐたら、ベットの横の棚には「軍事要覽」やら「神學」やら「魔法圖鑑」やら「戦争と金」やら「奴隸を用ゐた生産のすゝめ」等と云ふ題の本が置いてあり、なるほど彼女の熱意の程が伺へた。

豫想してゐた通り、晩飯前の話の續きをとせがまれた。

その前に、羊皮紙とペンを持つてきてもらひ、受け取ると同時に、何故そんなに知りたいのかと聞いたら、

私たちが掛けてゐる時の話と共に、両親が死んだ事やらを泣きながら話すので、その邊からはなんと云つてゐるのか聞き取れなかつたが、

最後にアンは、魔術師と奴隸、富む者と貧しい者がある世界をひつくり返したいと云つた。

私は十分だと云つて抱きしめてやつて、今夜は月が綺麗だと云つて暫く月と一緒に眺めた。

小川の流れる音と蟲の鳴き聲を聞いてゐた。

ふと私の胸の中で顔を上げて私の目を見つめてきたので、少し恥づ

かしかつたが見つめ返してやつた。

——たとへば人間の労働があらゆる富の源泉であり、資本家——つまり云ふところの魔術師は、労働力を買い入れて労働者を働かせ、新たな価値の附加された商品を販賣することによつて利益をあげ、資本を吸収する。

資本家の際限の無い、競争は生産を破綻させ、労働者は生活が困窮する。

他人との團結の仕方を學び、組織的な行動ができるやうになると、やがて革命を起こして、貴族重商主義、奴隸經濟主義を顛覆させる。

——私がこの世界に来て成し得る事は唯一つ。

階級の打倒である。

貴族主義者も労働者も、階級という概念があるからいけないのである。

——一見するとこの世界は平和そのものである。

搾取され貧しい人々もゐるが何とかやつてゐる。

私が共産主義の思想の石ころを投げ込んだらどうなるか。

私が前衛黨の旗手となつたらどうなるか。

人々を啓蒙し煽動したらどうなるか。

だが、しかし、大義の爲ならばそんな物は知らぬ。

マルクスの云ふ所の共産主義による革命ではない。

だがこの世界においてはそんなことなど氣にしてはゐられぬ。

私が割腹し、この世界に導かれた理由。

前世においては共産主義の實驗は失敗に終はつた。  
だが、この世界では如何だらうか。

人類社會の最終的な理想は共産主義社會であると確信してゐる。

もはや私に祖國なく、想ひ人に會ふ事など叶はぬ夢。

——革命を成功に導くには、己が命を惜しんでゐては成功などせず。  
ブルジョアジの劍に斬られようとも絞首臺へ行かうとも、腹を斬  
らうとも大義の爲なら悔いは無し。

だが唯一つ、鬭争に巻き込みたくないのがアンジュルペナである。  
何やら彼女は私の心の中で大切な人になつてゐるやうだ。

出會つて一日。

それほど親睦を深めたわけではない。  
だが前世の因縁かわからぬが彼女は巻き込んではいけないうな氣  
がする。

## 第六話 しあい

僕は城内をメリケフ財務官の部屋まで早足で、力強く歩いていた。

この国は、いや、西陸国家は心が無いのか。

我が国は奴隷を用いた産業で成り立っている。

それは低賃金で働かせても文句一つ言わず、それでいて高品質の商品を生産する、ある意味最高の生産者達。

しかしそれは貴族達がそう考えているだけで、その奴隷達はどのような心持でいるのか。

ここの奴隷達は、貴族が労働力として奴隷を購入し、奴隷区に放り込んでおくと、勝手に自分たちで役割を決め、こちらが望んだおりの物を望んだ量を生産する。

しかし、彼らの労働の対価は何か。それはわずかなオウラのみ。

この機構はいずれ破綻するであろう。

何度か反乱はあった。しかし我々はその度に力を持って制してきた。

しかしいつまで持つのか。

この街の奴隷七万人に対して、我々は1000人にも満たない。魔法剣士隊を入れても4000人いるかどうか。

そんな少数が多数をいつまで束縛できるのか。

僕は現状をなんとかしたい。

貴族と奴隷などと言う壁を取り払い、何時の日か共に助け合って生きていける日が来るはずだ。

しかし僕には力が無い。まだまだ若い僕は、時期皇帝の為の実績づくりとしてこの街の領主を封ぜられた。

しかし業務は、お付の財務官や軍務官などがやっている。僕には口を出す権利は無い。

いや、正確には出せる。しかしそれが通ることは無い。

ある日僕はアンジュルペナさんと出会った。

初めてこの街の領主となった日。奴隷区を見て回っていたときに「奴隷の花」の花畑の中で彼女と出会った。

それからだろうか。

僕は以前は他の者とかわらない思想だった。

しかし彼女を見てから変わった。

僕は彼女が好きだ。

だからこの生活から抜け出させてやろうと、専属の給士として雇おうと言った。

しかし問題はそこでは無いと跳ね除けられた。

それから僕は変わった。

彼女の為にも、この制度を変えなくてはならない。

今はい小さき事すらできないが、皇帝となったら凡てを変えてやる。  
そして彼女に認められたい。  
他の者は反対するだろう。  
しかし僕は其れを許さない。  
そのときには皇帝なのだから。

今は財務官に、奴隷達の給金を上げてはどうかと言つことしかできない。

しかし何時の日か、彼らを解放してやる。

月は東に傾いている。

石材と木材とで作られた建物の一室は明るかった。  
その一室には若き同志が二人いた。

机に向かつて赤髪少女がしきりに肯いて羊皮紙に書き込んでいる。  
黒髪の彼は身振り手振りで家庭教師よろしく教授をしていた。

「金貨が何故、パンと交換できるのか。それは先に述べたやうに、  
A商品X量〓B商品Y量〓C商品Z量〓……

と連なつてくると、どこかで「金」何ポンドかと言ふのもイコールの關係になるだらう？

金を採掘し、金貨とするには當然ながら莫大な労働時間が掛かる。これは銀にも當てはまる。

であるので、金貨は僅かな量でも他の商品とイコールになるわけだ。

例へば、肉は腐る。といふことは一定の時間がたつと使用價值、交換價值を失ふわけだ。

そもそも肉何百ポンドを交換して回らうと思つたら、交換する前に腐つてしまふ。他には布なども持ち歩いてゐては汚れてしまふ。

なので代はりのものが要だ。そこで皆が信賴した物が金や銀だつたはけだ。

金、銀と交換しておけば、他の人も使つてゐるので、都合がよかつたのだらう。

それで今日まで金、銀が使はれてゐる。」

夜明けである。

アンの目にはクマが出来ていた。

「今日はこゝらで止めとこう」背伸びをしつゝ黒髪少女は赤髪少女へ云つた。

アンはメモを取っていた羊皮紙とペンを机に放り、青いインクの付いた手をそのままにベットに倒れるように入り込んで、有難う御座いましたと云つて寝てしまふ。

さてこの資本論、中間搾取をどう説明したらよいかと黒髪の少女は思案する。

だが睡魔が黒髪少女を襲う。

この黒髪は不老である。

故に睡眠は必要ないのではないかと思うだろうが、精神が睡眠を求めるのである。

矢玉尽き果てども刀を振るう事はできても睡眠には勝てぬとアンの布団に一寸顔を埋めたが最後に彼は眠ってしまった。

数刻の後アルと云う赤髪の男が『彼女』らを起こしにやってきたが、どうやら夜明けまで話をしていたと見た彼は黒髪少女を問い詰めた。黒髪少女は「さうだ」と何が悪いかという風に云ったが彼はひどく叱責した。

アンの体も考えろと黒髪に云ったら腕立て伏せをしたのを見て彼は許した。

その時アンがごぼごぼと咳をした。

黒髪の彼とアルが胸を張らせると幾分か楽になったようだが、ひゅうひゅうと音を立てゝ大きく息を吸っている。

もしやアンは喘息なのかと思った黒髪の彼はひとつ明治期辺りの吸入器でも作ってやろうと思い、その旨をアルに告げ、ローブを羽織って軍刀を帝國陸軍式に帯刀し南部を懐に入れて鍛冶区へ向かった。

黒髪の彼は道に迷ったが無事に辿り着いた。

その場所は地面は乾燥した砂利であり、辺りを見渡すと扇状に赤肌を晒す山でその山の所々には坑道が掘られ、トロツコによって石が運ばれている。

彼が右側を望むと熱風が吹いてくる。思わず彼は目を細めた。

彼の立つ右手には熔鉱炉のある施設がある。熱気を放つその施設は、火傷の跡の残る上半身を裸にした屈強な男達が石を炉に投げ込み、ドロドロに溶けた溶岩のような液体を器の

中に入れている。

彼が左を望めば鉄を打っている者達が目に入る。

黒髪の彼は樽の山積みになされている所まで行くと何やら樽を運んでいる集団に出くわした。

その中の一人が彼の方をちらと見て話しかけてきた。

中々に良い体つきをした白髪の男である。頭に赤い鉢巻をしている。黒髪の彼は、彼が赤い鉢巻をしているので「赤鉢巻」と呼ぶことにした。

赤鉢巻が「あなたがヒットレルさんか！妹の治療をしてくれるそうだな！」

云ったとたんに、周りのものまでもが、あなたがヒットレルさんか等といていた。

黒髪の彼、もといヒットレルは奴隷区ではちょっと有名になっていた。

黒髪の女の子が医者に担ぎこまれてその医者と一緒に暮らしているそうだからアルヘルワめ真面目な学者ぶっていたら云々と云う具合である。

彼がなんだなんだ徒党を組んでと思っていたら男共に囲まれてしまった。

ヒットレルはローブを羽織っているが、フードはもはやいらぬと思ったのか被っていない。

その所為で彼のみどりの黒髪は大衆の目に晒されている。

黒髪の彼は四尺八寸の少女である。

だが、心は男であり、それは前世が男であったからである。

イザ何某がヒルコをどうかして欲しいと云って彼を此処につれてきたのである。

さて黒髪が赤鉢巻と渾名をつけている間に人だかりが出来ている。

その間、労働者の責務は忘れ去られている。

この事に対して、怒って怒鳴りつけるのは誰か。

資本家だろうか。

いや、もちろんそうだろうが、資本家が現場に出張って怒鳴り散らすのは少ない。

大抵は労働者の監督をする者を雇って、彼がムチを与え、資本家がアメを与えるのである。

だがこの世界では資本家がアメやチョコレートやガムを配ることなどせず、資本家は雑草をよこすのである。

この場合は資本家が雇った魔術師が監督であつた。

労働者の責務の放棄に気づいたのか、巡回をしていた魔術師に一同怒鳴られ、一人が何処からともなく現れた火の玉で焼かれた。

男達は火を消そうと着ていた服を脱ぎ、火達磨の男を服で叩いていて消化を試みたが間に合わず、死んでしまったようだ。

魔術師はお喋りさせるために金はやっていないと怒鳴った。

一同は魔術師を睨んだ。

黒髪の彼は労働現場の実態を見た。

彼に一番見せてはいけない物を魔術師は見せてしまった。

彼は寛容で川の流れの如き人柄だと自負している。

しかし、その川の水が沸騰することもあるのである。

事に彼の

信義と義理と仁義とに反する行為と

愛国心のかけらも無い売国奴と

邪悪なる資本主義者のブルジョアの退廃的な非道行為を見てしまったときである。

資本家が労働者を殺しても良い道理があるものか！

労働者は資本家に労働力を売っているのであって、命を売っているのではない。

命は軽いものではない。

命は重いものである。

故に彼は己の命と引き換えに前世において売国奴の首相を斬ったのだ。

——仁義や大義の為でも無く人間一箇手に掛けたるならば責任も負はず生を貪る事は赦さぬ。然るべき成敗を受けるべきである。特に貴族主義者の豚野郎ならば尚更である。

だが、直ぐに抑制不能な怒りに身を任すほど愚か者では無かったのは彼にとって幸運であり魔術師にとって不幸の始まりであろう。彼が云うならば労働対価を払はせるまでだということであろうが。

これを好機と見るべきであると彼は思った。

魔法が使えるからと云って労働者を搾取する道理は通らぬと啓蒙してやろうと思ったのである。

プロレタリアートによる勝利への第一歩であると見せつけ、労働者を扇動するのだと。

だがもちろん道理の通らぬ悪に天誅下してやらんと云う思いもあった。

黒髪の彼はがまんの出来ぬ男である。

己の信義に反していたり、不人情な者を見かけるとついつい口を出してしまう。

それでややこしい事件を起すことが多い。

後の自体の収集など気に掛けていない。

なぜなら彼は正しい事をしたと思い込んでいるからである。

黒髪の彼は云う。

「其の偉さうな態度は氣に入らん」

一同驚嘆の表情を浮かべる。

「誰に対してのその物言いか！」

魔術師はまたもや怒鳴った。

だが、直ぐに魔術師は口を吊り上げて笑みをこぼす。

群集の中から前へ出てきた小さな少女が声の主だったからだ。

黒髪のヒットレルは手を大きく上げて云う。

しかし其の声は落ち着き払って。

「君は何だ」

何という口の利き方だろう。

魔術師の胸辺りがその黒髪少女の背丈である。

そんな少女が汚いものを見るような目で見てきたのだ。  
彼は怒った。

「魔術師であり、ここの監視を勤めるものだ！」

ヒットレルは彼と魔術師を囲む民衆を見渡して云う。

「魔術師はなぜ彼らのやうに汗を流して働かないのか」

「我々は魔法が使えるからだ。そして魔法の使えない哀れな彼らを雇ってやっている側であり、彼らに金を払っているのだ！その金の分は働いてもらわなくてはならない！よって手を休めることそれすなわち我々の金、皇帝の金を盗んでいることなのだ！」

首をかしげて問う。

「魔法が使える者は魔法を使えない者を殺しても良いのか」

「そのとおりだ。我々の力は偉大であり、尊いものだ！だからこそこの世界は魔術師によって統治されているのだ！」

アクセントを付けて、手は腰の横のままであるが、体を少し前のめりにして不思議そうな顔をして問うた。

「君らは統治者か」

「そうだ」

右手を魔術師の方へ向け、手を広げ、手の甲を大地へ向ける。其の声は小莫迦にしたように、笑みを浮かべつつ、

「どうやってなった？労働者を搾取したのか。時代遅れの帝國主義にしがみついてゐるのだらう」

「黙らんか！我々がこの世界を統治することは唯一神エザナレルによつて定められているのだ！その証拠にブルゴーニエ初代皇帝は空から降ってきた一本の剣を手にし、その加護によって死して尚現在までその威光を世に知らしめているのだ！」

ヒットレルは自身の胸を両手で二回叩いた後、胸の前で両手を広げながら怒鳴り声で云う。眉毛は逆ハの字である。

「莫迦か。其のやうなものは時代遅れだ。其のやうな宗教は社會の不平等を生み、國を腐敗させるのだ。民の中から選舉によつて選ばれた議員によつて統治されるべきなのだ。空から降つて來た劍を偶々手にした誰か等ではなくてな」  
言い終わつた後は口はへの字に閉める。

「默らんか！意味の分らないことを！皇帝を侮辱するとはこの國の魔術師を侮辱したと同義！死してその償いをしてもらう！」

論争を聴く聴衆を望みつつ云う。

「彈圧するのか。見よ！此れが彈圧の現場だ！この場にゐる八萬を君一人で相手取るのか！少数が多数を彈圧することなどできない」

怒り狂つた退廢的思想の魔術師は劍を引き抜いた。

二人を囲む聴衆が一步後ずさる。

「この街にゐる八萬の勞働者よ團結せよ！彼ら貴族重商主義者、ブルジョアジードモは瀕死である。その證據に論理を以つて我々をとめることは出来ないのだ。力に頼るしか術が無いのだ！この日を忘れるな！魔法を使へないものが魔術師に勝つた日を！」

云いながら黒髪の彼も抜刀する。

二人を囲む聴衆がさらに一步下がる。  
辺りは静寂に包まれる。

誰かが唾を飲み込む音が聞こえた。

喧嘩だ、鬭争だと騒ぐものはいない。  
ただ、この二人の行方を見ている。

両者の距離は六歩である。

魔術師はレイピアを構える。その構えは闘志を発露して。

其の構えは右足を前に出し、左足を後ろ、体を斜めにして半身にし、右手に持ったレイピアを黒髪の女に向け、左手は左腰に添えている。所謂、フェンシングの構えである。

その理由は相手に対する体の面積を最小に出来るからである。

レイピアとは十六、七世紀に使われていた細身で両刃の片手剣である。

全長は四尺（120cm）である。

柄を握る手の甲を覆うように護拳が付いている。

両刃ではあるが、突きが主な攻撃である。

対して黒髪の少女は軍刀を正眼に構える。その構えは悠然と、微動だにせず。

様々な流派の剣術があるが「正眼の構え」は各流派基本の構えである。

基本にして攻防どの手にも対応できる万能の構えである。

剣道においては中段構えとも呼ばれ、剣道においても基本の構えである。

彼女の持つ軍刀は帝國陸軍の九十四式軍刀である。

昭和9年に制定されたこの軍刀は、それ以前のサーベル式の軍刀から、初めて日本刀（太刀）を元に太刀型軍刀へ改められた刀である。彼の持つ刀は「靖国刀」であり全長三尺四寸（102cm）、刃長は二尺三寸（69cm）、

鞘、柄色は茶褐色、その他は制定規定通りである。

魔術師のレイピアの先は揺れていた。それは彼の怒りの為であろうか、それとも余裕からの笑みのためであろうか。

——あの黒髪の女奴隷はサーベルの様な武器を構えた。奴隷の刀剣等の武器の所持は禁じられているはずだ。

とはいえ、その所持した武器を摘発しきれるかというところではない。

この鍛冶区にしる何処にしる、奴隷の数は多く、凡てに目が回るわけではない。

現に、ショートソード等を密かに作り、所持していた奴隷があり、その武器を以って他の奴隷を襲って金銭を奪い殺害するなどということは頻発している。

だが、彼らは我々に対して剣を大々的に振るうなどということは無い。

もちろん、追い詰められたら彼らは剣を抜いて我々に斬りかかって来るが、鎧袖一触である。

魔法など使わぬとも素人剣術に遅れをとる己ではない。

目の前の黒髪女は剣を構え、己に立ち向かおうとしている。

しかも、何の恐怖も感じていないように見える。

両手剣を真っ直ぐに構え、微動だにしない。

背中真っ直ぐに伸ばし、右足を前に出し、左足を後ろに引いてい

る。

——この構えは何だ？両手剣を扱うなら腰をもっと落として構えるべきだろう！素人が！

このような素人丸出しの小娘と死合うのか。だがこの小娘、恐怖は感じていないようだ。それが又腹立たしいのである。

落ちぶれているとは云え、彼もまた魔術師であり貴族である。

彼が底辺と見なす者にかくも莫迦にされてただでは済まさん、楽には殺さぬ、苦痛で泣き喚いて許しを請わせてやる。

己との体格差は圧倒的に己に有利だと彼は即断した。

彼の心情など気にもかけず、黒髪の少女は「機」を伺う。

確かに体格差はこの魔術師の男の方が有利であろう。

黒髪少女は力押しの勝負では確実に敗北する。

しかし、力で勝敗が決するならば技はいらぬ。

柔道を例にすれば、圧倒的に小柄な者でも己よりも大きな者を投げ飛ばせる道理は何か。

腕力か？

実は大きい者が八百長をしたのか？

否である。

相手の体重移動を逆手にとってバランスを崩してやることによって  
投げ飛ばせるのだ。

いわば、技である。

だが、「技」を掛けるには「機」を捕らえねばならぬ。

「機」とは勝機の事であり、相手の気配の事である。

攻撃のタイミングであるという認識は間違いであるということ为先  
に明記しておきたい。

日本剣術をはじめ、武道の流派は様々であるが、「機」を想定して  
いない武道はないであろう。

黒髪少女の考える機、前世の剣道をやっていた時分の事も含めると、  
大きく四つに分類された。

「先々の先」

「先の先」

「先」

「後の先」

である。

「先々の先」とは、互いに「先」を狙っている時に相手の気配（目  
線、剣先の揺れなどの微動）を発見し、相手が攻撃動作を行う前に

相手に先んじて「先」を打ち込むことである。

第三者から見れば、こちらが「先」を意図して打ち込んでいる様に見えるが、相手の「先」よりも早くこちらが先に打ち込んだということである。

これは究極の理想とも云える。見誤りやすく尚且つ見誤れば一番危険が伴う。中々出来るものではない。

「先の先」とは、相手が「先」を狙い、攻撃動作の起こり、構えを崩す瞬間の隙に打ち込むこと。先を狙う余り、守備がおろそかになっている隙に打ち込むことである。

だが、「先」を狙う相手の剣速が此方の予想を上回っていた場合、若しくは相手「先」が「後の先」を狙ったフエイントの場合、攻撃と防御は同時には取れぬことは道理であるので、斬られるのは此方である。

「先」とは、相手よりも先に打ち込むこと。相手の態勢が整わない内に打ち込むこと。相手の守勢が脆くなった隙に打ち込むこと。又は相手の油断、疲労により生じる隙に打ち込むことである。

だが、動くということは隙が出来るという事である。相手が「後の先」を意図していた場合、斬られるのはこちらである。

「後の先」とは、相手の攻撃動作中の隙、又は相手が打ち込んだ後に再び攻撃が可能な態勢まで戻すまでの隙である。

相手が動いて初めて此方が動くのである。間合いを計りつつ、相手が打ち込んだところへ仕掛ける。

若しくは相手の攻撃を避け、相手の剣が空気を切り裂いている間に打ち込むと言っても良い。

だが逆に云えば、フエイントを仕掛けてわざと相手に「後の先」を貰ったと錯覚を仕掛けようとフエイントなどをして、相手が動くまでは何も出来ないものである。

黒髪の少女は今は「後の先」を狙う。

後の先は4つの機の中でも一番安全策である。

相手の出方が分からぬ。

魔法なる物は攻撃として有効であるのか？

不明な点が多い以上、先に動くことは極めて危険である。

微動だにせず、唯こちらを見つめる黒髪少女に対して、魔術師の男は余裕の笑みを浮かべた。

——口ほどにもない

剣を構えていたとしても所詮は小娘。体格差も歴然。

おそらくこの小娘は戦い方を知らぬ。

その証拠が未だに動けないでいる。

恐らく、どう動いていいのかわからぬのだろう。

黒髪の少女は正眼の構えを左側にずらし、右肘を突き出した。

疲労から来る物なのか、唯構えを崩しただけか。

どちらにしても、魔術師にとっては好機である。

正眼の構えは切っ先を相手の首辺りに向ける為、相手はレイピアの様に突きを主体として戦う得物を扱うならば刀を払いのけるかしくはてはならない。

何故なら正眼の構えより打ち出される最も最速で危険な技は突きであるからである。

正眼の構えからは予備動作が少なくすむ。

相手の首の辺りに切っ先を向けるのは突きを意図したものである。突きを意図していない場合であっても相手へのプレッシャーを与える、相手の突貫を牽制するなどの意図は間違いなくある。

剣道などにおいては幾ら打ち込みを受けても有効打として認められなければ一本とならない。様は死んだことにならない。

故に、相手の竹刀がどれだけ腕に当たっても胴を切られても、此方が先に一本を取れば勝敗は決する。

しかしこの二人が持つのは真剣。

突きは兎も角、袈裟、唐竹どの太刀筋であつても斬られれば負傷するのである。

幾ら魔術師が日本剣術を知らぬとは云え、彼もまた戦人、素人と判断しているとは云え、目の前の黒髪少女の構えから打ち出されるであろう太刀筋は大方見当がつく。

だが、好機は魔術師に向いたのである。

正眼の構えがほんの僅かに崩れたのである。

精神的未熟さか、疲労からか、そう考えるまでも無く彼は「先」の機を伺った。

例へ「後の先」を狙った「誘い」であつたとしても彼は自分の突きにの速度に自信があつた。

——串刺しにしてくれる

あの両手剣の事だ、素早くは振れないだろう。

恐らく、叩ききる事を狙ってくるはずだ。

まずはあの右手を使えなくしてやろう。

「右手に突き」、ついで「鳩尾に突き」ついで「喉への突き」

魔術師はこの連続した突きを狙った。

魔術師は駆け出した。

互いの間合いが大きく変わる。

黒髪少女は一步、二歩と勘定する。

黒髪少女の「誘い」に乗ったか、魔術師が油断からかどうかは分からぬが、「先」を意図して間合いを詰めたのは明白。  
分かり安すぎるくらいである。

——ならば、「後の先」の技を掛ければよい  
彼の云う技とは、基本的には中段（正眼）構えの際に用いる事を想定している。

相手が小手狙いにて左薙ぎ以外の太刀筋によって斬り込んで来た際に、

此方は右足を後ろへ、刀は八双の構えに近い位置まで、尚且つ右上方へ両の手を外す。

相手の刀は虚しく空気を斬る。

その一寸も待たず、足の位置を変えぬまま、足腰を垂直に落としてつ刀を振り下ろす事によって、直ちに相手の小手へ打ち込む。その際上半身と下半身とは捻る形になる。

相手は攻撃中である為、此方の斬撃を防げない。

——緋虎流似非剣術『捻り落し』

此れが「後の先」の「技」である。

相手へいわゆるカウンター気味に小手を打ち込む際に、体を更に前傾させれば、唐竹、直斬り、胴、何処へでも打てる。だが一番確実なのが小手である。

ただ、この技、相手が小手狙い以外の場合は使えない。

此方を突きや真つ向からの直斬り、袈裟斬りなどで斬りかかって来た場合はどうしても負傷は免れない。

では、どうするか。

単純明快である。

小手に打ち込むように仕向ければよいのである。

わざと肘を出す、刀を一寸だけ上下させるだけでも、緊迫した状況であるならば相手は小手狙いで打ち込む可能性が高い。

——それでももし例えば唐竹に打ち込んできたなら？  
胴がから空きである。

——突きをしてきたら？  
いなしてそのまま小手を打てばよい。

e t c、 、 、

この技が「後の先」の技であり、中段（正眼）構えを念頭にして組んである理由が之である。

だが、欠点が無いわけではない。  
どのような技にも欠点がある。

その欠点を突かれぬ様に、勝機を読むのが重要である。

だが、今回の場合は案ずるに及ばず、魔術師の得物はレイピアである。

——小娘ふぜいが、奴隷の分際で粋がりおって  
いまだに身構えてすらおらぬ。

おそらく、緊張の余り力が入りすぎているのだろう。

魔術師が三步目を踏み込んだ所で、大きく右足を踏み出しつつ、レイピアを持つ右手を前へ押し出す。

力強い一撃、すばやい一撃を加えるには力んでいてはできない。  
力を抜いて、いざ突く、と言う所で一気に息を吐いて、突く。

——「突き」

しかし手ごたえは無かった。

——どういうことだ？

彼の目の前からは自らの狙っていた腕は無く、黒髪の娘が持っていた刀も消えていた。

切り落としたのか？

いやいやいや、待て待て。

突きだけで、何の手ごたえもなく綺麗に手首を落とせるわけが無い。

では、何処に行ったというのか。

彼の頭上である。

彼は、魔法剣士である。

魔法剣士は一面を焼きつくす炎を出したりなどという芸当は出来ぬが、火の玉を出現させ操るだとか、自身の身体能力を瞬間的に高めることが可能である。

彼は魔法を咄嗟に用いて後ろに飛びのく。

――  
軍刀の切っ先が己の額から鼻を薄く切り裂く。

―― おのれ

失態である。虚栄心がすぎたか。

己は攻撃ができぬ。

バックステップにてかわしたのがやっとであり、攻撃をする態勢に入っておらぬ。

息を先ほどの「突き」から「バックステップ」で使い果たしてしまった。

息を吸う一刹那、

それが必要である。

幾ら魔術師であつても呼吸を、息を吐くのと吸うのとを同時に行うことができないのは必至。

もう一撃を避はし、態勢を整えなければ。

冷静になれ、次の敵の一手は何処だ？

だが、瀕死の貴族主義者に息をつく暇など黒髪少女は与えてくれなかった。

魔術師の左足が地面を踏んだのと同時に、黒髪少女は直斬りで振り下ろした軍刀を、右手に力をちよいと入れて止める。

一寸の間もなく、左足を軸に右足を踏み出す。

同時に腹の高さにある軍刀を前へ押し出す。

鳩尾への刺突を狙う。

彼女の突きが入るか如何かという刹那に、

「そこまでだ！」

と言う声と共に、凄まじい風圧によって両者吹き飛ばされる。

当然、突きは入っていない。

真剣勝負を邪魔だてするのは誰ぞ！

そう思う者はいなかった。

ヒットレルの目の前で倒れこむ魔術師を除いて。

ヒットレルも魔術師も動きを止める。

声の主を見ると金髪の少年である。

タイツをはいて半ズボンをはいている。上着は青い長い燕尾服の様なものを着ていて所々金色の装飾が施されている。

魔術師が、何故止めるのかのような事を言っていた。最後に殿下と付いている。

一つ間をおいた後、金髪の少年は声を上げる。

真っ直ぐに両者の間を見て

声を透き通らせて

この鉱山区に響かせて

「この勝負、ブラゴーニエ帝国皇帝の息子にしてナジウム領主、ハリックス・サラノフが預かった！」

ヒットレルは口元を吊り上げた。

声さえ出さぬが、黒髪の彼は笑みを浮かべた。

その白い肌の中で薄い桜色の有様は三日月の如く。



## 第七話 わかさ

私は刀を納刀した後、ニヤニヤしてゐた。

とんでもない風圧で吹き飛ばされたのは魔法なのだらうか。

腹が立つたから一つ説教を呉れてやろうとしたら奴は劍を抜いてきたので、なんだとこんちくしょうと人を一人殺しておいて何の責任も無いと思つたら大間違ひだと叩きのめしてやろうとした所で金髪少年に止められた。

斬る事は叶はなかつたが、奴にとつてはこの上ない屈辱であるといふことが見て取れる。さらに無産階級は魔術師を恐れないと啓蒙することもできたので、良しとしよう。

例の退廃的な魔術師が、何故止めるのかのやうな事を言つてゐた。最後に殿下と附いてゐる。

「殿下、労働力もただではありませんぞ、労働力は一日使用すれば消費されます。その労働力を回復させるための手立てとして我々は安くない給金を奴隷どもに払っているのです。それなのにその奴隷——もとい労働者が我々に労働力を売っておきながら労働を放棄する事、すなわち奴は詐欺師なのです」

「黙りたまえ。お前の雇い主——商會に金を貸してやったのは誰だ？領主たる余が金を貸したからこそ起業できたのだらう。他の商會もそうだが、余が『オウラ』を貸してやったから土地を買い、労働者を雇える訳だが、その労働者は商會が返済が出来ぬ場合の担保に

もなっている。すなわち、労働者を殺めるということは余に対しての担保をお前が盗んだということだ」

勝手なことを云ふものである。

労働力だとか労働者がとか云ひ回しは結構な物だが結局労働者は奴隷扱いではないか。

貴族や資本家にもなると労働者は生産手段にしか見えないのだらう。

領主は銀行か何か。

見たところ労働者諸君は自由氣ままに仕事に就いてゐると思つたら割り當てられてゐたのか。

と云ふより農業區にしる鍛冶區にしる土地や機材の所有者は夫々違つてゐたのか。

まあだとしてもどれも同じやうなもんだらう。

ぼけーと二人のやり取りを見てゐたら暫くの後、魔術師は何やら言つて退散した。

殿下と呼ばれた少年は、いつか話がしたいと云ふ類のことを云つて歸つていつた。

いつか話をしたいと云つたつて貴族主義者と話すことなど無いぞと思つてゐたら、退廃的な魔術師が去る時に私をぎろりと睨んできたもんだから私もぎろりと睨み返してやつたら金髪殿下が笑つてゐた。

こつちは眞剣にやつてるのに笑ふとは何事だと思つたが、ワーと云ふ関の聲でうやむやになつた。

と云ふのも金髪殿下と退廃的な魔術師が退散した後、ワーと関の聲が上がり、筋肉質のおつちちゃん達が私を胴上げしてきたからである。

煤やらにまみれながら盛んに胴上げをして呉れるので、又むさ苦しいおつちゃんらに頭を撫でられるのだから堪らない。

これあ堪らんとうまい工合に抜け出したが、おつちゃんらの煤の所爲で服も私の白い肌も所々黒く汚れてゐる。

最後はうやむやであつたが私は一つ目的を果たした。

もう少し後になるかと思つたが、好機を逃せなかつた。

革命を企てる組織があるのならば良し。無ければ自ら作るとしても、大衆が其らの活動を知らねば意味がない。

部屋でこそそと話し合つてゐるだけでは大義は成し得ない。

大衆から存在に氣づかれない、無視されてゐる革命家など唯の勘違ひ野郎、勘違ひの勘太郎だ。

早すぎたかもしれないが、この奴隷區で地下活動をする団体があるのならば、近いうちに出會ふ事になるだらう。

ならば早いほど良い。

今回の一件の噂は近いうちに彼らの耳に入るだらう。

そしてこの件で体制側はより、我々に對して厳しくするだらう。

この世界は農奴制よりかは甘い。

体制が我々を限界まで弾壓せねば私の理想はかなはぬ。

どうにも私は体制を敵にすると燃えあがつてしまふな。

しかし實際のところ、魔法と言ふのがそれほど理解できてゐない段階であつたので、とても肝を冷やした。

と、ここで本來の目的を思ひ出し、ちよいとばかり鐵パイプか何か無いかなどと聞かうと思つたが、今更闕の聲を上げてゐる連中の所

へ突貫するのมどうかと思つて思案する。

すると、さつきの肉附きの良い赤鉢巻の兄ちゃんがきよろきよと群集の中から外れて何やら探しものをしてゐた様なので、「おい、赤鉢巻」と呼んだら此方に來た。

彼は何やら私を賞賛してゐたが、「よく魔術師と喧嘩する勇氣があるな」とか何とか云ふのには呆れた。

こちらら命がけで闘争したのに喧嘩とは何だ。

赤鉢巻やろつの頭をぽかりと殴つてやらうと思つたが、いかんせん背丈が足りないので赤鉢巻やろつに「何してるんだい」と笑はれる始末。

恥づかしいので、さつさと吸入器の材料はないか聽かうと思ひ、これこれという云ふものはないかと尋ねたら、あるから後で届けると云つた。

私の部屋は分かるかと問うたら、アルヘルワのとこだらう、わかるとの事だつたので、それぢや頼むと云つてその場を去つた。

歸る前に耐熱グローブとおぼしきものと小瓶とを持つて歸つた。

部屋に戻つたら、アルに借りた藥草圖鑑で前世で見た喘息に效くと云ふ代物に含まれてゐた物に似たものは無いかなどと探してゐたら、丁度アンの部屋のたくさんある花の一つに其れを見つけたのでひとつ貰つていつた。

藥草をランプと小瓶を使つて茹でて煎じてゐると、件の肉附きの良い兄ちゃんが眞鍮製のパイプと銅製の板をいくつか持つて來た。

眞鍮は赤鉢巻がくすねて來た物なので數がないが、妹を治してくれるなると云つてゐた。

私は氣になつて、妹とは誰かと問うたら、サウサンのことだつたらしい。

なるほど、彼が件の兄か。

名前を聞けばサタハフと云ふらしい。

君も大變だらうと云つてやつたら妹の爲ならと云つてゐた。

なるほど此處にも妹思ひの兄さんがゐるものである。

正直云つて、失敗するかもしれないぞと云つたが、それでも手を盡くしてくれるのは感謝してもしきれないとの事だつた。

抜け出してきたので直ぐに戻らなくてはとのことだつたので、お禮を言つて見送つた。

アルは今、件のサウサンの様子を診た後、いくつか患者を診て回つてゐるさうだ。

パイプやら鐵の板やらを組み合わせせて吸入器をつくつてやつた。持つてきてもらつた時點で既に言つた通りの長さや穴が開けられてゐたので助かつた。

部屋で寝てゐたアンを起こしにいつた。

いいものをやろうと云つて吸入器（こいつが結構重いのだ）を机の上にほひた。

「これはだな、吸入器と云つて、この噴霧管をはづして、釜の口にこの漏斗と呼ばれるものを使つて水を入れる。  
下に於てあるアルコールランプに火をつけて暫し待たう」

使ひ方を、蒸氣が収まつたらタオルなどで前を覆つて云々、霧口から十センチほど離れて云々、この小瓶に煎じた藥草を入れて、藥液ビンの藥がなくなるまでゆつくり吸ひ込むんだ。などと説明して、此れを一箇月もやればよくなるだらう。私からのただ飯のお禮だ」と云つて置いた。

最初は戸惑つてゐたが、蒸氣を吸ひ込むのに快感を覺えたのか氣持ちよささうにしてみた。

暫くアンと話をしてみたら、アルが歸つてきた。

歸つてくるなり、鍛冶區の件で噂になつてゐると言つてきた。

何故あんなことをしたのかと問ひ詰められ、アンにも理由は何かと問はれたので、

「たとへば――人間の労働があらゆる富の源泉であり、資本家――つまり言ふところの魔術師は、労働力を買ひ入れて労働者とれいを働かせ、新たな價值の附加された商品を販賣することによつて利益をあげ、資本を吸収する。

資本家の際限の無い、競争は生産を破綻させ、労働者は生活が困窮する。

他人との團結の仕方を學び、組織的な行動ができるやうになると、やがて革命を起こして、貴族重商主義、奴隸經濟主義を顛覆させる。さう云ふことだ。」

と答へておいた。

アルは口をへの字にして納得いかないやうすだつたが、アンは瞳を輝かせ、しきりに凄いです！すごいです！とかなんとか云つてゐた。

それにしてもアルにも「魔術師と喧嘩云々」と云ふ工合に聞かれたので、アルめの頭をぽかりと殴った。

つもりであつたが、己の背丈の低い事を忘れてゐたので、拳は見當違ひの所を飛んで云つた。

アンに何をしてゐるのかと笑はれた。

背丈の低いのがこんな所で裏目に出たのである。

まだ前世の感覚で振るつてゐたので、こいつは早くこの背丈にもつと慣れねばと思つた。

そんなこんなで食事の後アルに吸入器を見せて、アンの喘息もこれで幾分か和らぐだらうと云つてやつたら、への字から満面の笑顔になつた。面白い奴だ。

食事の後、またもやアンに部屋へ誘はれたので、貨幣の資本への轉化に就いて話をしてやつた。

昨夜のやうに氣がついたら朝だつた、と云ふことをすると、アルがうるさいので適當な時間で一つ區切りを置いて、今日はここまでとした。

アンはもつと聞きたがつてゐたが、體が着いていかないのかベットにねつころぶなりすぐに寢息を立ててしまった。可愛いなと思ひながら暫く髪を撫でて遊んでゐた。

\*

二日か三日後くらゐに爆發事故と云ふことで鍛冶區へ向かつた。

アンはまたしてもお留守番である。

おそらく喘息だったやうで、私お手製の吸入器によりちよいと楽になつてきてゐるやうだが、アルはまだまだ安靜にして貰ひたいやうだ。

なのでアルと鍛冶區の前まで行つた。

道中やたらと挨拶された。

さて到着してみるとなるほど坑道からもくもくと煙が上がつてゐる。

おほかた爆薬の量を誤つたか粉塵爆發だらう。

さういへば黒色火薬は發見されてゐるらしい。

しかし、魔術師は爆薬など使はぬとも爆破できるので、主に労働者によつて鍛冶區やらで使はれてゐる。

聞けば火繩銃らしきものがあるとかも耳にしたが本當かどうかは知らぬ。

さて、これは生存者は少ないなと思ひながら、鍛冶區のまとめ役のやうな男に何があつたか話を聞く。

この男、中年の様な感じがするが、鐵兜を被りいつもゴーグルをしてゐるので人相が分からぬ。

赤髪が冑とゴーグルの間からちらちらと見えるくらゐである。

だが、氣さくな奴のやうだ。

そしてべらんめえ調である。

こんちくしよめまた坑道で爆發が起こりやがつた魔術師が魔法でもつかつてゐるぢやあないかと云ふのでまあ落ち着けと話を聞く。

どうやら聞いた話しによると粉塵爆發の様な氣がした。  
「氣がした」といふのは私の付け焼き場の智識で判斷したからである。

何はともあれ、負傷者を診てやらねばならぬ。

いざ坑道へ飛び込まうとしたら、鐵兜に危険なので若いモンを行かせて運んでくるから待つてゐて呉ればよいと云はれた。

横に居たアルの顔を見上げたら、どうやら毎回このやうにしてゐるらしい、此處で待つてゐると云ふ風だつた。

私はその態度に腹が立つて、

之で醫者が務まるかい。

男なら危険な所に飛び込んででも助けたらどうだ。

女みたいに怖がつて後ろに下がりやつて。

と云ひ放ち、坑道に突貫しようとしたら、アルはぎやあぎやあ喧しく騒いで私を止めてきた。

この臆病者め。

赤軍を組織したら最前列に立たせてやろう。

なよなよした根性を叩きのめしてくれる。

「君はそこで待つてゐると良い。私は行くよ」

「待つてくれ。危険だ。素人が行くんじゃない」

「何が危険だ。素人もクソもあるかい。男だつたら眞つ先に飛び込むくらゐの意氣込みが欲しいね」

などと云つてゐる間に、この間の赤鉢巻をはじめ、體格の良い兄ちゃん達が怪我人を運んできた。

擔がれてゐる者の中には腸が飛び出してゐる者も居る。

それみたことか無理に動かすから餘計に重傷になつたぢやないかと思ひながら手當てしてやつた。

處置が終はつたら太陽は西の方で朱く輝いてゐた。  
夕暮れである。

腕や足を鋸で切斷された者の呻き聲を餘所に鍛冶區のまとめ役らしき鐵兜に談判を開いた。

粉塵爆發の對策はしてゐるかと問うたら、そもそも粉塵何たらとは何だ、と返つてきたので適當な工合に説明してやつた。  
取り敢へず坑道をもつと廣くした方が良いと云ふことで決着した。

その間、アルは呻き聲を上げる者に酒を飲ませてゐた。

鐵兜は私に「お嬢ちゃんは博識だね。それでいて何だか男勝りな口だね」などと云ふので「失敬な、何處が男勝りか」と問うた。

「此間の魔術師の一件もそうだけど、漢らしいってんだよ」と云つて來た。

確かに中身は男であるのだが、外見は女である。  
そして小柄で可憐な少女である。

できれば大和撫子のやうに振舞ひたいのである。

「鐵兜のおじちゃん、ひどい」

と、うるうると泣いた振りをしてうづくまつてやつた。

私がさかんに泣くので赤鉢巻も怪我人も周りの者も私を見た後、鐵兜を見る。

そして鐵兜に悲しい視線が送られる。

鐵兜は狼狽して、「ごめんごめん、わあーった。金属なら好きな物作ってやる。それで勘弁してくれ。」

と云ふので、私はぐずぐずと泣きながら、それなら日本刀作つて呉れと云つた。

日本刀とは何だと問ふので、字は讀めるさうなので適當な紙にスケッチと製法を書いて渡した。

「なんでい剣か。労働者が持ったらいけないんだぞ」と云いつゝも、作つて呉れるさうだ。

どこまで日本刀になるのか判らぬが、どうやらこの鐵兜、何本も武器を作つてゐるらしい。

似非日本刀位にはなるだらう。期待しておかう。

有難うと云つたら、何、感謝するのはこつちだと云つてゐた。話のわかる良いやつだ。

歸りの道中、アルに聞いたら、あの鐵兜は奴隸區内のならず者に武器を提供する悪い奴だと云ふ。  
なんだそんなけしからん奴だったのかと思つたが、堂々としてゐる

のは良い。

多分鐵兜に面と向かつて、君はならず者に武器を渡す悪い奴だ。と云つても堂々と、さうだ、と云ふだらう。

私は悪くてもその悪い事を分かつて居て、指摘しても誤魔化さない奴は好きだ。

とは云へ、褒めるつもりはなく、大義はあるかと問うて、無いやうであれば斬り捨ててくれようが。

その大義が私の思ふところと一致する所があれば、何もとがめない。

鍛冶區から居住區へ行くのには工藝區の前を通るのが近道である。なので二人して今は工藝區を歩いてゐる。

黄昏時にも關らず、各建物からは、布を縫ひ、ろくろを回し、窯に粘土で作つた器を詰めてゐる姿が見える。

すると何やら作業をしてゐる子供の姿を見たが、子供の前に跪いてゐる女性が居た。

何をしてゐるのかと横切る際にちらと見た。

どうやら子供が立つて機織機を動かしてゐるが、その子供に女性が飯を食はせてゐた。

何も機織機を動かしながら食はせないでも、飯ぐらゐ坐つて食へばよからうと思ひ彼女らにさう云つたら、何を云つてゐるのかと云ふ目で見られた。

ああ、さうか考へが足らなかつた。  
彼らは此處から「動けない」のだ。

するとどこからか叫び聲が聞こえた。

「暴動だ！反乱だ！」

止さうとしきりに云ふアルの手を引つ張つて叫び聲のする方へ行く。

何人かが揉めてゐた。

鉈や鎌を持った男が六人ほど。

對して魔術師と思しき青地に赤の裝飾のあるローブを羽織つた男が二人。

鎌を持つ男は云ふ。「俺とお前らは同じ人間だろう。」

魔術師が云ふ。「いや、違う。お前は奴隸で我々は貴族である。」

鉈を持つ男が叫ぶ。「何だと！」

燕尾服の様な青色の服を着たタイトの髭親父が出てきて云つた。「お前達奴隸は労働力が唯一の収入源だ。だがしかしその労働力は我々が買わねば価値は生まれぬ。いわば我々のおかげで生きている意味ができるという事に感謝して貰いたいものだな」

周りの労働者達は作業をしつつも横目でしきりにその様子を眺める。

あるものは手を止めて見つめる者もゐた。

「だが、俺達が労働者でお前らが貴族である理由は何だ？働かなくても良い理由は何だ？」

「単純明快、魔法が使えるからだ」

「違う。金があるからだ。金さえあれば俺らがお前達を従える階級になるだろう！」

「何を！確かに我々は金がある。それは事実だ。だが、お前達が金を得る術は何だ？体を売るのだろう。現にお前の妻もまさに今、どこぞの魔術師に文字通り体売っているかもな」

武装した六人の労働者は云ふ。「ヒットレルなる少女は云った。この街に居る八万の労働者よ団結せよ！皆！いまこそ決起せよ！自由な社会をつくらうではないか。魔術師におびえ、飯すら食う時間もない生活に耐えられるか！自由な社会を作るのだ！皆が団結すれば魔術師など敵ではない！」

——愚か者め

あいつらは心意氣は立派だが莫迦だ。

革命には階級社會の打倒をめざし労働者階級を先導する指導的な「前衛黨」が必要である。

指導者なしに武装蜂起など、決起などできるか。

あわよくば今は熱氣に押され、決起できたとしよう。

しかし、其れは長くは續かぬ。

すぐに鎮圧されよう。

私があの時、演説かまして闘争をしたのは啓蒙と煽動のためだ。

あの時決起などしても成功は無い。

だから「団結せよ」と云つたのだ。まだ「決起せよ」とは云つてをらぬ。

そもそもこの労働者の云ふのは唯の無政府主義ではないか。

アナーキストめ、勘違いして私の名前を使ふなど、とんだ阿呆の阿呆介だ。

やはり革命は智識層が先導せねばならないなと思つた。

字も讀めない者が先導しても無理だ。

智識層をどう啓蒙するのが問題だ。

「何をなすべきか？」やら「資本論」でも執筆してみようかしらと思ふ。

六人の労働者に加勢する者は居なかつた。

當然だらう。彼らが指導者になりうるわけが無い。

六人の労働者は、魔術師が何やら口ずさんだ後、火の玉やら、電撃やらが四方から飛んで行つて死んだ。

私は其れを見た後、アルに「歸らう」と云つて歸つた。

その晩の食事は芋であつた。

飯が不味ひ。

その日の夜はアンに夕方の話と「労働者の自然成長的な経済闘争はそれ自體としてはブルジョア・イデオロギーを超えない。社会主義意識はプロレタリアートの階級闘争のなかへ外部から持ち込まれるものであつて、階級闘争のなかから自然發生的に生まれて来るものではない」

と教へてやつた。

彼女は「わかつてます」と云い、「わたしもヒットレルさんに教えられるだけじゃなくて、自分で勉強して考えてもみるんですよ。」  
「階級社会の打倒をめざし、労働者階級を先導する指導的な革命政府なしに革命は成功しないです。だからヒットレルさんが見た夕方の労働者は脳が無いです。」  
と胸を張つてゐた。

彼女は良い子だ。

私が「革命の目的は何だ」と問うたら

「貴族階級、ブルジョア階級、労働者階級……凡ての階級と云う概念の打倒です」と答えた。

餘剰價值についても教へてやつて居ないのに大した物だ。

頭を撫でてやつたら嬉しさうにしてゐた。

彼女が私の胸の中で抱かれた。

背丈は微妙に私のはうが小さいので違和感が在つたが、私も仕合せな心持だつた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8331w/>

---

先生

2011年11月4日02時05分発行